前書き

本書は、聖書がどのようなことを語り、教えているものであるかを、各書をたどってそれを二頁に概略したものです。

聖書の各書を二頁にまとめることには少々無理が伴いましたが、比較的妥当だと思われる立場に立ち、聖書の各書の概略が一目で見られることを何よりも優先しました。

聖書を読むにあたって、その理解の一助とされることを願うものなので、少しでも役に立つ者になれば幸いです。

1998 年 1 月
稲城聖書教会にて

聖書の価値や真理に対する好奇心からその知識を持ちたいと思う人が多くいます。しかし、大抵の人は聖書から知識を得る前に、聖書の量や内容の豊富さに圧倒されて読むことを放棄してしまったりします。また、聖書の内容が多様なことや聖書の歴史的・文化的な背景が異なって理解しにくいことなどで諦めたりします。このように聖書を「複雑なもの」と思い、その知識を拒む人には、「簡単なもの」から聖書の世界へ入ってみることをお勧めします。数世紀の間多くの人々は聖書の研究に一生を捧げました。このように宝箱である聖書から真理を見出すことが出来ることを祈ります。

聖書を読むのに望ましい姿勢

聖書を読むことにおいて望ましい姿勢の一つは自発的な姿勢です。数学や化学も楽しく用いない限りは、なれることは出来ません。同じように、聖書を読むことにも自発的な姿勢を持って始まり、続くことが大切です。毎日定期的に時間を決めたり、読む量を決めたりして続けて聖書を読んでその内容と親しむことは、聖書から真理を見出すのに望ましい姿勢の一つです。

聖書を読んで理解するためには聖書以外の本も必要です。聖書が書かれた当時の人々には、聖書に書かれたことの意味について別に威圧感を持ちませんでした。なぜなら、私たちが新聞や雑誌を読む

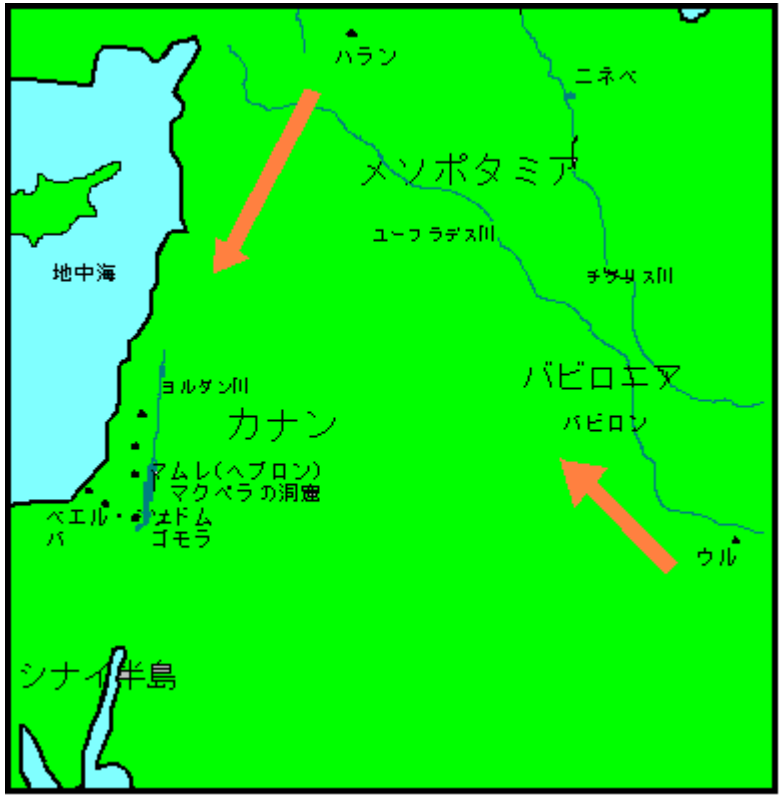
聖書を読むのに望ましい姿勢

のに辞書が要らないことと同じように、彼らは聖書の言葉や背景に慣れていた人だからです。しかし、私たちはヘブル語やギリシャ語で聖書が書かれた当時の知識を全く持っていません。ですから、私たちにはそれらのことを教える本、例えば聖書辞典などを参考にしながら読むことも望ましい姿勢の一つです。

Ｈ．Ａ．ケーリ（外科医者で真実なクリスチャン）は、「聖書研究の一番の秘訣はそれを行なうことだ」と語りました。みなさんも最後まで諦めずに聖書を読み続けてみてください。聖書が人間の本当の姿やこの世の諸問題と人間の苦しみに光を照らし、また、それらを越えて神の前に至る道を提示していることなど、宝箱を見出せると思います。そのためにこの本が役に立てれば幸いです。

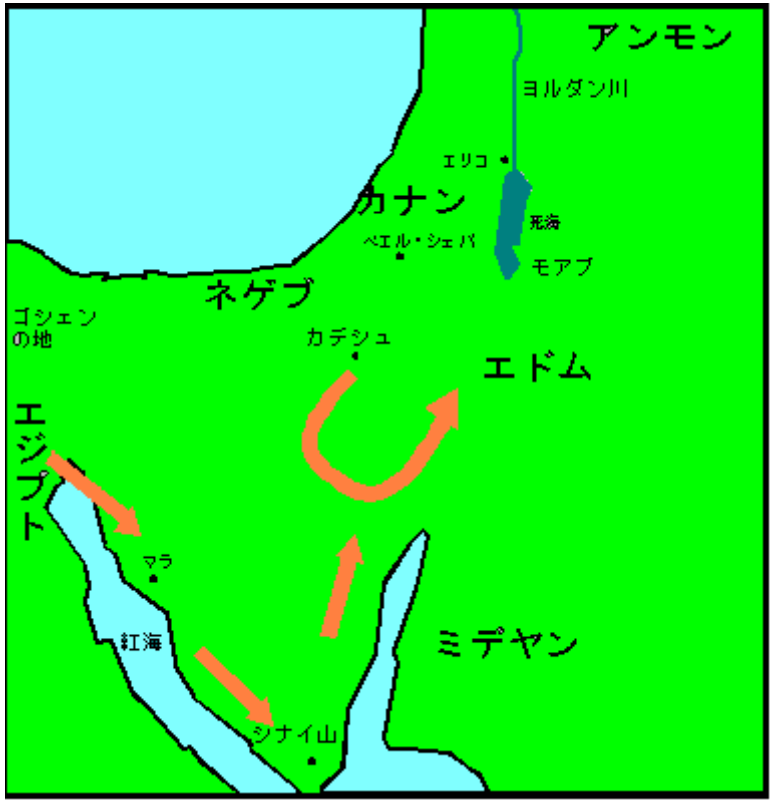
稲城聖書教会　牧師　金　俊起

1．族長時代（紀元前約 2000 年―1600 年）



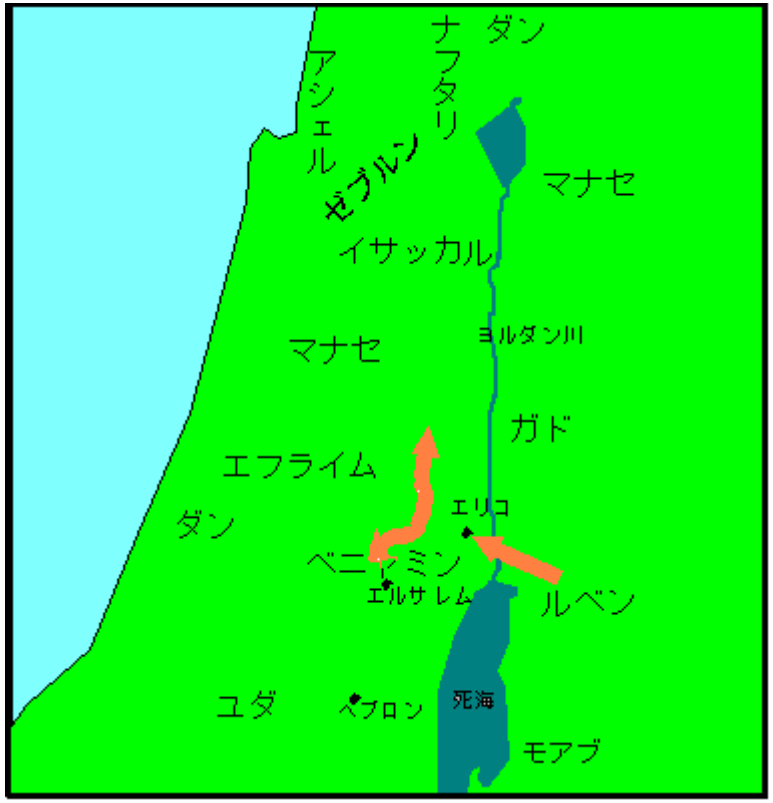
アブラハムは、神様の啓示に従ってウルからハランへ、ハランからカナンへと移り、住みました。彼は死ぬと、マレムの近くにあるマクペラの洞穴に葬られます。彼の子イサクは、ベエルシェバに住みます。イサクには二人の息子がいました。弟ヤコブは、相続権を横取りしたため、父のもとから伯父ラバンの住むハランに逃げます。そして、20 年あまりのハランでの苦労の末、12 人の息子を設けます。故郷を目の前にしたヤコブは、イスラエル（神様が支配される）と名づけられます。ヤコブ子ヨセフによって、家族全員はエジプトへ移住します。

2．出エジプトと荒野（紀元前約 1600 年―1400 年）



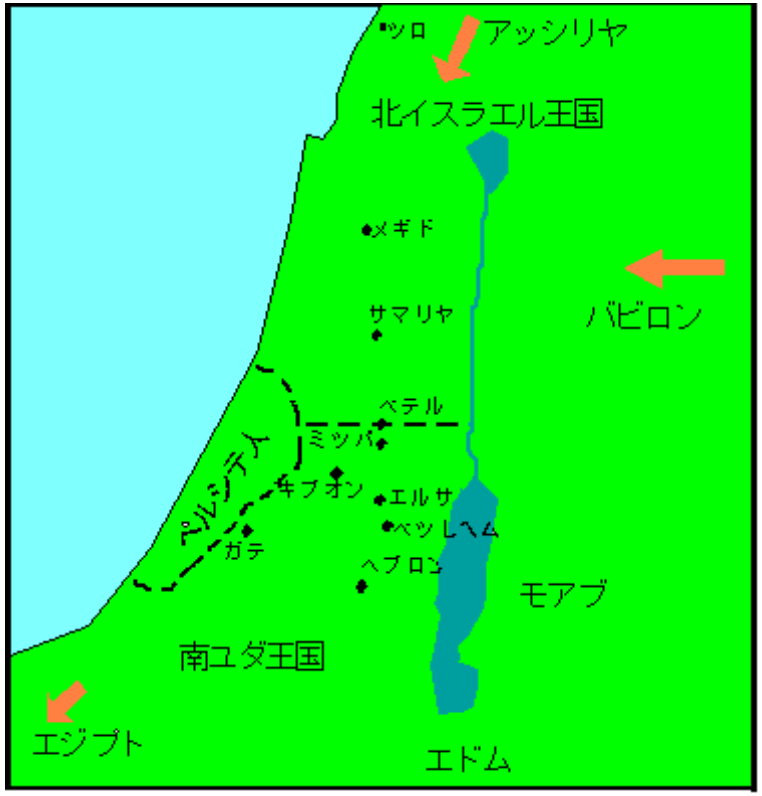
アブラハムに約束した通り、神様は、イスラエルを奴隷の地エジプトから救い出し、しもべモーセによって約束の地、カナンへ導きます。しかし、イスラエルの民がカデシュで神様の約束を信頼しなかったことで、38 年間もの長い間、荒野で暮らします。神様は、これらの期間をもってイスラエルに、律法や幕屋を与え、彼らが祭司の国であることを教えます。38 年間の荒野での生活で、エジプトを出る時からいた旧世代はみな荒野で死にますが、神は、約束を受け継ぐ新世代を起こさせ、モーセの後継者ヨシュアと共にカナンの地を与えます。

3．カナンの征服と士師時代（紀元前約 1400 年―1100 年）



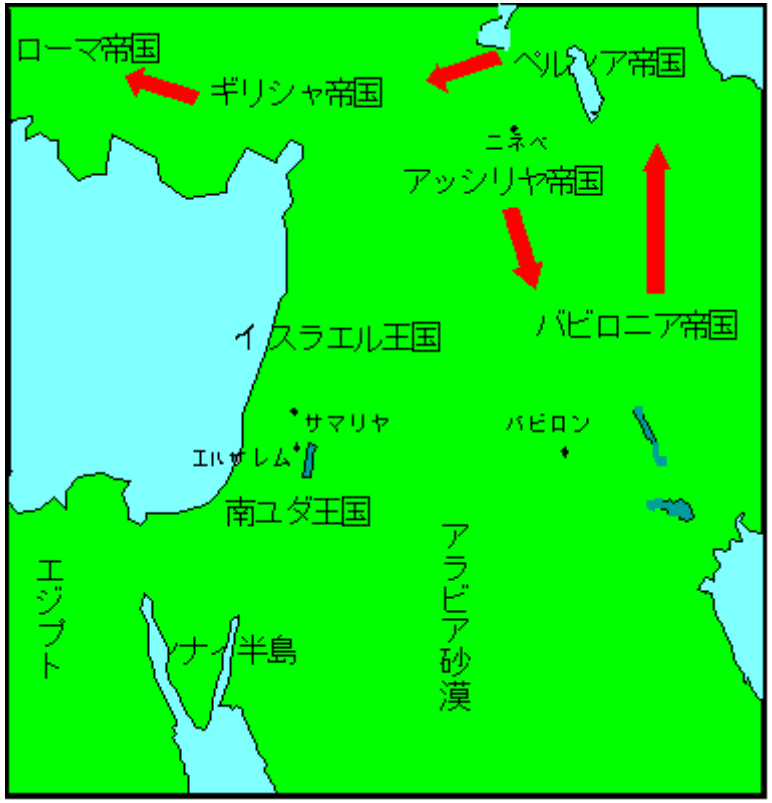
信仰によってヨシュアとイスラエル民は、神様の約束の地、即ち、カナンの地を占領し、12 部族によって分けました。しかし、ヨシュアの死後、イスラエルの民は神様の律法を守りませんでした。それで苦しみの目に遭わされた民は、神様に助けを祈り求めると、神様は彼らに「士師」たちを遣わし、救ってくださいます。しかし、士師たちが死ぬと、すぐにまた民は神様に聞き従いませんでした。何度も何度も繰り返される彼らの歴史は、まさに、カナンでの霊的放浪の歴史です。カナンでのイスラエルの歴史は、堕落→裁き→悔い改め→救いの悪循環でした。

4．イスラエル王国（紀元前約 1100 年―586 年）



イスラエルは、サウル、ダビデ、ソロモンの時代には、全体が一つの王国でした。ソロモン以後、王国は、南ユダ王国と北イスラエル王国に分裂しました。北イスラエル王国は、神様に従わなかったゆえに、アッシリヤに滅亡されます（紀元前 722 年）。民も囚人としてアッシリヤへ連れて行かれます。南ユダ王国は、神様の哀れみのゆえに、存続されますが、預言者たちに耳を傾けない姿は、北イスラエル王国と同じでした。それで、バビロンによってエルサレムが破壊（紀元前 586 年）され、民も捕囚としてバビロンへ連れて行かれます。

5．分裂王国以後のパレスチナの支配者



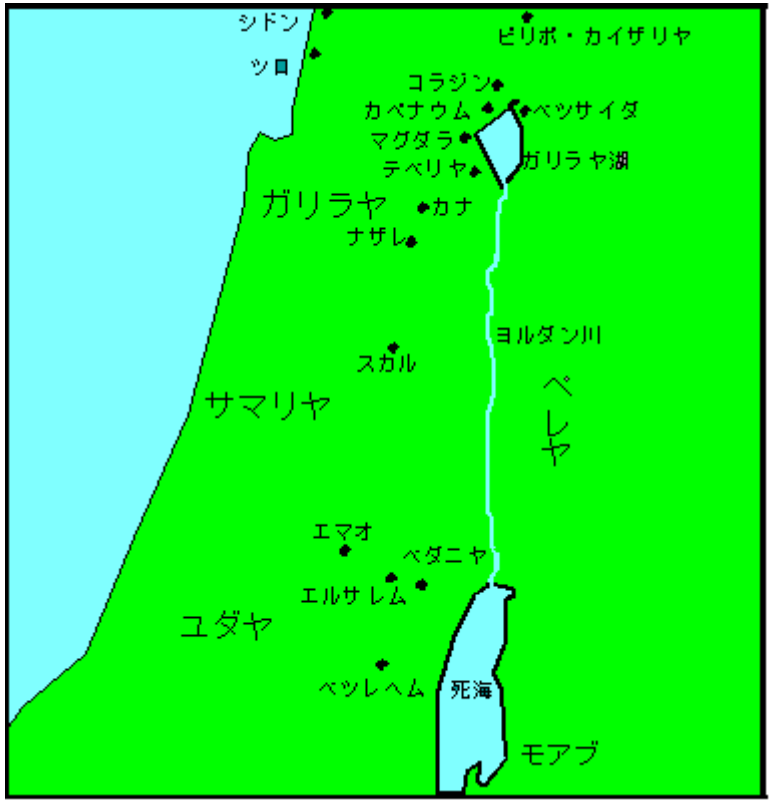
1．イスラエルの分裂王国の始まり（紀元前 922 年）
2．北イスラエル王国（紀元前 721 年まで、サマリヤ陥落）
3．南ユダ王国（～紀元前 586 年まで、エルサレム陥落）
4．アッシリヤ帝国（紀元前 1100～612 年、ニネベ陥落）
5．バビロニア帝国（紀元前 612～539 年、バビロン陥落）
6．ペルシア帝国（紀元前 539～333 年、帝国の崩壊）
7．ギリシャ帝国（紀元前 333 年～63 年、帝国の崩壊）
8．ローマ帝国のパレスチナ支配（紀元前 63 年～）

6．分裂王国の王と預言者たち（紀元前 9 世紀―5 世紀頃）

ソロモン王

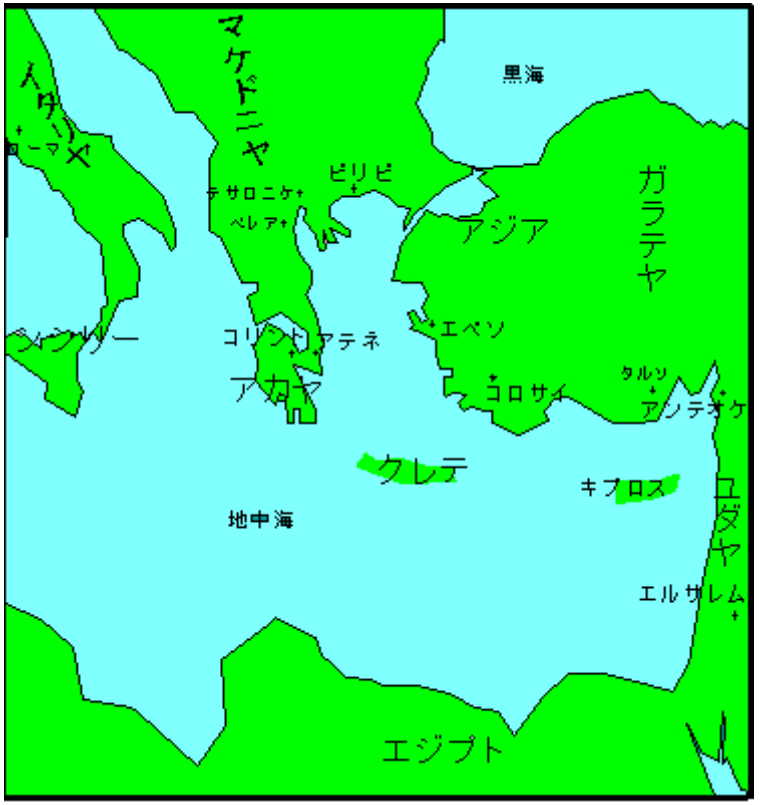
南ユダ王国	預言者	北イスラエル王国
（ダビデ家）		（ヤロブアム家）
レアブアム		ナダブ
アビヤム		（バシャ家）
アサ		エラ、ジムリ
	エリヤ	（オクリ家）
ヨシャバテ	エリシャ	アハブ、アハズヤ
ヨラム		ヨラム
アハズヤ		（エフー家）
アタルヤ	ヨナ	エホアハス
ヨアシュ	ヨエル	ヨアシュ
アマツヤ	ホセア	ヤロブアム 2 世
ウジヤ	アモス	ゼカリヤ、シャルム
ヨタム	ミカ	（メナヘム家）
アハズ	イザヤ	ペカフヤ
ヒゼキヤ		ペカ
マナセ		ホセア
アモン	ナホム	
ヨシヤ	ハバクク	
エホアハズ	ゼパニヤ	
エホヤキム	エレミヤ	
エホヤキン	オバデヤ	
ゼデキヤ	エゼキエル	
（バビロン捕囚時代）	ダニエル	
ゼルバベル		
エズラ	ゼカリヤ、ハガイ	
ネヘミヤ	マラキ	

7．イエスの時代（各福音書）



旧約聖書の最後の預言が発せられてから 4 世紀後、預言通り神の御子イエス様がベツレヘムでお生まれになります。イエス様は、ナザレで成長し、バプテスマのヨハネからバプテスマを受けます。そして、イスラエルのすべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを直されました。しかし、ユダヤの民はイエス様を拒み、イエス様を十字架で死なせました。神の御子であるイエス様は、3 日目に復活し、天に昇られ、私たちに救いをもたらしました。それで、だれでもイエス様を信じることで、永遠の命が与えられました。

8．教会の時代（使徒の働きから各書簡）



イエス様の復活から7 週間後、教会が誕生しました。それはエルサレムがユダヤ人の巡礼者であふれるペンテコステの日でした。その日、聖霊がイエス様を信じる弟子たちに下り、弟子たちは、聖霊の力によって、ユダヤとサマリヤ全土、および地の果てにまでイエス様の福音を宣べ伝えることができました。特に、パウロによってイエス様の福音は、ローマ帝国領に持ち運ばれます。パウロは幾つかの教会を開拓し、励まし、教えました。彼はまた、これらの時期に、新約聖書の重要な部分となる書簡を書きました。

創世記 4
出エジプト記 5
レビ記 6
民数記 7
申命記 8

ヨシュア記 9
士師記 10
ルツ記 11
第 1 サムエル記 12
第 2 サムエル記 13
第 1 列王記 14
第 2 列王記 15
第 1 歴代誌 16
第 2 歴代誌 11 17
エズラ記 11 18
ネヘミヤ記 19
エステル記 20

ヨブ記 21
詩篇 22
箴言 23
伝道者の書 24
雅歌 25

旧約聖書の目次

イザヤ書 26
エレミヤ書 27
哀歌 28
エゼキエル書 29
ダニエル書 30

ホセア書 31
ヨエル書 32
アモス書 33
オバデヤ書 34
ヨナ書 35
ミカ書 36
ナホム書 37
ハバクク書 38
ゼパニヤ書 39
ハガイ書 40
ゼカリヤ書 41
マラキ書 42

1. 創世記（The Book of Genesis）

●創世記の書名と著者：

「創世記」は、「始まり」という意味の書名で、世界の創造について記録していることから名づけられました。ヘブル語聖書では「初め」という書名で、ギリシャ語訳聖書では「起源」という書名で呼ばれました。この書物は、聖霊に導かれたモーセが既存の資料を用いて書きました。

●創世記の目的：

冒頭を飾る「初めに、神が天と地を創造した」という言葉は短い文章ですが、聖書全体を貫くものです。創世記は、神様以外のすべてのものの始まりについて、私たちに知らせています。ですから、創世記以外の聖書はこの書物と離して読むことはできません。また、創世記がなかったら、私たちは神様を知ることや、人間を含む宇宙の起源について知ることはできません。

●教えられること：

1)自然界（宇宙）、人間、罪、死、救い、家族、文明、国家、言葉など、神様以外のすべてのものの起源を教えます。しかし、その結末については何も語っていません。

2)神と自然、神と人間、人間と自然、人間と人間との関係が書かれてあり、その正しい関係が何かを教えます。

3)この世には二つの人類の家系があることを教えます。神に選ばれた者とそうでない者、あるいは、契約の民とそうでない者、といった二つの人類の家系です。

4)神様から始まって棺で終わる「人間の失敗の歴史」の記録であり、人間の愚かさを覆う「神の豊かな恵み」の記録であります。ですから、私たちはこの書物を通して、私たちがどんな状況での失敗であれ、神様の救いと恵みを期待することができることを教えられます。

後に表される全ての啓示の根は、創世記の中に深く植えられています。啓示を理解しようとする人は創世記から始まらなければなりません。

●創世記のあらすじ：

1．創造の記録（1ー2 章）
　1)宇宙の創造(1:1-2:4)
　2)人間の創造(2:4-25)
2．人間の堕落とその結果（3:1ー6:10）
　1)人間の堕落と追放(3 章)
　2)カインとアベル(4:1-24)
　3) 2 つの家系の始まり(4:25-6:10)
3．大洪水とノアの箱舟（6:11ー8:19）
4．人類の新しい出発（8:20ー11:32）
　1)神の約束(8:20-9:19)
　2)ノアの子孫(9:20-10:32)
　3)世界諸国民と言葉の始まり(11:1-32)
5．アブラハムの物語（11:27ー25:10）
6．イサクの物語（25:11ー26:35）
7．ヤコブの物語（25:21ー34、27:1ー36:43）
8．ヨセフの物語（37ー50 章）

●創世記の構造：

1 章-6:10	6:11-11 章	12 章-25:18	25:19-36	37ー50 章
創造と人類の堕落	大洪水と再出発	アブラハムの物語	イサクとヤコブ	ヨセフの物語

2. 出エジプト記（The Book of Exodus）

●出エジプト記の書名と著者:

「出エジプト記」は、イスラエル民族が奴隷の地エジプトから出たことを記録したので付けられた書名です。この出来事はエジプトのアメンホテプ 2 世（紀元前 1448ー24 年）の時代のものです。

この書物の著者は、創世記と同様にモーセです。創世記から申命記までは本来 1 冊の本でしたが、論理的や内容上の区別によって 5 冊に分けられました。この 5 冊の全部がモーセによって書かれたことで、「モーセ五書」と呼ばれています。

●出エジプト記の目的：

出エジプト記は創世記の後編です。アブラハムとの契約（創世記 15：12ー21）に基づいて展開されていく書物だからです。神様は、アブラハムに約束されたように、イスラエルの民を約束の地へ導くために、モーセを用いて契約を成就させます。ですから、この書物は、アブラハムと契約を結び、430 年が過ぎたにもかかわらず、変わらない誠実さでその契約を成就してくださる神様を示しています。

●教えられること：

1)奴隷から解放し、自由を得させる神様の救いを示し、その成就のための方法を教えます。

2)出エジプトの出来事は、「神様の救いの計画」において重要な出来事です。この書物の後半に出る律法や幕屋の設立規定も神様の救いの計画によって意味を持ちます。また、これらの出来事によってイスラエルは、神の救いの計画を宣布するために選ばれた長子、祭司の国となります。

3)この書物は、創世記にその根拠を置いて、祭司制度や幕屋を扱うレビ記、荒野での生活を扱う民数記、モーセの回顧録である申命記まで、その影響を及ぼす架橋の役割をしています。

出エジプト記　　全 40 章（1213 節）

「民族の起源を扱っている本の中で、「出エジプト記」のような世界歴史に重大な意味をもたらしたものはありません。」

●出エジプト記の内容：

1．モーセの出発（1ー11 章）
　1)奴隷状態のイスラエル(1 章)　2)モーセの召命(2-4 章)
　3)エジプト王と対決(5:1-7:13)　4)10 の災い(7:14-11 章)

2．過越と解放（12ー15 章）
　1)過越の祭り(12:1-13:16)
　2)エジプトから解放(13:17-15:21)
　　①紅海を渡る(14:15-31)　②モーセの歌(15:1-18)
　　③ミリヤムの歌(15:20-21)

3．荒野での導き（15:22ー18 章）

4．シナイ山での契約（19 章ー24:11）
　1)神の現れ(19:1-25)　2)十戒(20:1-21)
　3)契約の書(20:22-23:33)　4)契約の成立(24:1-11)

5．幕屋に関する規定（24:12ー40 章）
　1)幕屋の啓示(24:12-31 章)
　2)モーセの祈り(32-33 章)
　3)契約の更新(34 章)
　4)幕屋の建設(35-40 章)

●出エジプト記の構造：

1-11 章	12 章-15:21	15:22-18 章	19 章-24:11	24:12-40 章
モーセの出発	過越と脱出	荒野での導き	シナイ山と十戒	幕屋に関する規定

3. レビ記（The Book of Leviticus）

●レビ記の書名と著者:

「レビ記」は、神様への礼拝を担当していた祭司部族のレビ人に関する事柄という意味で付けられた書名です。レビ人は、神様と民との間を仲介する務めや幕屋の維持、管理をするために、神様に選ばれた人々です。この書物の著者は、モーセです。

●レビ記の目的：

この書物のすべての内容は、出エジプトから満 1 年が過ぎて幕屋を建てた1 月1 日(出エジプト記 40:17）からシナイ山を出た2 月 20 日まで（民数記 10：11）の1 カ月 20 日間の記録です。

この書物には、啓示された様々な律法や宗教的な祭り、制度などが記されていて、神礼拝の幕屋を中心とするイスラエルの民が神様の前でどのように歩むべきかを教えています。また、神様が罪を赦してくださることを、イスラエルの民が知る助けになるようにとの目的で書かれた書物です。

●教えられること：

1)創世記が人間の堕落の歴史を示すものであれば、出エジプト記は救いの歴史を、そしてレビ記は、神礼拝を教えます。
2)神様は「聖なる方」です。
3)「聖」、「血」、「贖い」などが中心的な言葉として使われています。これは、聖なる神様に仕える人々は血によって贖わなければならないという真理を示すためです。
4)神様が罪を赦してくださる方であることを知る助けになるようにと、書かれたものです。
5)キリストの大祭司長といけにえとしての務め、幕屋と聖所のことなどを理解する助けになるようにと、書かれました。

レビ記　全 27 章（859 節）

「レビ記は、神様の民の礼拝生活に関する指針と神様の前で聖なる民になるための指針などを教えるために記されたものです。

●レビ記の内容：

1．神礼拝：礼拝の手段（1―10 章）
- 1)捧げ物（(1-7 章)
  - ①全焼のいけにえ(1 章)　②穀物の捧げもの(2 章)
  - ③和解のいけにえ(3 章)　④罪のため(4:1－5:13)
  - ⑤罪過のため(5:14-6:7)　⑥祭司への指示(6:8-7:38)
- 2)祭司と聖所(8:1-10 章)
  - ①祭司長の聖別儀式(8 章)
  - ②祭司長の職務(9 章)
  - ③祭司長の不誠実(10 章)

2．神礼拝：礼拝者（11―27 章）
- 1)汚れの除去(11-16 章)
- 2)聖潔の保持(17-22 章)
- 3)時の聖別(23-25 章)
- 4)その他の律法(26－27 章)

●レビ記の構造：

1―7 章	8―10 章	11―16 章	17―25 章	26―27 章
捧げ物	祭司と聖所	汚れ除去と聖別	聖潔の保持	その他の律法

4. 民数記（The Book of Numbers）

●民数記の書名と著者:

「民数記」は、1 章と 26 章に記されている、人口調査を行った記事から「民を数える」という意味で付けられた書名です。モーセ五書の第4 書である民数記の著者は、モーセです。民数記がモーセによって書かれたと記されています（33:2)。

●民数記の目的：

この書物は、イスラエルの民がエジプトから出て、約 11 ヶ月間滞在したシナイ山から「約束の地」カナンの境界に至るまでの、約 40 年間の記録です

この書物は、神様が「約束」を誠実に守られることを教えます。神様は約束を忘れてつぶやくイスラエルの民の不信仰に対しては厳しく断罪し、処罰します。しかし、その度ごとに忍耐深く、折にかなった恩恵深い助けをも与えます。それで、イスラエルの民は、神様に背くことがどんなに苦しいことか、そして「約束の地」は、信仰をもって追い求むべきだということを学びます。

●教えられること：

1)イスラエルの民は、不信仰と不従順によって約束の地に入れず、荒野をさまよい滅びてしまいます。信仰者にとって警戒すべきことは、不信仰と不従順です。

2)荒野放浪が書かれていますが、もし、イスラエルの民がカデシュで反逆せずに、そこからまっすぐカナン攻略を始めたのであれば、荒野での生活は数ヶ月以内で終わりました。

3)イスラエルの民の不信仰が強調されていますが、神様の忍耐深さも強調されています。また、神様はご自身の契約の約束を継がせるために、新世代を起こさせることも教えています。

民数記　　全 36 章（1288 節）

民数記は、神様は「約束通り」行なう方で、
私たちは神に信頼すべきことを教えます。
神様に背くことの苦しみも教えています。

●民数記の内容：

1．旧世代（1 －12 章）：旅への備え
　1)1 回目の人口調査(1-4 章)：出発の準備として
　2)イスラエル民族の聖潔（霊的、道徳的準備、5 章-10:10）
　3)行軍の出発(10:11-12 章)

2．荒野をさすらう旧世代（13－25 章）
　1)12 人の斥候(13-14 章)　　2)放浪中の出来事(15-19 章)
　3)モアブ草原へ行軍(20 章-22:1)
　　①アロンの死(20:22-29)
　　②青銅の蛇(21:4-9)
　4)バラク、バラムに使者を派遣(22:2-24 章)
　5)イスラエルの偶像礼拝、不品行(25 章)

3．新世代（26－36 章）：カナンへ入るための備え
　1) 2 回目の人口調査(26-27 章)：後継者ヨシュア(27:12-)
　2)いけにえと誓願に関する規定(28-30 章)
　3)征服と土地の分配(31-36 章)

●民数記の構造：

1－9 章	10－14 章	15－25 章	26－36 章
旅への備え：第 1 人口調査	行軍と 12 の斥候	荒野をさすらう	カナンへ入るための備え：第 2 人口調査

5. 申命記（The Book of Deuteronomy）

●申命記の書名と著者:

この書物は、ギリシャ語訳聖書から「第 2 の律法」という意味の書名で名づけられました。「申命記」は、漢訳聖書から来た書名で、「重ねて命令する、戒めを詳しく説明する」という意味の書名です。

申命記は、モーセ五書の第 5 書であり、著者はモーセです。この書物の中にあるモーセの死の記録（34 章）は、契約の箱を運ぶレビ人や後継者ヨシュアによって加筆されました。

●申命記の目的：

出エジプトをした旧世代が神様に対する不従順の故に荒野で死に、律法に慣れてない新世代が主役になってカナンの地へ入ります。その新世代に神様の律法の教育が必要となりました。すなわち、この書物は、律法に慣れてない新世代が、律法の教育によって約束された地で、神様の民としてふさわしい生活をするための備えを示しています。また、旧世代の過ちを教訓とし、信仰と従順の重要性を悟らせ、宗教的、道徳的な堕落を防ぐことを目的にしています。

●教えられること：

1)申命記は、出エジプト記の反復ではありません。過去を顧みることをしながら、将来に目を向けています。新世代がカナンの地で定着し、幸せを維持していくためには、何よりも神様の命令に対する従順が求められました。

2)この書物は、モーセがイスラエルの民に告げた決別の説教が主な内容です。モーセの説教は、「思い出しなさい」、「上を見上げなさい」、「気をつけなさい」という主題で、全体の内容を理解することができます。

3)この書物には、今日の社会生活及び制度に対しても示唆に富むものをもっています。

申命記　　全 34 章（959 節）

申命記は、先祖の過ちを教訓とし、神様への従順の重要性を悟らせ、宗教的、道徳的な堕落を防ぐことを願って書かれました。

●申命記の内容：

1 .40 年間の歴史の回顧(1 章ー4:43)：「思い出しなさい」
- 1)シナイ山からガデシュ(1 章)
- 2)ガデシュからモアブ(2:1-23)
- 3)ヨルダンの東側の征服(2:24-3:20)
- 4)ヨシュアに激励を(3:21－29)
- 5)モアブ草原でのイスラエル(4:1－43)

2 .律法の再教育（4:44ー26 章）：「上を見上げなさい」
- 1)神に対する律法(4:44-11 章)
- 2)礼拝と聖潔に関する律法(12-26 章)

3 .契約の批准と更新（27ー30 章）：「気をつけなさい」
- 1)祝福と呪い(27 章-29:1)
- 2)モーセの第三の説教(29:2-30 章)

4 .モーセの生涯の締めくくり（31ー34 章）
- 1)みおしえの書の完成(31-32 章)
- 2)モーセの祝福のことば(33 章)
- 3)モーセの死(34:1-8)　　4)結語(34:9-12)

●申命記の構造：

1:1-4:43	4:44-26:19	27-30 章	31-34 章
歴史の教訓	律法の再教育：十戒・儀式法 市民法・社会法	契約の批准と更新	モーセの最後

6. ヨシュア記（The Book of Joshua）

●ヨシュア記の書名と著者：

この書物は、ヨシュアという主人公の名前から名づけられました。名前の意味は、神様は救いです。ヨシュアはモーセの後継者として選ばれた人です。

この書物の著者は不明ですが、イスラエルをカナンの地へ導いたヨシュア自身であったかも知れません。この書物にはヨシュアの死後のことも記されているので、そのところにおいては加筆されたと思われます。

この書物が書かれたのは、イスラエルがカナンの地に侵入した時期で、紀元前 1370 年前後だと思われます。

●ヨシュア記の目的：

この書物は、カナンの地を征服すること（1 ―12 章）と、その地に定着する時までの歴史（13―24 章）を語っています。すなわち、アブラハム以後、エジプトや荒野で暮らして来たイスラエルの民が「約束の地」であるカナンの地で建国の基礎をつくることで、神様の約束の成就を示しています。同時に、この地を完全に得ることができなかったイスラエルの失敗をも示しています。

●教えられること：

1)カナンの征服は、単なるイスラエルの民のための一方的な戦争ではなく、カナンの住民の罪に対する神様の裁きです。征服を聖戦(Holy War)として扱っています。

2)勝利と約束の成就の書として、新約聖書の「使徒の働き」にたとえられます。

3)ヨシュアのギリシャ語式の名はイエスです。カナンの地の征服の中には、イエス様の働きを示唆するものが数多く書かれています。

ヨシュア記　全 24 章（658 節）

ヨシュア記は、荒野で暮らしたイスラエルの民がカナンの地で建国の基礎をつくる過程を見せることで、神様の「約束の成就」を示します。

●ヨシュア記の内容：

1．カナンの地を占領（1―12 章）
- 1)占領の準備(1-5 章)：
  - ①スパイとラハブ(2 章)　②ヨルダン川の渡河(3-5 章)
- 2)中部地域の占領(6-8 章)
  - ①エリコの陥落(6 章)　②アイとの戦争(7-8 章)
- 3)南部地域の占領(9－10 章)
- 4)北部地域の占領(11-12 章)

2．カナンの地の分割（13―24 章）
- 1)ヨルダン川の東側(13 章)
- 2)ヨルダン側の西側(14-19 章)
  - ①カレブのヘブロン領有(14:6-15)
  - ②ユダ族の領土(15:1-63)
  - ③ヨセフ族の領土(16-17 章)
- 3)宗教的な共同体の定着(20-21 章)：逃れの町とレビ人の町
- 4)永遠に定住する条件(22-24 章)

●ヨシュア記の構造：

1―12 章	13―19 章	20―21 章	22―24 章
カナン占領	カナン定着	宗教的共同体	安住の条件

7. 士師記（The Book of Judges）

●士師記の書名と著者：

この書物は、さばきつかさという意味での士師たちが中心なので、「士師記」と名づけられました。ヨシュアの死からサムエルが生まれる前までのおよそ 350 年間のイスラエルは、全国民を統治する指導者や機構がありませんでした。このような状況の中で、士師たちは政治的、軍事的指導者で、この書物は、士師たちによって進められた歴史書です。

士師記の中で著者について正確に知ることはできません。著者はサムエルの時代の人であったと推定される程度です（紀元前 11 世紀頃）。

●士師記の目的：

この書物は、王がなかった時代を背景とし、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた時期のことが書かれています。それで招いた混乱期を、イスラエルの政治的、道徳的宗教的な堕落として説明しています。また、堕落の結果、イスラエルの進路がどのようになったかをも説明しています。

また、このような時代であっても、神様が士師たちを通してご自身の民を治め、また敵から救って下さることを証しするために書かれました。

●教えられること：

1)士師記は、罪による悲しい姿を見せています。そのことを、「罪の悪循環」として示しています。罪の悪循環は、「背信→裁き→回心→救い」という図式で示されています。

2)イスラエル民族の妥協が、イスラエルの失敗に繋がったことを示しています。

3)神様から離れると、苦役と圧迫の生活に導かれます。

4)神様は、「救う者」を起こすことによって、イスラエルをご自身に引き寄せ、その恵みを示します。

士師記　　全 21 章（618 節）

士師記は、イスラエルの罪による悲しい姿を「罪の悪循環」、すなわち、「堕落→裁き→回心→救い」という図式で示しています。

●士師記の内容：

1．神に頼るイスラエル（1 章－2:5）
　1)ユダとシメオンによる戦い(1:1-21)
　2)他の部族の戦い(1:22-36)
　3)主の使いの宣告(2:1-5)

2．反復の歴史：背信とその結果（2:6－16 章）
　1)序言(2:6-3:6)
　2)第 1 の背信：士師オテニエル(3:7-11)
　3)第 2 の背信：士師エフデ、シャムガル(3:12-31)
　4)第 3 の背信：士師デボラとバラク(4-5 章)
　5)第 4 の背信：士師ギデオン(6-8 章)
　6)第 5 の背信：アビメレク、士師トラ、ヤイル(9 章-10:5)
　7)第 6 の背信：士師エフタ、イブツァン、エロン、アブドン
　8)第 7 の背信：士師サムソン(13-16 章)

3．付録：混乱状態（17－21 章）
　1)ミカの家とダン族の移動(17－18 章)
　2)ギブアでの暴行事件とベニヤミン族の没落(19－21 章)

●士師記の構造：

1:1－2:5	2:6－16 章	17－21 章
序言： 神に頼る民	反復の歴史：堕落→ 裁き→回心→救い	付録： 混乱状態

8. ルツ記（The Book of Ruth）

●ルツ記の書名と著者：

ヘブル語聖書や漢訳聖書は、主人公の名前から書名をつけて呼びました。この書物はルツという、モアブの国の一人の婦人をめぐるものなので、「ルツ記」と名づけられました。この書物は、士師記の時代にあった物語です。

ルツ記の著者は不明ですが、この書物にダビデ王の名が登場することから、著者は、ダビデをよく知っている同時代の人物だと思われます。

●ルツ記の目的：

この書物は、モアブ人という外国人ルツからダビデの王朝が胎動することで終わっています。ルツは、結婚を通して神様を信じ、すばらしい信仰者となります。また、ルツの信仰と愛は、彼女自身をダビデ王朝の系図に入れさせ、イエスの系図（マタイの福音書 1:1-16）にまでつながるようにさせます。

このルツの物語を通して、この書物は神様はユダヤ人だけの神様はなく、すべての民族の神様であることと、外国人であっても救われて神様の民となれることを教えます。また、士師記の時代であって、神様の恵みを明確に表すために書かれました。

●教えられること：

1)男性がその中心である他の書物と比べて、弱い女性の一生が焦点で合わせられています。また、神様の傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない（イザヤ 42：3 ）恵みを学ぶことができます。

2)すべてが神様ご自身の御心を成し遂げるために用いられたものであることを教えます（たとえば、飢饉、息子の死など）。

3)生と死のすべての問題が神様の御手にあること、つまり、神様の摂理を学ぶことができます（救いと恵みを期待することができる）。

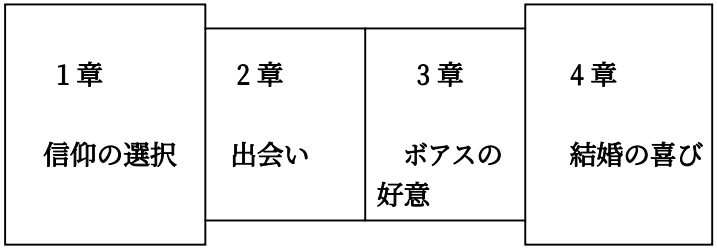
ルツ記　全 4 章（85 節）

ルツ記は、外国人女性の信仰と愛を中心に、ダビデ王朝が胎動することと、だれでも信仰によって救われることを教えます。

●ルツ記の内容：

1．エリメレクの家族とルツ（1:1―5）
2．ベツレヘムへの帰郷（1:6―22）
　1)ナオミの勧め(1:6-15)
　2)ナオミと共にするルツ(1:16-22)
3．ボアズとの出会い（2 章）
　1)出会い(2:1-16)
　2)ナオミに尽くすルツ(2:17-23)
4．夜の間の出来事（3 章）
5．買い戻しの交渉（4:1―12）
6．ダビデの先祖になるルツ（4:13―22）

●ルツ記の構造：



9. 第１サムエル記（First Book of Samuel）

●第１サムエル記の書名と著者：

この書物が最初書かれた時は、第 2 サムエル記と一緒になっていました。それが紀元前２世紀のギリシャ語訳聖書から、2 冊に分けられました。この書物が「第 1 サムエル記」という書名となったのは、サムエルが本書に出て来る最初の重要な人物で、サウル王とダビデ王に油注ぎを行ったからです。

この書物の著者は、不明です。記録年代は、分裂王国の直後（紀元前 922 年）だと思われます。

●第１サムエル記の目的：

この書物は、士師時代の末期のサムエルを中心として、イスラエルの王国設立に至るまでの大変化の歴史を扱っています。恐らく紀元前 1075ー1010 年頃の期間にわたるものと推定されます。イスラエルの王国設立の背景と過程、発展を、特に人間の失敗の歴史を通して見せ、メシヤの王国への希望をもたらします。すなわち、イスラエルの王国の設立の過程を通し、ダビデ王朝を確立することにより、メシヤに至る血筋と希望を与えるために記されました。

●教えられること：

1)士師体系から王政体系への転換を人間の失敗という観点から記述しています。また、油注がれた者に絶滅をもたらした不従順がエリ祭司とサウル王を通して書かれています。

2)祈りが強調されています。サムエルの名の意味は「神に願い求めた」で、サムエルの祈りが物語の中心になっています。

3)「神は…王を廃し、王を立て」(ダニエル書 2:21)という教えのように、イスラエルの王国の変化と発展の主体は、神様です。

第１サムエル記　全 31 章(810 節)

第１サムエル記、イスラエルの王国設立の背景、過程、発展を失敗の歴史を通じてメシヤ王国への希望をもたらしています。

●第１サムエル記の内容：

1．イスラエルの最後の士師／サムエル（1ー7 章）
　1)サムエルの誕生と大祭司長エリ(1-3 章)
　　①ハンナの祈りとサムエルの誕生、献身(1 章-2:11)
　　②エリ家の罪と呪い(2:12-36)
　　③サムエルの召命(3 章)
　2)士師サムエル(4-7 章)
　　①契約の箱の物語(4:1-7:2)　②ミツパ集会(7:3-17)

2．イスラエルの最初の王／サウル（8ー15 章）
　1)サムエルとサウル(8-12 章)
　　①サウルへの油注ぎ(8-11 章)　②サムエルの説教(12 章)
　2)サウル王の統治(13-15 章)

3．イスラエルの選ばれた王／ダビデ（16ー31 章）
　1)サウルとダビデ(16-20 章)
　2)逃亡者ダビデ(21-27 章)
　3)サウル王の最後(28-31 章)

●第１サムエル記の構造：

1ー7 章	8ー15 章	16ー31 章
最後の士師：サムエル	最初の王：サウル	選ばれた王：ダビデ

10. 第 2 サムエル記（Second Book of Samuel）

●第 2 サムエル記の書名と著者：

紀元前 2 世紀に訳されたギリシャ語訳聖書からサムエル記は二つに分けられました。それは、サムエル記の内容がサウルとダビデの王国の歴史で分けられることと、訳文が記された巻物の長さに限度があったことの故だと思われます。このような分類は後の多くの訳本に影響して、今はすべての訳本に適用されるようになりました。

著者は、明確ではありませんが、第 1 歴代誌 29：29 に記されているように、サムエル、ナタン、ガドによるダビデ王の言行録があったことから、彼らによって書かれたと推定されます。

●第 2 サムエル記の目的：

この書物は、内容上、サウルの死（紀元前 1010 年）からダビデ統治の末期（紀元前 973 年）までの約 40 年間のイスラエル歴史を記録しています。この歴史を通して、神政王国であるダビ　デ王朝の定着と発展過程を見せています。ダビデ王朝の神政王国という側面には、やがて到来するメシヤ王国の予告という性格があります。

●教えられること：

1)神様の約束が成就されることにおいて、神様への信頼と忍耐は、私たちにとっては必ず必要なものです。

2)神様の御心にかなう人であっても罪を犯し、その罪が赦されても神に懲らしめられることがあります。ダビデの犯罪後の生涯は、没落と悲劇的であったと記しています

3)神様は、人間的な欠陥があるのにも関わらず、ダビデと「ダビデ契約」を結んで、ダビデを通して御心が成就されることを喜びました。

第 2 サムエル記　全 24 章(695 節)

第 2 サムエル記、神政王国であるダビデ王朝の定着と発展過程を見せながら、到来するメシヤ王国を待望させる預言者的歴史書です。

●第 2 サムエル記の内容：

1．ダビデの繁栄（1－10 章）
　1)ダビデの政治的な勝利(1-5 章)
　2)ダビデの霊的な勝利(6-7 章)
　　①契約の箱と天幕の確保(6 章)
　　②ダビデ契約(7:1-17)
　　③ダビデの祈り(7:18-29)
　3)ダビデの軍事的な勝利(8-10 章)：ペリシテなどを征服

2．ダビデの沈滞（11－20 章）
　1)ダビデの姦淫と殺人(11 章)
　2)ダビデ家の災難(12-13 章)
　3)ダビデ王国の災難(14-20 章)

3．付録（21－24 章）
　1)サウルの子孫の処罰(21:1-14)2)戦争の英雄(21:15-22)
　3)ダビデの感謝の歌(22 章)　　4)最後の言葉(23:1-7)
　5)ダビデの勇士たち(23:8-39)　6)ダビデ王の人口調査(24 章)

●第 2 サムエル記の構造：

1－10 章	11－20 章	21－24 章
ダビデの繁栄：勝利者ダビデ	ダビデの沈滞：罪と災難	付録：ダビデの感謝の歌

11. 第１列王記（First Book of Kings）

●第１列王記書の名と著者：

この書物は、内容的には前のサムエル記に続くものを持っています。すなわち、ダビデ王以後のイスラエルの王たちに関する記録なので、「列王記」と名づけられました。

著者について正確に知ることはできません。ある人々は、預言者エレミヤや同時代の誰か他の人（その人はバビロン捕囚の悲劇をよく知っている敬虔な人）だと考えています。記録年代はエホヤキンの復権（紀元前 562 年）から第1 次捕囚帰還（紀元前 537 年）までの期間だと思われます。

●第１列王記の目的：

この書物は、内容上、ダビデの晩年からアハブとヨシャパテ王までの歴史（約 120 年間）を記録しています。その記録の目的は「王国の興亡の原因」を示すためです。神様の教えに従う時イスラエルには繁栄が保証されましたが、神様から離れた時には道徳的堕落と共にイスラエルの王国が衰えてしまったことを教えています。

●教えられること：

1)王国の歴史を、政治的な業績などによって評価するのではなく、宗教的で、道徳的な側面から記述しています。そのために預言者の活動が目立ちます（エリヤとエリシャ）。

2)歴代のすべての王たちに対する評価を二人の基準の人、つまり、南ユダ王国は敬虔なダビデ王を、北イスラエル王国は、不敬虔なヤロブアム王をその基準としています。

3)神殿の意味や神の霊的概念を明確にしています。また、神殿は神様の御名のために建てられたものであることを教えます。

第１列王記　　全 22 章（816 節）

第 1 列王記は、イスラエル王国の興亡の原因を教えます。神様に従う時は王国に繁栄が、神様から離れたら衰えてしまうことを教えます。

●第１列王記の内容

1．王国の成立（1―2 章）
　1)ソロモンの王位継承(1:1-2:12)
　2)王国の強化(2:13-46)

2．王国の栄光（3―10 章）
　1)ソロモンの知恵(3-4 章)　2)神殿建築(5-8 章)
　3)ソロモンへの神の祝福(9 章)　4)ソロモンの栄光(10 章)

3．王国の分裂（11 章―12:14）
　1)ソロモンの堕落と死(11 章)　2)王国の分裂(12:1-24)

4．王国の衰退（12:25―22 章）
　1)ヤロブアムの北イスラエル王国治世(12:25-14:20)
　2)レハブアムの南ユダ王国治世(14:21-31)
　3)ユダ王アビヤムとアサの治世(15:1-24)
　4)北王国の 5 人の王たち(15:25-16:28)
　5)北王国のアハブの治世(16:29-22:40)：エリヤとエリシャ
　6)ヨシャパテとアハズヤの治世(22:41-53)

●第１列王記の構造：

1 ―11 章	12―16 章	17―22 章
ソロモンの治世	王国の分裂とその後	預言者エリヤの活動

12. 第 2 列王記（Second Book of Kings）

●第 2 列王記の書名と著者：

ヘブル語聖書でのサムエル記と列王記は、1 つの書をなしていたものです。それが後のギリシャ語訳聖書で、これらの書物がイスラエルの王国の歴史を扱っていることから、「もろもろの王国α、β、γ、δ」と名づけられました。「列王記」は、これらの背景から付けられた書名です。

この書物は、南ユダの王ヨシャパテと北イスラエルの王アハズヤから、アッシリヤとバビロニヤ捕囚時代までの約 300年間の歴史を語っています。著者と年代は、第 1 列王記と同じで、霊感のもとで既存文書を用いて書いた（むしろ編集した）と思われます。既存の資料は、「ソロモンの業績の書」、「イスラエルの王たちの年代記の書」、「ユダの王たちの年代記の書」などです（第 1 列王記 11：41、14：19、29）。

●第 1 列王記の目的：

この書物は、神様に対する礼拝や道徳基準を失ったイスラエルが預言者による神の言葉を拒んだり、偶像礼拝と背信に陥ることで、拒絶と捕囚の結果をもたらしたということを示すために書かれました。同時に、失敗や堕落、背教、犯罪などをくりかえす諸々の王たちの歴史を通して、メシヤ王国に待望を抱くようにする性格をも持っています。

●教えられること：

1)ダビデの家系（11:1-3）と律法(22:8-20)の消滅する危機感が明確に語られています。

2)第 1 列王記の中心内容は、神殿建築と分裂王国のことでしだが、第 2 の中心内容は、神殿の破壊と王国の滅亡です。それらの内容は、イスラエルの民が「律法を守れば祝福を受け、拒めば呪い受ける」という主題で展開されています。

第 2 列王記　　全 25 章（719 節）

第 2 列王記は、神礼拝や道徳基準を失ったイスラエルが、預言者の警告した通りに滅亡したことを教えるために書かれました。

●第 2 列王記の内容：

1．預言者エリヤの働き（1 章ー2:2）

2．預言者エリシャの働き（2:3ー13:21）

1)やもめの壷(4:1-7)　2)シュネムの女と息子(8-37)
3)災難による苦しみ(38-44)　4)ナアマンの癒し(5 章)
5)沈んだ釜(6:1-7)　6)アラムとの戦争の援助(8-23)
7)飢饉からの援助(24-7:20)　8)シュネムの女と飢饉(8:1-6)
9)エフとハザエル(9:1-16)　10)最後の預言と死(13:14-21)

3．北イスラエル王国の滅亡（13:22ー17 章）

4．南ユダ王国の滅亡（18ー25 章）

1)ヒゼキヤ王(18-20 章)
2)ヨシアの宗教改革(22-23 章)
3)南ユダ王国の悪政(24 章)
4)エルサレムの陥落(25 章)

●第 2 列王記の構造：

1:1-2:2	2:3-13:21	13:22-17:41	18:1-25:30
エリヤの活動	エリシャの活動	北イスラエルの滅亡	南ユダの滅亡

13. 第１歴代誌（First Book of Chronicles）

●第１歴代誌の書名と著者：

ヘブル語聖書での歴代誌は1 冊のもので、「日々の出来事」と呼ばれました。それがギリシャ語訳聖書では、「省略されてきた記録」となり、サムエル記や列王記の補足的意図をもって書かれたと説明されてきました。「歴代誌」という書名になったのはラテン語訳聖書からで、イスラエルの代々の王の歴史を記しているという意味で付けられたものです。

この書物は、エズラによって書かれたと思われます。そして記録年代は、エズラ記の記録年代を越えない紀元前 450 年頃だと思われます。

●第１歴代誌の目的：

この書物の読者は、バビロンの捕囚から帰ってきたイスラエルの民です。彼らは、帰還してしばらくは希望に燃えた信仰生活に励みましたが、さまざまな混乱や多くの難問を抱えていました。それで、著者は読者に対して、イスラエルの民に与えられた偉大な伝統と使命を思い起こさせ、彼らを奮い立たせようとします。特に、神殿を準備したダビデ、それを完成したソロモン、そして神殿を尊んだ王及びその時代の祝福と、神殿をなおざりにして神様から離反した王及びその時代の災いについて記し、その教訓を与えようとしました。

●教えられること：

1)アダムから始まる壮大な系図が記されています。

2)レビ人の幕屋時代から神殿建設後の奉仕に至るまでの、その活躍が記述されています。

3)列王記は、預言者的な立場からの歴史記述で、イスラエルの従順をその目的とします。歴代誌は、祭司的な立場から、神政体制を再現することを目的としています。また歴代誌は、列王記の補足的な文書の役割をしています。

第１歴代誌　　全 29 章（942 節）

第１歴代誌は、帰還民にイスラエルの民に与えられた偉大な伝統と使命を神殿を中心に思い起こさせ、彼らを奮い立たせようとしたものです。

●第１歴代誌の内容：

1．系図（1―9 章）
　1)アブラハムまで(1:1-27)　　2)ヤコブまで(1:28-54)
　3)ダビデまで(2 章)　　4)捕囚期まで(3 章)
　5)12 部族の系図(4-8 章)　　7)サウルの系図(9:35-44)
　6)捕囚期から帰還後まで残留した人の系図(9:1-34)

2．サウル王の死（10 章）

3．ダビデ王の治世（11―20 章）
　1)ダビデ王の即位(11-12 章)
　2)神の箱の移動(13-17 章)
　3)ダビデ王の軍事的勝利(18-20 章)

4．神殿建築（21―29 章）
　1)神殿建築の準備(21-27 章)
　2)ダビデの晩年の励ましと賛美(28-29 章)

●第１歴代誌の構造：

1―9 章	10 章	11―20 章	21―29 章
壮大な系図	サウル王の死	ダビデ王の治世	神殿建築

14. 第 2 歴代誌（Second Book of Chronicles）

●第 2 歴代誌の書名と著者：

ヘブル語聖書では、「日々の出来事」という書名で呼ばれました。それがギリシャ語訳聖書から「省略されてきた記録」という書名となり、サムエル記や列王記と同時代の歴史を扱っていながら、それらに含まれていない多くの事柄を記述しています。「歴代誌」という書名は、イスラエルの代々の王の歴史を記しているという意味で名づけられました。

著者を明確に知ることはできません。しかし、この書物とエズラ記との間には何らかの関連があることから、著者がエズラであると考えられます。記録年代はエズラ記を越えない紀元前 450 年頃であると思われます。

●第 2 歴代誌の目的：

この書物は、捕囚から帰還したイスラエルの民に、与えられている偉大な伝統と使命を思い起こさせ、彼らを奮い立たせようとしました。たとえば、心から礼拝を捧げ、神殿を尊んだ王とその時代の祝福と、礼拝および神殿をなおざりにし、神様から離反した王とその時代の災いを書き記すことで、彼らに教訓を与えようとしました。すなわち、神殿を尊び、神様に従った王は祝福を受けますが、神に背いて偶像礼拝に陥った王は災いを受けたことを心に銘記させ、警告を与えています。

●教えられること：

1)サムエル記、列王記の言わば補足的な文書の役割をします。特に、神様に従った王たちを中心として記録しています。分裂王国の記事は、ダビデの家系に属する南ユダ王国の諸王の歴史に絞って書いてあります。

2)祭司的な観点から記述しています。祭司的観点というのは、列王記が預言者的観点から書かれていることとの比較です。

第 2 歴代誌　全 36 章（822 節）

第 2 歴代誌は、神殿を尊び、神様に従った王の祝福と、神様に背いて偶像礼拝に陥った王の災いを人々の心に銘記させ、警告しています。

●第 2 歴代誌の内容：

1．ソロモン王の統治（1―9 章）
　1)ソロモンの即位（1 章）　2)神殿の建築（2 章）
　3)ソロモンの栄光（3 章―9:28）　4)ソロモンの死（9:29-30）

2．南ユダ王たちの統治（10―36 章）
　1)レハブアム王（10―12 章）　2)アビヤ王（13 章）
　3)アサ王（14―16 章）　4)ヨシャパテ王（17―20 章）
　5)ヨラム王（21 章）　6)アハズヤ王（22:1―9）
　7)アタルヤ王（22:10―23:15）　8)ヨアシュ王(23:16－24 章)
　9)アマツヤ王（25 章）　10)ウジヤ王（26 章）
　11)ヨタム王（27 章）　12)アハズ王（28 章）
　13)ヒゼキヤ王（29―32 章）　14)マナセ王（33:1―20）
　15)アモン王（33:21-25）　16)ヨシヤ王（34-35 章）
　17)エホアハズ王、エホヤキム王、エホヤキン王、ゼデキヤ王（36 章）

3．クロスの帰還の布告（36:22-23）

●第 2 歴代誌の構造：

1―9 章 ソロモンの治世	10 章―36:21 南ユダ王たちの治世	36:22－23 クロスの帰還の布告

15. エズラ記（The Book of Ezra）

●エズラ記の書名と著者：

この書物は、書中の中心人物であり、学者で、祭司であるエズラの名をとって「エズラ記」と名づけられました。著者は、エズラか、あるいは、彼の弟子がエズラの資料を用いて編集したと思われます。

エズラは、紀元前 458 年にバビロンから帰還したと思われます。そして、紀元前 444 年帰還し、12 年間総督であったネヘミヤと律法朗読の時に一緒に登場します（ネヘミヤ記 8:9)。それで、この書物は紀元前 440 年以後に書かれたと思われます。

●エズラ記の目的：

この書物は、クロス王の解放令による第1 次帰還から始まりエズラが帰還した紀元前 458 年の間の期間を背景にして、神様の真実な約束の故に民が信仰を回復し、再定着していく過程を描写しています。

内容は二つに大別できます。一つは 6 章まででエルサレム帰還から神殿完成までを記しています。もう一つは 7 章からでエズラの活動について記しています。6 章と 7 章の間には、実際には約 60 年の経過があります。というのは、列王記が預言者的観点から書かれていることとの比較です。

●教えられること：

1)神のみこころを行うために何をすべきかが語られています。
2)ユダの回復と神殿の再建は、預言の成就だけではなく、メシヤ誕生まで、ユダヤ人を約束の地に留め置くために意図されたものです（ダニエル書 9：24ー27)。
3)神の言葉は、宗教、社会、生活全般において明確に指示し、改革へ導きます。

エズラ記　全 10 章（280 節）

エズラ記は、神様の真実な約束の故に民が信仰を回復し、再定着していく過程を神殿再建を通して描写しています。

●エズラ記の内容：

1．帰還から神殿完成まで（1ー6 章）
　1)捕囚からの解放(1 章)：ペルシャクロス王の命令
　2)帰還者のリスト(2 章)：42,360 人の帰還(B.C.537 年)
　3)神殿建築の着手(3 章)
　4)執念深い妨害(4 章)：B.C.520 年まで中断
　5)神殿工事の再開(5 章)：ダリヨス王の許可
　6)神殿完成(6 章)：預言者ハガイとゼカリヤ
2．エズラの活動（7ー10 章）
　1)エズラの使命(7 章)：アルタシャスタの許可
　2)帰国の旅(8 章)：約 2 千人の帰還(B.C.458 年)
　3)雑婚問題などによる宗教改革(9-10 章)

●エズラ記の構造：

1-6 章	7-10 章
帰還から神殿の完成まで	エズラの活動

16. ネヘミヤ記（The Book of Nehemiah）

●ネヘミヤ記の書名と著者：

エズラ記とネヘミヤ記は 1 冊の書物で、エズラ記と呼ばれていました。その後、それらは、2 冊の書物に分けられました。現在、これらの 2 つの書物は、それぞれの書物における重要な人物の名前をとって、名づけられました。つまり、この書物は、書中の中心人物の名前をとって「ネヘミヤ記」と名づけられました。

この書物は、ネヘミヤが公職から引退した後、回想しながら記録したと思われます。ですから、著者は、ネヘミヤ（神の慰めという意味）だと思われます。記録年代は、この書物の内容が紀元前 444ー423 年の間の記録ですので、その後に書かれたと思われます（紀元前 400 年までの間）。

●ネヘミヤ記の目的：

この書物は、紀元前 444 年の第 3 次帰還から始まり、ネヘミヤの帰還（紀元前 432 年）後の活動を紹介する内容で終わっている、旧約最後の歴史書として書かれたものです。ネヘミヤの指導のもとで、エルサレム城壁と 12 の門が修理、再建され、宗教改革によってイスラエルの民が回復されることが主な内容です。すなわち、エルサレムと民の回復を通して、神の変わらない約束と導きを示しています。

●教えられること：

1)ネヘミヤの自伝的な性格をもっています。彼は、エルサレムの城壁のことを聞き、ペルシャの高官の地位を捨て、苦難と危険と困難、そして復興の働きを信仰によって全うします。

2)神様の恵みの実現のためには、祈りと苦しみ、忍耐が必要であることを、全体の教訓として教えています。

ネヘミヤ記　全 13 章（405 節）

ネヘミヤ記は、神様の恵みの実現のためには、祈りと苦しみ、忍耐が必要であることを教えています。

●ネヘミヤ記の内容：

1．エルサレム城壁の再建（1ー7 章）
- 1)城壁の再建のための準備(1-2 章)
- 2)城壁の再建(3 章-6:14)
- 3)城壁の完成(6:15-19)
- 4)城門の警備(7:1-4)
- 5)残りの者たちの人口調査(7:5-73)

2．イスラエル民の宗教改革（8ー13 章）
- 1)契約の更新(8-10 章)
  - ①律法の朗読と解釈(8 章)　②契約の更新(9-10 章)
- 2)契約に対する民の従順(11-13 章)
  - ①民の再定着(11 章)　②祭司とレビ人の名簿(12:1-26)
  - ③城壁の奉献式(12:27-47)　④宗教改革(13 章)

●ネヘミヤ記の構造：

1 ー7 章	8ー13 章
エルサレムの回復／ 城壁の再建 城壁の完成	イスラエル民の回復／ 契約の更新 契約に従順

17. エステル記（The Book of Esther）

●エステル記の書名と著者：

「エステル記」は、この書物の中心人物である王妃エステルの名前からつけられた書名です。エステルは、ペルシャ式の名前（星という意味）で、ヘブル語ではハダッサー（美しい木という意味）と呼ばれました。

著者は、ペルシャのシュシャンに住んでいたユダヤ人の一人で、宮庭に出入りのできる地位の人だと推定されます。記録年代についても、明確に知ることはできません（紀元前 410－400 年頃と推定）。

この書物の出来事は、ペルシヤ帝国のアハシュエロス王（クセルクセス、紀元前 486－465 年）時代に起きたものです。エズラ記の 6 章と 7 章の間に当たる時代と考えられます。

●エステル記の目的：

私たちは、この書物が書かれた当時の状況と全体の内容を通して、二つの目的を推定することができます。一つは、ディアスポラ（散らばっているユダヤ人）に神の実存と歴史性、そして希望をもたらせるためです。もう一つは、プリムの祭の歴史的起原とその意味を明らかにするためです。イスラエルの民は、神様がどのようにご自身の民を滅亡から救われたかを思い起こすために、毎年プリムの祭を行ないました。

●教えられること：

1)「神の摂理」を中心テーマにした短編小説のような書物で、神様の摂理の御手本を見せるものです。異国の地であっても神様がご自身の民を救い導くという神様の摂理を明確に教えます。

2)神様は、度々かたくなになったご自身の民を懲らしめますが、決して彼らを手放さず、救い導く方であることを教えます。

3)旧約聖書の大抵は律法中心ですが、この書物は、信仰中心の生活が強調されています。

エステル記　全 10 章（167 節）

エステル記は、王妃エステルを通してイスラエルを救って下さった「神の摂理」を中心に短編小説のような形式で書かれた書物です。

●エステル記の内容：

1．危機に直面したユダヤ人（1－4 章）
　1)救いのために備えられるエステル(1 章-2:20)
　　①王妃ワシュティの廃位(1 章)
　　②王妃に選ばれるエステル(2:1-20)
　2)ハマンの陰謀（2:21-4 章）
　　①モルデカイの貢献(2:21-23)
　　②ハマンの陰謀とユダヤ人虐殺の布告(3 章)
　　③モルデカイとエステルの決意(4 章)

2．ユダヤ人の勝利（5－10 章）
　1)ハマンを退けるモルデカイ(5 章-8:2)
　　①勝利の背景(5:1-6:3)　②名誉を得る(6:4-14)
　　③ハマンの死(7 章)　④ハマンの家を得る(8:1､2)
　2)イスラエルの勝利(8:3-10 章)
　　①勝利の備え(8:3-17)　②イスラエルの勝利(9:1-16)
　　③プリムの祭(9:17-32)　④モルデカイへの称賛(10 章)

●エステル記の構造：

1－4 章	5－10 章
ユダヤ人の危機	ユダヤ人の勝利

18. ヨブ記（The Book of Job）

●ヨブ記の書名と著者：

この書物は、中心人物の名前から「ヨブ記」と名づけられました。ヨブという名前は、「悩まされた者」、「悔い改める」を意味するもので、彼は、族長時代の人物だと思われます。

この書物の著者は、明確に知ることができません。ただ彼は文学的才能がある人で、知識人であったと思われます。また、彼は個人の苦しみと信仰についても敏感で、配慮深い霊的な人だと思われます。記録年代についても明確に知ることはできません。

●ヨブ記の目的：

この書物は、散文の問題提起（プロローグ、1-2 章）と問題の結末（エピローグ、42:7ー17）の間に、長い詩文体の論争による問題の展開（ダイアローグ、3:1ー42：6）という、叙事詩劇の形式で書かれました。このような構成を持って、

①義人の苦難の原因と目的がしばしば神秘とされることと、

②人が味わう苦難の範囲の広さと、極端な苦難の姿を示すことで、どんな境遇であっても、忍耐を持って神信仰を保つべきということが示されています。

●教えられること：

1)祝福だけではなく苦難も神様の摂理であります。

2)被造物である人間の限界をよく教えています。

3)一般論として絶対化して受け入れている「因果応報」という思想の間違いを教えています。

4)神様は主権者であり、サタンは神様の許しの範囲でしかする事がないことを明確に教えています。

ヨブ記　全 42 章（1070 節）

ヨブ記は、祝福だけではなく苦難も神様の摂理であることと、因果応報の思想は絶対的なものでないこと、そして忍耐を教えています。

●ヨブ記の内容：

1．問題の提起：プロローグ（1ー2 章）
　1)第一回目の試練(1:1-22)
　2)第二回目の試練(2:1-10)
　3)三人の友人の来訪(2:11-13)

2．問題の展開：ダイアローグ(3 章ー42:6)
　1)ヨブの告白(3 章)
　2)ヨブと友人との対話(4-27 章)：
　　①エリファズと(4-7 章)　②ビルダデと(8-10 章)
　　③ツォファルと(11-14 章)　④エリファズと(15-17 章)
　　⑤ビルダデと(18-19 章)　⑥ツォファルと(20-21 章)
　　⑦エリファズと(22-24 章)　⑧ビルダデと(25-27 章)
　3)知恵の賛歌(28 章)
　4)ヨブの独白(29-31 章)
　5)エリフの弁論(32-37 章)
　6)神の弁論とヨブの答え(38 章-42:6)

3．問題の結末：エピローグ（42:7-17）

●ヨブ記の構造：

1ー2 章	3 章ー42:6	42:7-17
問題の提起 ヨブの試練	問題の展開：友人と対話 ヨブの独白・神との対話	問題の結末 ヨブの回復

19. 詩篇（The Book of Psalms）

●詩篇の書名と著者：

詩篇は、ヘブル語で、「テヒリーム」と呼ばれます。「ハレル」という動詞から由来した言葉で、「賛美歌集」という意味です。ギリシャ語訳聖書から「詩篇」という呼ばれました。

詩篇は、神に対する 150 の賛美の歌の書物です。その中には本文の一部ではなく付け加えられた表題があって、作者や所属を示したり、作品の特色、音楽的記号、儀式的目的と使用を表す情報などを示します。それらの表題によると、7 人の作者が出ています（ダビデ、アサフ、コラの子ら、ソロモン、ヘマン、エタン、モーセ。49 の詩には名前が書いてない）。

作詩の年代は、モーセ（詩篇 90 篇、紀元前約 1400 年）から捕囚期後の時代、すなわち、エズラの時代（紀元前約 500 年）までわたっています。編集者は、エズラだと思われます。

●詩篇の目的：

詩篇は、捕囚期後の時代に古代イスラエルの宗教精神を高めるために編集されたという人がいますが、詩篇は、信仰生活の指針として用いられるために編集されたものです。

カルヴァンは詩篇を、「たましいのすべての面においての解剖だ」と語りました。創造と救いの計画に関する神様と人間との関係において、おそらくすべての課題が、詩篇の主題の中に含まれてあるでしょう。

●教えられること：

1)人類のたましいに対する至宝です。
2)旧約聖書の中で、神様に関する教えが一番多くあります。
3)神様を賛美し、礼拝する人への祝福と、神様を拒む不義な者への裁きを示しています。そのために、倫理的な行動指針と神礼拝に対する正しい態度や方法を示しています。

詩篇　全 150 篇（2462 節）

詩篇は、個人の信仰の体験を表現したもので、私たちの信仰生活の指針として用いられるために書かれました。

●詩篇の内容：

1．モーセ五書の区分にそった内容：
1)1－ 41 篇：創世記との一致／祝福、堕落、回復について
2)42－ 72 篇：出エジプト記との一致／救いについて
3)73－ 89 篇：レビ記との一致／神殿について
4)90－106 篇：民数記との一致／地について
5)107－150 篇：申命記との一致／神のみ言葉について

2．主題による分類：
1)悔い改めの詩：32、38、51 など
2)歴史の詩：
①祭政一致の時代(78:12-66、105:23-45、106:7-33、114)
②王国時代(120－134)
③捕囚時代以後(74、79、80、85、126、137、146、147、150)
3)預言的な詩：
①主の苦しみ(22、69)　②復活(16、118)
③メシヤ預言(40:6-10、41、109)
4)呪いの詩：35、69、58:6、109:10、137:8、9 など。
5)アルファベット順の詩：25、119（全体）、145(一部分)

●詩篇の構造：

1－41 篇	42－72 篇	73－89 篇	90－106 篇	107-150 篇
祝福、堕落 回復	救い	神殿	地	神の言葉

20. 箴言（The Book of Proverbs）

●箴言の書名と著者：

「箴言」という言葉には、類似、比喩、比較という意味があります。ヘブル語聖書の表題は、「イスラエルの王、ダビデの子ソロモンの箴言」となっています。しかし、この書物にはソロモン以外の人の箴言も収録されています。「知恵のある者」「アグルの言葉」、「レムエルが母から受けた戒めの言葉」などがそうです。箴言の大部分がソロモンの作であったとしても今のような箴言になったのは、ヒゼキヤ王の時代（25:1 参考）であると思われます。

●箴言の目的：

この書物の中心聖句は、「主を恐れることは知恵の初めである」(1：7)です。箴言の中に収められているものは、通俗的なことわざではなく、神様の律法を知り、その原理を生活のすべてに当てはめていた知恵ある人の教えの精髄です。すなわち、箴言は、実際の経験に基づいて、どうすれば正しい道を歩むことができるかという知恵を示すものです。ですから、この書物は人々に「知恵と思慮」を得させます。

●教えられること：

1)詩篇は、霊的生活のため、箴言は、実際的な生活のためのものであると言われます。箴言は、その内容が人生における実際の経験に基づいていて、毎日の生活の中で、いろいろな分野に神様の知恵を適用させることができることを教えます。
2)知恵が人格化されています。
3)大部分の箴言は非常に短いもので、簡単に覚えられます。
4)聖書と東洋思想、一般社会の道徳観や倫理観との根本的な差が何かを明確に教えます。

箴言　　全 31 章（915 節）

箴言は、実際の経験に基づいて、どうしたら毎日の生活の中で、いろいろな分野に神様の知恵を適用することができるかを教えます。

●箴言の内容：

1．序・目的（1 ：1 －7 ）
2．知恵賛歌（1 －9 章、15 の教訓的詩の結集）
3．箴言の中の箴言（10 章ー22：16、375 句の個々の箴言集）
　1)正しい者と悪者　　2)真っ直ぐな者と曲がった者
　3)真実な者と偽り者　　4)知恵ある者と愚かな者
　5)英知のある者と思慮に欠けている者
　6)思慮ある者と痴れ者　　7)貧しい者と富んでいる者
　8)潔白とごまかし　　9)きよい人の道と罪人の道
　10)主を恐れる者と主の憤りに触れた者
4．勧めるべき箴言（22:17ー24 章、35 の箴言と短い詩の結集）
5．続・ソロモンの箴言（25ー29 章、127 の箴言の結集）
6．その他の箴言（30ー31 章、レムエル王、女性の箴言）

●箴言の構造：

1ー9 章	10 章-22:16	22:17-24 章	25ー29 章	30ー31 章
知恵賛歌	箴言中の箴言	勧める箴言	ソロモン箴言(続)	他の箴言

21. 伝道者の書（Ecclesiastes）

●伝道者の書の書名と著者：

ヘブル語聖書では、説教者、伝道者という原題で呼ばれました。それが、「集会をつかさどる者」と呼ばれるようになり、それを訳して、「伝道者の書」という書名になりました。著者は、1 章 1 節に書いてあるように、ソロモン王で、彼の晩年の作書であるとされています。

●伝道者の書の目的：

この書物は、豊かな人生経験をしたソロモンが、すべての人生の「空しさ」を解き明かすことが主な内容です。「すべてが空」であるのは、この世が神のみわざによって曲がっているからであり、神様以外に、それをまっすぐにすることができないことを教えています。すなわち、空しいと言われる人生において「神を敬い、神に従うことだけが空しさの残らない人生」であることを教えるのが、この書物の目的です。

●教えられること：

1)「日の下」(31 回使用) での「空しさ」(37 回) を豊富に教えています。すなわち、この世の物事に信頼を置く人々に、すべてのものは、空しいものであることを訴えています。
2)神様が直接語っている文はありませんが、空しい人生の表現を通して、神様が直接語っているように読者に思わせます。
3)すべてのものには時があり、神様の御手の中にあります。
4)「神を敬い、神に従うことが人生のすべて」であると教え、価値ある人生が何かを明確に示しています。
5)私たちがどんな人生を過ごしたかについて、神様は裁かれると教えます。空しい人生の空しさは、この世だけで終わるものではない故に、更に空しいものだと教えます。

伝道者の書　　全 12 章（222 節）

伝道者の書は、空しいと言われる人生において「神を敬い、神に従うことが空しさの残らない人生」だと教えています。

●伝道者の書の内容：

1．序文（1:1－11）
2．主題の実証（1:12－6 章）
　1)知恵の空しさ（1:12－18）
　2)快楽の空しさ（2:1－11）
　3)知恵と富の空しさ（2:12－23）
　4)人間の労苦の空しさ（2:24－3:15）
　5)獣のような人生（3:16－4:6）
　6)孤独な富と地位の空しさ（4:7－16）
　7)形式主義者に対する警告（5:1－7）
　8)富む者の空しさ（5:8－6:12）
3．知恵に関する助言（7 章－12:7）
4．結論（12:8－14）

●伝道者の書の構造：

1:1-11	1:12-6:12	7:1-12:7	12:8-14
序文：全てが空しい	主題の実証	知恵の助言	結論：神様を敬い従う

22. 雅歌（The Song of Solomon）

●雅歌の書名と著者：

ヘブル語聖書では、「もろもろの歌の中の唯一の歌」、すなわち、「最も優れた歌」という意味での原題で呼ばれました。「雅歌」という書名は、漢訳聖書によるものです。

著者は、ソロモンです。ソロモンは1005の歌を作った（第1 列王記4:32）知者でもありました。

●雅歌の目的：

この書物は、実際には、5つの歌から構成されていて、花婿と花嫁の愛の関係が、段階的に発展していくことを表しています。すなわち、「私の愛する方」と呼ばれる花婿と、「私が愛する者」と呼ばれる花嫁が一緒になるためには、多くの障害があり、それを乗り越えていくことが述べられ、たたえるために書かれています。

このような内容から、この書物は、聖書の中で最も変わった書物だと言われています。神様の名前が書いてない書物であると同時に、神について沈黙しているばかりか、男女の愛を描いたことで、全く宗教的なことを感じさせないからです。また、多くの比喩を用いていることから、神様とイスラエルの関係とか、キリストと教会の密接な関係とかを意味している歌であると取られることもあります。

しかし、雅歌をそのまま恋愛詩として理解することができます。それは、私たちの人生のあらゆる面に関心をもたれる神様ご自身が、人間社会の純潔のためにも、結婚というものが神聖であるべきだと教えるために、このように男女の愛の尊さと甘さとをたたえ、歌としたとの理解です。聖書は、男女の愛を決して退けていません。むしろ尊いものとします。

雅歌　全8章（117節）

雅歌は、男女の純潔と結婚の尊さを、人生のあらゆる面に関心をもたれる神様への賛美の種とすべきことを教えています。

●雅歌の内容：

1．花嫁と花婿の愛情（1:1―2:7）
2．花嫁の夢（2:8―3:5）
　1)春の訪れ(2:8-17)
　2)花嫁の夢(3:1-5)
3．婚礼の列と花嫁の夢（3:6―6:3）
4．花嫁賛歌（6:4―8:4）
　1)花嫁賛歌(6:4-10)
　2)花嫁と娘たち(6:11-13)
　3)花嫁賛歌(7:1-9)
　4)花嫁の求め(7:10-8:4)
5．互いの愛の告白（8:5―14）

●雅歌の構造：

1:1-2:7	2:8-3:5	3:6-6:3	6:4-8:4	8:5-14
最初の愛	花嫁の夢	成熟する愛	花嫁賛歌	互いの愛の告白

23. イザヤ書(The Book of Isaiah)

●イザヤ書の書名と著者：

この書物は、アモツの子イザヤの預言で、彼の名前から「イザヤ書」と名づけられました。イザヤという名前は、「神は助け主」という意味です。預言者イザヤは、紀元前 740 年頃から 50 年に渡って、預言者活動をしました。この書物は、彼の預言者活動の時期に書かれたと思われます。

●イザヤ書の時代背景：

預言者イザヤは、だれにも歓迎されない預言をもって、王たちや祭司長たち、民に告げ、彼らの罪を責め、また、罪による神の裁きを大胆に宣べました。当時の北イスラエル王国は、偶像礼拝によって滅亡の道を走っていました。南ユダ王国は、宗教改革により、急速な経済や軍事的繁栄の時代を迎えました。南ユダのウジヤ王の政権は、ソロモン以後の最大の繁栄と権力を握った時代だと言われました。しかし繁栄は腐敗を生み、神礼拝も形式的なものとなって、堕落の道へ進んでいきました。国際情勢もメソポタミヤとエジプトの二大文化圏の中間地帯に位置した南ユダにとっては、緊張と葛藤が高まりつつあった時代でした。

●イザヤ書の目的と教えられること：

この書物は、66 章で構成されていて、39 章までは裁きと警告、後半の 27 章には恵みと回復がその内容となっています（このような構成からミニ聖書だとも言われています）。すなわち、この書物は、神様は裁きを通して救いと正義と恵みとをもたらせることを教えています。

1)神様の性質（聖、唯一、至高など）を明確に教えます。

2)詩篇を除く旧約聖書の中で最も多く新約聖書に引用されています。それは、この書物がメシヤに関する豊富な預言を示しているからです。

イザヤ書　　全 66 章(1292 節)

イザヤ書は、一つの纏まった小さな聖書で 39 章までは裁きと警告が、後半の 27 章には恵みと回復がその内容になっています。

●イザヤ書の内容：

1．神の裁きのメッセージ（1 －35 章）

1)ユダとエルサレムの幻(1－12 章)

2)諸国に関する神の裁き(13 章－35:10)

①バビロン(13:1-14:23)　②アッシリヤ(14:24-27)

③ペリシテ(14:28-32)　④モアブ(15:1-16 章)

⑤アラムとイスラエル(17 章)　⑥クシュ(18 章)

⑦エジプト(19-20 章)　⑧海の荒野(バビロン、21 章)

⑨エドム、アラビヤ、ツロ、シドン(22-23 章)

⑩世界の裁きと警告(24-35 章)

2．歴史的な記録の付加(36－39 章)：

3．神の慰めのメッセージ（40－66 章）

1)神による救い(40－53 章)：

主のしもべ（41 章)、バビロンの滅亡と救い(47-48 章)、罪のために死なれる主のしもべ(53 章)など。

2)新しい民の賛美と礼拝(54－66 章)：

シオンの救い(60 章)、新天新地(65－66 章)など。

●イザヤ書の構造：

1 -35 章	36－39 章	40-66 章
神の裁きのメッセージ	歴史的な記録	神の慰めのメッセージ

24. エレミヤ書(The Book of Jeremiah)

●エレミヤ書の書名と著者：

この書物は、預言者エレミヤに啓示された預言が記されていることから「エレミヤ書」と名づけられました。「エレミヤ」という名前は、「神より派遣される」という意味です。

この書物の著者は、エレミヤです。この書物にはエレミヤ自身の経験や性格、状況が数多く記されています。

●預言者エレミヤのメッセージと時代背景：

エレミヤは、ヨシヤ王（紀元前 627 年）の時代から預言者としての活動を始め、エルサレム陥落(紀元前 586 年)後までも活動をしたので、彼の預言者の活動は半世紀に及びます。神様を恐れたヨシヤ王が死んでから、南ユダ王国には神様を恐れない悪い王たちや偽預言者たちが続々登場しました。それで預言者エレミヤは、神からユダへの最終的なメッセージをを伝えました。それは、「諸国の民と王国を‥‥引き抜き、引き倒し、滅ぼし壊し、建て、植えさせる」というメッセージです。しかし、エレミヤは敵対視され、裏切られ、打たれ、投獄されました。エレミヤは、神様の預言を受け入れないユダ王国のことで、いつも涙をもって訴えなければなりませんでした。それで、彼は、涙の預言者と呼ばれました。

●教えられること：

1)国の堕落と災いはみな、神様を無視し、神様に従わないために起こることを強調し、それが悲劇的に実証されています。

2)自分たちの奉仕がいつも成功するという尺度でだけ、神様への奉仕の価値が計られることはないと教えます。

3)新しい契約で、終末的な祝福の日が来ることを教えます。

エレミヤ書　　全 52 章（1364 節）

エレミヤ書は、エルサレム陥落とバビロン捕囚の時代を涙ながらに語る涙の預言者の預言が記されています。

●エレミヤ書の内容：

1．序論：エレミヤの召しと派遣（1 章）
2．陥落の前の南ユダ（2ー38 章）
　1)ユダとエルサレムに対する災いの預言(2-25 章)
　2)エレミヤ後半生の事件(26－38 章)
3．エルサレムの陥落（39 章）
4．ユダの残りの者（40ー42 章）
5．エジプトでのエレミヤ（43ー51 章）
　1)エレミヤの晩年：エジプトへの逃亡（43－44 章）
　2)バルクの嘆き（45 章）
　3)諸国民への預言(46－51 章)
6．付録：エルサレム陥落とエホヤキンの恩赦（52 章）

●エレミヤ書の構造：

1 章 召しと派遣	2ー51 章：預言者活動 2-38 章：陥落前のユダ 39 章：エルサレムの陥落 40-42 章：残りの者 ・43-51 章：エジプトにて	52 章 付録

25. 哀歌(Lamentations of Jeremiah)

●哀歌の書名と著者：

この書物は、エルサレムの滅亡を嘆いた歌を集めたことから「哀歌」と名づけられました。ギリシャ語訳聖書には、「イスラエルが捕囚となり、エルサレムが荒廃させられた後、エレミヤは座して泣き、エルサレムのために哀歌を作って言った」という序文がついてあります。それで、「エレミヤの涙」、または、「預言者エレミヤの哀歌」と言われるようになりました。

著者は、預言者エレミヤです。記録年代は、エルサレム滅亡からさほど時が経っていない時期、ユダの地で書かれたと思われます（紀元前 586 年以後)。

●哀歌の目的：

ユダヤ人にとってエルサレム崩壊は、単に首都の滅亡ではありません。エルサレムは、神様がご自身の住まいを置かれた聖なる都です。このエルサレムが敵の手に陥り、滅ぼされたことは神様がイスラエルを見捨てたということになります。ここに哀歌の嘆きの本質があります。しかし、哀歌は悲しみの歌ですが、単なる嘆きの歌だけではありません。悲しみと同時に、罪を悔い改め、神様に立ち返ることを求めています。「神様のみこころに添った悲しみは、悔いのない救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします」という言葉（コリント人への手紙第一 7:10）を思わせるものです。

●教えられること：

1)神様への強い信頼を教えていることから、哀歌であっても、哀歌を越えているものだと言えます。

2)偽預言者に従ったこと、すなわち、神様に対する不従順の罪は選ばれたものであっても、神様の怒りと荒廃をもたらします。

哀歌　　全 5 章(154 節)

哀歌は、神様のみこころに添った悲しみが、救いに至る悔い改めを生じさせることを示しています。

●哀歌の内容：

1．第1 の歌（1 章）：エルサレムの荒廃の姿
　1)エルサレムの荒廃（1－9）
　2)敵の侵略（10－17）
　3)哀れみを求める祈り（18－22）

2．第2 の歌（2 章）：神による怒りの恐ろしさ
　1)敵のように振舞う主（1－10）
　2)悲惨なエルサレム（11－17）
　3)叫び祈る（18－22）

3．第3 の歌（3 章）：エレミヤの叫び
　1)悩める者の叫び（1－21）
　2)神の哀れみ(22－39)
　3)悔い改めの祈り（40－66）

4．第4 の歌（4 章）：エルサレムの以前の栄光と現在を対比
　1)変わったエルサレム（1－12）
　2)罪と裁き(13－22)

5．第5 の歌（5 章）：一日も早く神に立ち返ることへの祈り
　1)バビロンに滅ぼされるユダ(1-18)

●哀歌の構造：

1 章	2 章	3 章	4 章	5 章
廃墟の姿	主の怒り	叫び求め	悲惨の原因	主に立ち返れ

24. エゼキエル書(The Book of Ezekiel)

●エゼキエル書の書名と著者：

この書物は、中心人物であり、著者の名前から、「エゼキエル書」と名づけられました。エゼキエルという名前は、「神は強くしてくださる」という意味です。

エゼキエルは、エルサレムの貴族出身の祭司長で、第1 次捕囚の民としてバビロンに移されました（紀元前 597 年)。彼は捕囚の身になって5年目の時からテル・アビブというユダヤ人居留地で自分の家を持ち、預言者活動を始めます。彼が最後の幻を見たのは、紀元前 571 年で、その幻の後、バビロンで書かれたと思われます。

●エゼキエル書の目的：

預言者エゼキエルとエレミヤは、警告と勧めの預言を宣べましたが、その預言の性格は異なります。エレミヤ書は滅び行く国に対する嘆きが明確に表れていますが、エゼキエル書は、民の罪悪と背教行為に強く憤慨しています。また、エゼキエル書はエレミヤ書よりも未来に対する幻がより大きくて、完全なものとして記されています。この書物は、イスラエルが神様の審判を受ける当然な理由と、神様の未来の救いの計画、すなわち、終末論的なイスラエル回復の預言を語っています。

●教えられること：

1)信仰および罪意識の個人性を強調しています。
2)神様がイスラエルを救うのは、ご自身の契約によるもので、その契約を実行することは、ご自身の栄光を表すためです。
3)建物に制限されることなく、新しい心による神礼拝、すなわち、信仰者の心が神殿となることを教えます。
4)神の御国の完全な到来は、神と人との個人的で正しい交わりを通して許されることが教えられます。

エゼキエル書　全 48 章（1273 節）

エゼキエル書は、国が滅び行くことが民の罪悪と背教行為によると強く憤慨しています。また、終末におけるイスラエルの回復を語っています。

●エゼキエル書の内容：

1．エゼキエルの召命（1ー3 章）
2．ユダに対する審判(4ー24 章)
　①審判の象徴(4-5 章)　②緊迫した審判(6-7 章)
　③ユダの罪悪像(8-11 章)　④ユダに対する象徴(12 章)
　⑤偽教師への審判(13-14 章)⑥たとえ話(15-17 章)
　⑦個人の罪と審判(18 章)　⑧エルサレムの審判(19-24 章)
3．諸国への審判(25ー32 章)
4．イスラエルの回復と完成（33ー48 章）
　1)イスラエルの回復(33－39 章)
　2)未来のメシヤ王国(40－48 章)
　①新しい神殿(40－43 章)　②完全な霊的礼拝(44－46 章)
　③新しい相続地(47-48 章)

●エゼキエル書の構造：

1ー3 章	4ー24 章	25ー32 章	33ー48 章
召命	ユダへの神の審判	諸国への神の審判	イスラエルの回復と完成

27. ダニエル書(The Book of Daniel)

●ダニエル書の書名と著者：

この書物は、中心人物であり、預言者である著者の名前から「ダニエル書」と名づけられました。ダニエルという名前は、「神は私のさばき主」という意味です。

ダニエルは、紀元前 605 年に捕囚の身になってバビロンへ連れて行かれ、そこで他の若者たちと共に官吏となる訓練を受けました。そして、バビロンの総理大臣の地位まで昇り、生涯を王宮で過ごし、国を治める務めをしながら、神のメッセージを伝えました。また、ダニエルは、同時代のだれよりも長い預言者活動をしました（ネブカデネザル王、ペルシャツァル王、ダリヨス王、クロス王の時代まで)。

●ダニエル書の目的：

バビロン帝国は、エルサレム神殿を破壊し、彼らの神々がこの世で一番優れていると自負しました。ですから、イスラエルの神信仰は嘲られ、イスラエルの民は悩み、苦しみました。その時、ダニエルはイスラエルの神こそ、この世の神々とは違って歴史を支配し、導く統治者であることを明らかにしました。そのために奇跡と神の力、そして、幻をもって未来の歴史を紹介しています。同時に、捕囚の中であっても、神様の哀れみがその民にあることを例証しています。

●教えられること：

1)神様がどのように歴史を支配し、導いておられるのかを示しています。特に、神様の絶対主権を教えています。
2)地上のいかなる王国よりも、神の御国がすぐれていることを教えます。
3)ダニエルの預言は、バビロンの捕囚の終わりから、人の子が神の王国を最終的に確立する時までの 70 週の預言です。

ダニエル書　全12章(357節)

ダニエル書は、神こそすべての歴史の支配者であることを示すために、バビロン捕囚の終わりから神の王国が確立される時までの預言を語っています。

●ダニエル書の内容：

1．歴史的部分（1ー6 章）
　1)ダニエルと 3 人の友人(1 章)
　2)ネブカデネザル王の夢(2 章)
　3)金の偶像礼拝への拒否(3 章)
　4)ネブカデネザルの病気(4 章)
　5)ペルシャツァル王の祝宴(5 章)
　6)ダリヨスの禁令(6 章)
2．預言の部分（7ー12 章）
　1)四つの獣の幻(7 章)
　2)雄羊と雄やぎの幻(8 章)
　3)70 週の預言(9 章)
　4)神の幻と天上の戦い(10 章-11:1)
　5)地上の戦い(11:2－45)
　6)終末に関する預言(12 章)

●ダニエル書の構造：

1ー4 章	5 章	6 章	7ー12 章
ネブカデネザル王	ペルシャツァル王	ダリヨスの禁令	預言の部分

28. ホセア書(The Book of Hosea)

●ホセア書の書名と著者：

この書物は、預言者ホセアに啓示された預言が記されていることから「ホセア書」と名づけられました。ホセアという名前は、「救い」という意味で、「ヨシュア」、「イエス」と、ほとんど同じ意味です。

著者は、ホセアです。彼は、ヤロブアム2世の治世に預言者として召され（紀元前786－746年）、首都サマリヤ陥落（紀元前721年）の時期まで活動したと思われます。経済や物質的な繁栄と領土の拡張によって宗教的、道徳的、社会的に腐敗に走る時代に、預言者ホセアは、涙をもってイスラエル王国のために神の警告を伝えました。

●ホセア書の目的：

この書物は、真実ではないイスラエルに対して、神様は彼らを愛し、癒やし、また、懲らしめや律法の罰を通して彼らを立ち返らせようとすることを、ホセアの私生活を通して示しています。また、神は、イスラエルと三つの契約を結び、イスラエルを導いていることをも示しています。それは、

①アブラハムの契約；これにより、イスラエルは選ばれます。
②モーセの契約；これにより、イスラエルは懲らしめられます。
③新しい契約；これにより、イスラエルは潔められます。

●教えられること：

1)ホセアの結婚に関する理解：ゴメルとの結婚については理解しにくい面がありますが、ホセアは、神のメッセージを語ろうとする意図をもって、婚前から姦淫していた女性と結婚したと考えることができます。
2)神様の愛と真実性を、より明確に示しています。

ホセア書　全14章(197節)

ホセア書は、私生活を通して、イスラエルに対する神様の悲しみを示し、民の堕落や不誠実、神様の忍耐深い愛を物語っています。

●ホセア書の内容：

1．預言者の悟り（1－3章）
　1)ゴメルとの結婚(1:1-9)
　2)その適用(1:10-2章)
　3)妻を連れ戻す(3:1-3)
　4)その適用(3:4-5)
2．イスラエルと神（4－14章）
　1)イスラエルの罪と神の裁きについて(4-13章)
　　①偶像礼拝(4章)　②民に対する神の審判(5章)
　　③契約の違反(6章)　④悔い改めの拒否(7章)
　　⑤民の背信(8章)　⑥神の審判(9章)
　　⑦二心(10章)　⑧変わらぬ神の愛(11章)
　　⑨続く犯罪(12-13章)
　2)回復に関する神の約束(14章)

●ホセア書の構造：

1－3章	4－13章	14章
預言者の悟り	不誠実なイスラエル	変わらぬ神の愛

29. ヨエル書(The Book of Joel)

●ヨエル書の書名と著者：

この書物は、預言者ヨエルに啓示された預言が記されていることから、「ヨエル書」と名づけられました。ヨエルという名前の意味は、「主は神である」という意味です。

著者は、預言者ヨエルです。記録年代は、内容を通して推定することができます。この書物には、他の預言者たちが言及した王名やアッシリヤ、バビロンなどについて触れてないこと、祭司が国家の中心的な役割を果たしていることなどによって、南ユダのヨアシュ王（紀元前 837－800）時代を中心に預言の活動をし、その時期に書かれたと思われます。

●ヨエル書の目的：

モーセやソロモンは、いなごによる災難が神の裁きの一つであると語りました。しかし、ヨエルの時代の人々はそのようには認めませんでした。それでもヨエルは、いなごによる災難は来たるべき神様の裁きであると語りました。ヨエルはまず、いなごの災難が起こる日が、「主の日」であると語り、民を悔い改めへと招きます。そして、諸国がイスラエルに対して行ったことで、神様の裁きが下ることも語っています。また、神様がイスラエルを回復することをも約束しています。

●教えられること：

1)この書物は、「悔い改めの書」という別名があります。
2)神様は、自然の災難や軍事的な手段を用いて、罪を犯した人々を懲らしめますが、悔い改めた人々には、回復を与えられます。同時に破壊された自然の復帰をも許します。
3)聖霊に対する預言を語っています。これは、悔い改めた人に対する約束で、新約聖書との独特なつながりをもちます。

ヨエル書　全３章(73節)

ヨエル書は、「悔い改めの書」という別名のように、悔い改めへ人々を招きます。そして、彼らに神様の約束を語っています。

●ヨエル書の内容

1．近づいた災難（1:1－2:17）
　1)災難の警告(1-2 章)
　　①災難の性格と結果(1:2-12)
　　②災難の意味(1:1-30)
　2)悔い改めへの招き(2:1-27)
　　①悔い改め(2:12-17)
　　②神の応答(2:18-27)
2．近づいた主の日（2:28－3:21）
　1)聖霊の注ぎに対する約束(2:28-2:32)
　2)諸国への裁きの根拠(3:1-8)
　3)裁きの姿(3:9-15)
　4)ユダへの祝福(3:16－21)

●ヨエル書の構造：

1:1－2:27	2:28－3:21
神の裁きと悔い改めへの招き	近づいた主の日

30. アモス書(The Book of Amos)

●アモス書の書名と著者：

この書物は、アモスに啓示された預言が記されていることから、「アモス書」と名づけられました。アモスという名前は、「重荷を負う」という意味です。アモスは、ベツレヘムから9キロ離れているテコア町の出身で、そこで羊を飼ったり、無花果の木を栽培していた平凡な人でしたが、預言者に召され、イスラエルの民に神の言葉を語りました。彼は、ヤロブアム2世の治世に預言者活動をしました。

著者はアモスで、記録年代は、ヤロブアム2世の治世である紀元前760ー745年の間だと思われます。

●アモス書の目的：

預言者アモスは、ホセアと同時代の人物で、南ユダ王国出身でしたが、北イスラエル王国の宗教の中心地であるベテルで活動しました。ホセアは、神様の裁きと同時に神の愛を強調しましたが、アモスは、罪人に対する神様の威厳と妥協しない神様の審判を叫びました。

アモスが厳しい神様の審判を宣告したのは、イスラエルが非常に繁栄したことで、彼らが道徳、宗教的に深刻な罪を犯したからです。また、彼らは、神様に選ばれていることを、自分自身の安全を保証するものだと思いながらも、神様に対しての義務を負おうとはしませんでした。アモスは、それらのイスラエルの罪を指摘し、神様の審判を宣告しました。

●教えられること：

1)仕える者のお手本を見せています。アモスは、謙遜や勤勉、知恵、洞察力、忠実、忍耐、そして神様からの直接的なメッセージをもって仕えた人でした。

2)国家の罪は、その国家に罰をもたらせます。

アモス書　全9章(146節)

アモス書は、農夫出身の「牧羊的な預言書」という別名がありますが、罪人に対する神様の威厳と妥協しない神様の公義を示しています。

●アモス書の内容：

1．諸国に対する神の審判（1ー2章）

1)ダマスコ　2)ガザ　3)ツロ
4)エドム　5)アモン　6)モアブ
7)ユダ　8)イスラエル

2．イスラエルに対する神の審判（3ー6章）

1)現在のイスラエル(3章)：特権と責任
2)過去のイスラエル(4章)：受けるべき審判
3)未来のイスラエル(5-6章)：
①神を求めよ(5:1-15)　②神の審判の日(5:16-27)
③裁きの宣告(6章)

3．神のご計画（7ー9章）

1)裁きの幻(7:1-9)
①いなごの災難　②燃える火　③重り縄
④夏の果物　⑤神殿破壊の幻
2)回復に関する約束(9:11-15)

●アモス書の構造：

1ー2章	3ー6章	7ー9章
諸国への神の審判	イスラエルへの神の審判	神のご計画

31. オバデヤ書(The Book of Obadiah)

●オバデヤ書の書名と著者：

この書物は、オバデヤに啓示された預言が記されていることから、「オバデヤ書」と名づけられました。オバデヤという名前は、「神のしもべ」という意味です。著者は、啓示の受領者であるオバデヤと思われます。しかし預言者オバデヤの活動時期が明らかではないので、年代について明確に言うことはできません。ただ、エルサレムが攻撃され住民が捕囚になったということから、ネブカデネザル時代の出来事が背景になっていると思われます（紀元前 586 年前後）。

●オバデヤ書の目的：

この書物は、14 節までの前半と 15 節以後の後半に分けられます。前半のテーマは、神様がエドムの高慢に目を留め、審判するということです（同じ内容として、イザヤ書 34：5-15、エレミヤ書 49:7-22、エゼキエル書 25:12-14、35:1-15、アモス書 1:11－12、マラキ書 1：3-5 参考)。後半のテーマは、神様の審判がエドムに止まらず、全世界が神様の審判を受け、そして神様の統治が始まるということです。

そのため、この書物は、エサウ／エドムの滅亡と、ヤコブ／イスラエルの回復の約束を堅く記し、神様に対する信仰を確かなものとしています。

●教えられること：

1)人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになるという、神様の報復の律法を示しています。それは、「あなたがしたように…あなたにもされる」ということです。

2)エドム人は、ヤコブとエサウの時代にまで、さかのぼる必要があります。エドム人はエサウの子孫です。

オバデヤ書　　全 21 節

オバデヤ書は、神様の民に対する高慢と悪行には神様の審判を、神様の民には救いの約束を記し、信仰を確かなものとしています。

●オバデヤ書の内容：

1．エドム滅亡の預言（1-9）
　1)高慢に対する審判(2-4)　2)国の崩壊(5-9)
2．エドムの罪悪（10－14）
　1)ヤコブへの暴虐(10-11)　2)ユダへの敵対行為(12-14)
3．主の日の預言（15－21）
　1)全世界の審判(15-16)　2)ヤコブの救い(17-21)

※エドムについて：エドムは、死海南東にあり、そこに近づく道が狭いことから難攻不落の町として知られました。彼らは、強力な軍事組織をもっており、出エジプトの時からサウル時代までイスラエルと戦闘、従属、反乱、鎮圧などの反目を続けました。ダビデ時代からイスラエルに屈し、その配下に置かれましたがヨラム王の時代に入ると、ユダの支配から脱します。そしてバビロンがユダを攻略する際、バビロンに降伏することで、彼らは繁栄を保ちます。しかし、ナバテヤ人によって領土を失い、その後、マッカバイオスによって国名もなくなります。

●オバデヤ書の構造：

1 －14 節	15－21 節
エドムに対する神の審判	イスラエルの開放と回復

32. ヨナ書(The Book of Jonah)

●ヨナ書の書名と著者：

この書物は、中心人物であり、預言者であるヨナの名前から「ヨナ書」と名づけられました。ヨナという名前は、「鳩」という意味です。預言者ヨナは、ヤロブアム2世(紀元前 786-746 年)の治世にアッシリヤ帝国の首都であるニネベに神様の審判を告げました。

著者は、預言者自身の身に起こった出来事を伝記風に語っていることから、ヨナかヨナの話を聞いた人だと思われます。

●ヨナ書の目的：

この書物は、イスラエル王国が神様の教えに従わず、神様の恵みと導きの中であっても、偶像礼拝によって堕落している背景から書かれました。預言者たちが神様の裁きを警告してもイスラエルはその警告を拒みました。それで、神様は審判を聞いて悔い改めた異国を通して、神様から離れているイスラエルの罪を示しています。このことは、神様の御子イエスを拒むイスラエルに対比されるものでもあります（マタイ福音 12:41 参考)。

●教えられること：

1)本書が実話ではなく、一つの寓話だと考える人がいます。海に投げ込まれたヨナが魚に飲み込まれ、魚の腹の中で3日間生きたという話はあり得ないと思うからです。しかし、その出来事は、神様の奇跡を示すことであり、更にイエスの十字架の出来事を例証するものでもあります。

2)神様は、どの国の人であっても、神様を恐れかしこみ、悔い改めるなら、神様の哀れみと愛を与えられます。また、神様は哀れもうとする者を哀れまれることを教えます。

3)神様の民には異邦人に対する宣教の責任があります。

ヨナ書　　全4章(48節)

ヨナ書は、神様の審判を聞き悔い改めた異国や、超自然的な出来事をもって、神様から離れて堕落したイスラエルの罪を示しています。

●ヨナ書の内容：

1．預言者ヨナの不従順（1 章）
　1)預言者の使命：ニネベ宣教(1:1-2)
　2)タルシシュへ逃亡(1:3)
　3)神の裁き(1:4-17)
2．預言者ヨナの悔い改めの祈り（2 章）
3．使命を果たす預言者ヨナ（3 章）
　1)預言者の再使命(3:1－3)
　2)ニネベの悔い改め(3:4-10)
4．懲らしめられる預言者ヨナ（4 章）
　1)神に不満を表すヨナ(4:1-4)
　2)神の答え(4:5-11)

●ヨナ書の構造：

1章	2章	3章	4章
使命を拒む預言者	悔い改める預言者	使命を果たす預言者	懲らしめられる預言者

33. ミカ書(The Book of Micah)

●ミカ書の書名と著者：

この書物は、預言者ミカに啓示された預言が記されていることから、「ミカ書」と名づけられました。ミカヤとも呼ばれるミカの名前は、「だれが神のようであろう」という意味です。

ミカは、田舎出身の預言者です。彼は、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代（紀元前 742－686 年）に活動したと思われます。すなわち、イザヤと同時代の預言者であります。この書物は、ミカ自身が生涯の末期に書いたと思われます。

●ミカ書の目的：

この書物は、ミカの名前の意味、「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか（7:18)」によって、その性格が示されています。すなわち、神様がミカのすべてであり、全ての内容に、きよく、哀れみ深い神様に対する彼の信仰がよく表されています。また、旧約聖書の中で最高の聖句だとも言われる「人よ、何がよいことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか（6:8)」もこの書物の特性をよく表します。

この書物の目的は、イスラエルとユダに彼らの罪を自覚させると同時に、神様の審判を預言することです。しかし、回復と罪の赦しの約束についても、静かに且つ確信に溢れる論調で希望を与えています。

●教えられること：

1)ミカは、イザヤといろんな面で区別できます。例えば、イザヤが当時の支配者階級に対して預言し、外交的に影響を与えたことに対し、ミカは民衆の過ちについて語りました。

2)エレミヤは、忠実な預言者ミカの預言を、ユダが聞いて悔い改めなければならないと語りました（エレミヤ書 26:18-19）。

ミカ書　　全 7 章(105 節)

ミカ書は、神様は何を求めておられるか、それは、人がただ公義を行い、誠実を愛し、謙遜に神様と共に歩むことであると教えます。

●ミカ書の内容：

1．神の審判に関する預言（1－3 章）
　1)サマリヤに対する審判(1:2-7)
　2)エルサレムに対する審判(1:8-16)
　3)支配者階級に対する審判(2:1-11)
　4)残りの者の回復(2:12-13)
　5)指導者に対する審判(3:1-12)

2．シオンの回復に関する預言（4－5 章）
　1)神の国の到来(4:1-5)
　2)神の統治とシオンへの励まし(4:6-13)
　3)王の到来と残りの者の救い(5:1-15)

3．神との討論と慰め（6－7 章）
　1)民に対する訴えと応答(6:1－8)
　2)指導者に対する訴えと審判(6:9－16)
　3)預言者の祈り（7 章）

●ミカ書の構造：

1－3 章	4－6 章	7 章
神の審判	恵みと回復	預言者の祈り

34. ナホム書(The Book of Nahum)

●ナホム書の書名と著者：

この書物は、預言者ナホムに啓示された預言が記されていることから、「ナホム書」と名づけられました。ナホムという名前は、「慰め」という意味です。著者は、ナホムです。記録年代は、アッシリヤが滅亡された紀元前 612 年前後だと思われます。ナホムは、南ユダ王国の王　マナセ、アモン、ヨシヤの治世に活動しました。敵国が滅亡することで、ユダを慰めています。

●ナホム書の目的：

この書物のメッセージは、ニネベとその滅亡が大部分です。邪悪なニネベに下る神様の裁きについては、預言者ヨナが 150 年前にしました。ですから、この書物は、ヨナ書の後編だとも言われます。

アッシリヤの首都ニネベは、ヨナの宣教を通して一時的に悔い改め、神様の審判から免れ、神様の哀れみを受けましたが、彼らは再び高慢になり、神様に敵対するようになります。また、彼らはアッシリヤの捕囚に対して、イスラエルに全く哀れみを示さなかったので、神様は哀れみ無しに彼らを裁きます。

●教えられること：

1)ヨナ書は、ニネベの悔い改めを、ナホム書は、ニネベの滅亡を語っています。神様は、敵対する人々に忍耐をもっておられる方ですが、その忍耐によって、もっと激しいさばきを与えられます。

2)神様に対するアッシリヤの罪は、神様の神聖と威厳を無視するものでした（参考、第 2 列王記 18:33－35、第 2 歴代誌 32:17)。

3)神様は、敵の破滅を宣告することで、ご自身の民を慰めます。

ナホム書　　全3章(47節)

ナホム書は、イスラエルを懲らしめたアッシリヤ帝国に神様の審判が下ったことと、それで慰められるイスラエルを描写します。

●ナホム書の内容：

1．神様の審判の宣告（1 章）
　1)表題(1:1)
　2)神のあわれみと神の怒り(1:2－8)
　3)神の審判の宣告(1:9－14)
　4)神の民への救いの宣告(1:15)

2．ニネベの滅亡の描写（2 章）
　1)包囲されるニネベ(2:1-6)
　2)略奪されるニネベ(2:7-9)
　3)徹底的に破滅されるニネベ(2:10-13)

3．ニネベ破滅の必然性（3 章）
　1)ニネベの恥(3:1-7)
　2)ノ・アモンとの比較(3:8-10)
　3)絶望的なニネベ(3:11-19)

●ナホム書の構造：

1 章	2 章	3 章
神の審判の宣告	ニネベの滅亡の描写	ニネベの没落

35. ハバクク書(The Book of Habakkuk)

●ハバクク書の書名と著者：

この書物は、預言者ハバククと神様との問答や神様の啓示、ハバククの祈りが記されていることから、「ハバクク書」と名づけられました。ハバククという名前は、「抱きしめる」という意味をもっています。それでルターは、「ハバククは、泣く赤ん坊を抱きしめるように自分の民を抱きしめ、神様がなさろうとすれば、この民は直ちに癒されるという確信から民を慰めた。」と語りました。

著者は、預言者ハバククです。ハバククは、預言者エレミヤと同時代の人物で、バビロンがニネベを陥落させた紀元前 612 年前後、あるいはエホヤキムの治世の時代に預言者活動をしたと思われます。

●ハバクク書の目的：

この書物の大半は、ハバククと神様との問いかけと答えが記されています。ハバククは、「イスラエルの民の腐敗と混乱を訴えること」と、「彼らに対する神様の沈黙について」、そして、「異教徒を用いて彼らを裁くことは、神様の聖に矛盾するのではないか」という問いかけをします。しかし、神様の答えを通してハバククは、神様の裁きに対して私たちはただ神様の哀れみを求めるべきだということを悟ります。また、私たちが神様の裁きの中にあっても神様を信頼して行くべきであることを語り、神様に対する変わらない信仰を教えます。

●教えられること：

1)ハバククは「信仰の預言者」という別名があり、宗教改革の祖父であるとも呼ばれています。
2)1:12－17 は、ハバクク書のみならず聖書全体の中心主題です。
3)神様はいつも一貫しておられる方です。

ハバクク書　　全 3 章(56 節)

ハバクク書は、ハバククと神様との問答が記され、神様から裁かれる時でも神様を信頼し、神様に哀れみを求めるべきことを教えています。

●ハバクク書の内容：

1．預言者と神との問答（1:1－2:4）
　1)表題(1:1)　　2)預言者の悩み(1:2-4)
　3)神の答え(1:5-11)　　4)預言者の疑問(1:12－2:1)
　5)神の答え(2:2－4)
2．カルデヤ人に対する神の審判（2:5－20）
3．預言者の祈りと賛美（3 章）
　1)ハバククの祈り(3:1-2)　　2)裁き主の現れ(3:3-7)
　3)恐るべき裁き(3:8-15)　　4)信仰の勝利(3:16-19)

※エルサレムの滅亡:南ユダ王国は、紀元前 622 年ヨシヤ治世に宗教改革を行いましたが、ヨシヤが殺され、エホアハズ王、エホヤキムが王位に着きます。その時バビロンの攻撃を受けます。そして、エホヤキンが王になりますが、バビロンのエルサレム侵略によって王は捕虜となり、紀元前 586 年、ついにエルサレムが滅ぼされてしまいます。

●ハバクク書の構造：

1:1－2: 4	2:5－20	3:1－19
預言者と神との問答	バビロンに対する神の審判	預言者の祈りと賛美

36. ゼパニヤ書(The Book of Zephaniah)

●ゼパニヤ書の書名と著者：

この書物は、預言者ゼパニヤに啓示された預言が記されていることから、「ゼパニヤ書」と名づけられました。ゼパニヤという名前は、「神は隠された」という意味をもちます。預言者ゼパニヤは、ヒゼキヤ王の四代目の孫に当たり、ヨシヤ王（紀元前 640－609）の宗教改革に重要な役割を果たしました。この書物は、ゼパニヤによって書かれました。記録されたのは、ヨシヤ王による宗教改革の少し前だと思われます。

●ゼパニヤ書の目的：

預言者ゼパニヤのメッセージの焦点は、「主の日」です。彼はこの言葉を他の預言者より多く用いています（7 回)。主の日という言葉は、神様が特別なことをなさる時のことを意味します。ゼパニヤの預言は、マナセ王とアモン王の悪政に始まった最悪の時代を背景にしています。ですから彼は、主の日は神の怒りの日、すなわち、厳しい神様の裁きの日で、その主の日が近づいていることを、警告しています。同時に、神様ご自身の民に対するいくつかのすばらしい約束を告げています。

●教えられること：

1)神様の普遍的な審判を語っている書です。

2)神様の審判と同時に救いを語っています。神様の審判と救いは、切り離すことのできない神様の啓示です。預言者たちはこの両者の緊張関係の中で活動をしました。ゼパニヤは、徹底した神様の審判によって神様の祝福を受けることが可能であり、その奥に希望があるからこそ、神様はご自分の民を罰せられると信じました。審判の内容で始まっていることは、神様の愛を立証するためでもあります。

ゼパニヤ書　　全 3 章(53 節)

ゼパニヤ書は、主の日は神様の審判の日で、主の日が近づいていることを警告しています。また、民に対する神様のすばらしい約束を告げています。

●ゼパニヤ書の内容：

1．エルサレムに対する審判（1:1－2:4)

1)預言者の紹介(1:1)　2)審判の宣言(1:2-3)

3)審判の原因(1:4-13)

①偶像礼拝(1:4－6)　②指導者階級の罪(1:7－9)

②商人、富者の罪(10－13)

4)主の日の審判(1:14-18)

5)悔い改めの勧告(2:1-3)

2．諸国に対する審判（2:4－15)

1)ペリシテ(2:4-7)　2)モアブとアモン(2:8-11)

3)クシュ人(2:12)　4)アッシリヤ(2:13-15)

3．エルサレムの審判と救い（3:1－20)

1)エルサレムの堕落(3:1-5)　2)警告(3:6-8)

3)残りの者の回心(3:9-13)　4)シオンの回復(3:14-17)

5)神の民の回復(3:18-20)

●ゼパニヤ書の構造：

1:1-2:4	2:4-15	3:1-20
エルサレムへの神の審判	諸国への神の審判	エルサレムの審判と回復

37. ハガイ書(The Book of Haggai)

●ハガイ書の書名と著者：

この書物は、預言者ハガイに啓示された神様のメッセージが記されていることから、「ハガイ書」と名づけられました。ハガイという名前は、「主の祭り」という意味をもっています。

ハガイ書は、エズラ記・ネヘミヤ記・エステル記と同時代のことを扱っているので、それらの書物を参考にして読むことはハガイ書の理解に役立ちます。

クロス王によってバビロンから解放されて（紀元前 539 年）帰還したイスラエルの民はすぐ神殿再建に着手しました。しかし、残留民とサマリヤ人の妨害によって、工事は間もなく挫折しました。一方、ペルシヤ帝国は崩壊の危機に直面して、各地で反乱が続発していた時でした。そのような時期、ハガイの預言活動が行われました（紀元前 520 年のダリヨス王の時代。この時期は、中国では孔子が活動した時期であります。）

●ハガイ書の目的：

ハガイ書は、4 カ月間という短い期間に書かれ、神様の四つのメッセージを記しました。そのメッセージは責めと警告から始まり、神殿の再建工事は祝福の約束であることを明確に示しています。すなわち、この書物は、汚れと聖の原則を明確に提示し、神の民に対する祝福を予告しています。

●教えられること：

1)メッセージには日付があり、日付順で記されています。また文体は散文で、質問形式をもっていることで、メッセージをより力強く語っています。

2)神殿再建を通して神の御心に従うことと、不従順の結果がどのように違うかを語ります。また、神殿に関する預言の中に霊的な宮に関する預言が織り込まれています。

ハガイ書　　全 2 章(38 節)

ハガイ書は、責めと警告から始まり、神殿の再建工事が祝福の約束であることを示すことで、汚れと聖の原則を明確に示しています。

●ハガイ書の内容：

1．第一のメッセージ（1:1－15）：6 月 1 日（紀元前 520 年）
　1)民の現状(1:1-2)
　2)神殿建築の再開の命令(1:3-11)
　3)命令に対する民の応答(1:12-15)

2．第二のメッセージ（2:1－9）：7 月 21 日
　1)神殿工事への激励(2:1-5)
　2)神殿の未来の栄光について(2:6-9)

3．第三のメッセージ（2:10－19）：9 月 24 日
　1)聖と汚れについて(2:10-14)
　2)祝福の約束(2:15-19)

4．第四のメッセージ（2:20－23）：9 月 24 日
　1)諸国に対する審判(2:20-22)
　2)ゼルバベルへの約束(2:23)

●ハガイ書の構造：

1:1－15	2:1－9	2:10－19	2:20－23
責めと警告	勧め	祝福	約束

38. ゼカリヤ書(The Book of Zechariah)

●ゼカリヤ書の書名と著者：

この書物は、預言者ゼカリヤに啓示された預言が記されていることから、「ゼカリヤ書」と名づけられました。ゼカリヤという名前は「神が覚えておられる」という意味です。預言者ゼカリヤはエレミヤやエゼキエルと同じく預言者であり、祭司長であった人物です。この書物には 3 回に亙って日付が記されています。最初は、「ダリヨス王の第 2 年の第 8 の月」で、最後は、「ダリヨス王の第 4 年の第 9 の月」(紀元前 520-518 年の期間)です。この年代は、神殿工事再開の 2 カ月後から始まり、神殿完成の半ばまでの期間です。時代的な背景は、ハガイ書と同じです。

●ゼカリヤ書の目的：

預言者ゼカリヤは、預言者ハガイと同じく神殿の再建工事を激励する働きをしました。特に、ゼカリヤは、未来の神殿を示すことによって、民に神殿再建の確信と励ましを与えました。ですから、この書物には数多くの幻が記されています。

この書物は、大きく二つに分けられます(1-8 章と 9-14 章)。前者には、当時の人々に直接かかわりを持つメッセージが書かれています。後者には、終末の出来事が記されています。

●教えられること：

1)ルターは、この書物を預言書の代表作だと語りました。なぜなら、聖書預言の本質を知ることができるからです。
2)預言者ハガイのメッセージの本質は、民の怠慢な神殿再建の働きを非難するものでしたが、ゼカリヤは、ねたむほど激しく愛す神様の心境で、その民を励ますものでした。
3)キリストの人格とその活動を詳しく説明する預言があります。

ゼカリヤ書　　全 14 章（211 節）

ゼカリヤ書は、エルサレムとシオンをねたむほど激しく愛した神様の心境と、メシヤに対する数多い幻が記されている書物です。

●ゼカリヤ書の内容：

1．八つの幻（1―6 章）
1)悔い改めの勧告(1:1-6)　2)赤い馬の騎手の幻(1:7-17)
3)四つの角と職人の幻(1:18-21)　4)測り綱を持った人の幻(2 章)
5)大祭司の衣服の幻(3 章)
6)燭台と二本のオリーブの木の幻(4 章)
7)空飛ぶ巻き物の幻(5:1-4)　8)エパ枡と女の幻(5:5-11)
9)四台の戦車の幻(6:1-8)　10)大祭司の載冠(6:9-15)

2．質問（7―8 章）
1)真の断食とは(7:1－14)
2)エルサレムの栄光について(8:1－23)

3．警告（9―14 章）
1)メシヤの再臨(9 章)　2)イスラエルの回復(10 章)
3)神の審判について(11 章)　4)エルサレムの救い(12 章)
5)罪と汚れのきよめ(13 章)　6)主の日の出来事(14 章)

●ゼカリヤ書の構造：

1―6 章	7―8 章	9―14 章
八つの幻	質問	警告

39. マラキ書(The Book of Malachi)

●マラキ書の書名と著者：

マラキ書は、この書物の中心人物であり、著者である預言者マラキから名づけられました。マラキという名前は、この書だけ出て来る名で、「わたしの使者」という意味です。

預言者マラキは、捕囚後の時代に活動したと思われます。あるいは、この書物の背景とネヘミヤ記の背景と類似していることから、ネヘミヤの時代に活動したとも言われています。預言者マラキは、旧約時代にイスラエルに語りかけた最後の預言者です（紀元前5 世紀)。

●マラキ書の目的：

この書物のメッセージは、ほとんどが罪の宣告と責めの内容です。帰還したイスラエルの民の霊的生活が細かく書かれていて、いろいろな問題が摘出されます。それは、①神様の愛についての不信、②神様の公義、神様の支配に対する懐疑、③敬虔な生活に対する疑問などです。これらの問題が明らかにされた民のつぶやきの言葉を軸にして、それに対する神様の答えが書かれました。

●教えられること：

1)神様と民の論争という形式で、イスラエルの罪を叱責しています。「従順は祝福、不従順は呪い」をもたらすという神様とイスラエルとの契約関係を強調しています。従順は、特に十分の一の奉納物に対する姿勢から取り上げています。

2)審判の根拠になる「神の記録の書」を語っています。

3)マラキが神様の使者が遣わされると語ってから、その使者であるバプテスマのヨハネが来るまで、400 年の時がありました。彼は、契約の子孫であるイエス様のために、道を整えました。

マラキ書　　全4章(55節)

マラキ書は、いかに民が神様に対して懐疑と不信をもっていたかを示し、神様に立ち返る者への約束を語っています。

●マラキ書の内容：

1．イスラエルの特権（1 ：1 ー5 ）
　1)表題(1:1)
　2)神の愛の証明(1:2-5)

2．イスラエルの堕落（1 ：6 ー3 ：15)
　1)祭司長たちの罪(1:6-2:9)
　　①ささげ物の問題（1:6-14）　②祭司の堕落（2:1-9）
　2)民の罪(2:10-3:15)
　　①偶像崇拝者と結婚(2:10-13)②離婚(2:14-16)
　　③裁きの宣言(2:17-3:6)　④祝福阻止の原因(3:7-12)
　　⑤高慢(3:13-15)

3．イスラエルに対する約束（3 ：16ー4 ：6 ）
　1)敬虔な者への約束(3:16-18)
　2)主の日(4:1-3)
　3)結語(4:4-6)

●マラキ書の構造：

1:1ー5	1:6ー3:15	3:16ー4:6
イスラエルの特権	イスラエルの堕落	イスラエルに対する約束

新約聖書の目次

マタイの福音書	44
マルコの福音書	45
ルカの福音書	46
ヨハネの福音書	47
使徒の働き	48
ローマ人への手紙	49
第 1 コリント人への手紙	50
第 2 コリント人への手紙	51
ガラテヤ人への手紙	52
エペソ人への手紙	53
ピリピ人への手紙	54
コロサイ人への手紙	55
第 1 テサロニケ人への手紙	56
第 2 テサロニケ人への手紙	57
第 1 テモテへの手紙	58
第 2 テモテへの手紙	59
テトスへの手紙	60
ピレモンへの手紙	61
ヘブル人への手紙	62
ヤコブの手紙	63
第 1 ペテロの手紙	64
第 2 ペテロの手紙	65
第 1 ヨハネの手紙	66
第 2 ヨハネの手紙	67
第 3 ヨハネの手紙	68
ユダの手紙	69
ヨハネの黙示録	70

40. マタイの福音書(The Gospel According To St. Mattew)

●マタイの福音書の書名と著者：

この書物は、マタイが書いたことから「マタイの福音書」と名づけられました。マタイという名は、当時の批判されていた取税人レビのことで、キリスト教式の別名です（神の贈り物という意味)。著者がマタイだと思うのは、収税人レビとマタイという名前が一緒に記されているからです。

記録年代は明確ではありませんが、イエス様の復活の事件からかなり過ぎた後、恐らくエルサレム滅亡（70 年）の前にユダヤ人が多く住んでいたアンテオケで書かれたと思われます。

●マタイの福音書の目的：

冒頭を飾る最初の「アブラハムとダビデの子孫」という表現から、当時のユダヤ人の心へ訴えるためのものであることが分かります。すなわち、①イエス様は旧約聖書の預言通り来られたこと、②イエス様こそメシヤで、ユダヤ人の王であることを、ユダヤ人に納得させようとする目的で書かれました。

●教えられること：

1)イエス様は、旧約聖書が預言した通り来られたメシヤであり、王であることを強調しています。そのために旧約聖書の引用が多く、「ダビデの子」という言葉も多く(9 回)使われています。

2)イエス様の教えを、ユダヤ人の伝統にそって 5 つで書き記しています。山上の垂訓(5ー7 章)、弟子派遣(10 章)、例え話(13 章)、赦しの教え(18 章)、終末の教え(24､25 章)などで、これらの教えをもって天の御国を豊かに示しています。

3)天の御国は神の御国と同じ言葉で、イエス様が来られたことで御国も臨んだと教えます。それで、御国に対するメッセージが全体の内容に及んでいます（32 回も書かれていて、「天国の福音」という別名がある)。

マタイの福音書　全 28 章（1071 節）

マタイの福音書は、ユダヤ人を意識して書かれたことで、イエス様が旧約聖書の通り来られたメシヤであることを明記しています。

●マタイの福音書の内容：「王としてのイエス」

1．王の誕生と先駆者（1ー3 章）
2．王としての宣言（4:1ー25）
3．王の律法（5ー7 章)：山上の垂訓
4．王の働き（8ー10 章）
　1)病気に対して(8:1-17)　2)自然に対して(8:18-27)
　3)悪霊に対して(8:28-34)　4)赦しに対して(9:1-8)
　5)人間の意志(9:9-13)　6)死に対して(9:14-26)
　7)癒し(9:27-34)　8)権威を授ける(9:35-10 章)
5．排斥される王（11ー12 章）
　1)バプテスマのヨハネの疑い(11:1-15)
　2)コラジンとベツサイダでの排斥(11:16-30)
6．王の教え（13ー20 章）
　1)例え話で(13 章)　2)教会に対して(16:13-20)
　3)罪と赦し(17:24-20:16)
7．王の入城（21ー25 章）
　1)エルサレム入城(21－23 章)　2)預言(24－25 章)
8．王の死と復活（26ー28 章）

●マタイの福音書の構造：

1-2 章	3ー18 章	19-20 章	21-25 章	26-28 章
誕生	伝道活動	エルサレムの途上	エルサレムで	受難と復活

41. マルコの福音書(The Gospel According To St. Mark)

●マルコの福音書の書名と著者：

福音書の表題の名前は著者を意味します。この書物は、マルコによって書かれたので「マルコの福音書」と名づけられました。マルコは、使徒ペテロの通訳官として彼の伝道活動を助けた人物です。

この書物の記録年代に関する資料の中では、ペテロがローマを離れた後（離れた時を彼の死と理解すれば、書かれたのは 64 年頃）ペテロの説教をマルコが集めて書いたと語っています。このことから、60 年頃ローまで書かれたと思われます。

●マルコの福音書の目的：

この書の内容は大きく二つに分けられます。1-10 章は、イエス様の伝道活動の出来事が、11-16 章は、イエス様の十字架の出来事が記されています。この書物の目的を明確に示している箇所があります。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」（10：45）がそうです。すなわち、イエス様は、人々に仕えるために来られたしもべであることを教えます。

●教えられること：

1)イエス様は、仕えるために来られた神の忠実なしもべであることを強調しています。ですから、イエス様の言葉よりも行ないに重点が置かれています。マタイが福音書で、「王であるイエス様の肖像画」を描いたとすれば、マルコは「活動するイエス様の姿を何枚かの絵」で描こうとしました。特に、直ぐ、直ちにといった言葉を使って、イエス様の継続的な活動を現実感覚で記しています。

2)神の御国において偉くなる方法は、すべての人のしもべになることだと教えています。

マルコの福音書　全16章(678節)

マルコの福音書は、イエス様が仕えるために来られ、贖いの代価として、自分の命を多くの人々に与える姿を記しています。

●マルコの福音書の内容：「しもべとしてのイエス」

1．しもべの紹介と伝道活動（1 －5 章）
　1)しもべの紹介(1:1-14)　2)伝道活動(1:14-3:12)
　3)12 弟子を選ぶ(3:13-19)　4)たとえによる教え(4 章)
　5)様々な奇跡(4:35-5 章)

2．しもべに対する反対（6 章－8:26）
　1)郷里の人の反対(6:1-6)　2)弟子派遣（6:7-29）
　3)五餅二魚の奇跡(6:30-44)　4)奇跡を行う(6:45-56)
　5)パリサイ人の過ち(7:1-23)　6)地方伝道(7:24-8:26）

3．しもべの教え（8:27－10 章）

4．しもべの入城と排斥（11－12 章）
　1)エルサレム入城（11:1-14）　2）宮のきよめ(11:15-19)
　3)教えと論争(11:27-12:44)

5．しもべの預言（13 章）
　1)宮の滅亡（13:1-4）　2)終末の預言(13:5-37)

6．しもべの受難（14－15 章）
　1)晩餐とゲツセマネ(14:1-52)　2)葬儀(14:53-15:47）

7．しもべの復活（16 章）

●マルコの福音書の構造：

1－9 章	10 章	11－13 章	14－16 章
伝道活動	エルサレムへの途上	エルサレムで	受難と復活

42. ルカの福音書(The Gospel According To St. Luke)

●ルカの福音書の書名と著者：

この書物はルカが書いたので、「ルカの福音書」と名づけられました。この書物には著者の名前が出ていませんが、イエス様の目撃者でない人の中で、ルカのように信仰深く、細心で、教養ある人物はいません。ですから、この書物はルカによって書かれたと思われます。ルカは医者であり、使徒パウロの伴侶者でもありました。

この書物は、使徒の働き（64 年）よりは前に書かれましたので、60－64 年の間、ローマで書かれたと思われます。

●ルカの福音書の目的：

この書物は、テオピロが既に聞いたことが確かなものであることを知らせるために書かれました（1：4)。それは、当時の誤ったイエス様の生涯の記録を防ぐためでもあります。また、この書物は、この世で一番美しい本であります。なぜなら、この書物は失われた者を訪ね、救うために来られたイエス様の秀麗な姿を描いているからです。

●教えられること：

1)十字架の出来事を中心的な主題として、失われたすべての者を救うために来られたイエス様の姿を強調しています。

2)神様の御心に従うことで、イエス様は、人間に対する神様の救いの計画を成就されたと教え、従順の大切さを強調します。

3)アブラハムの子孫であるイスラエルの人々だけではなく、異邦人の中でもイエス様によって神様の民となれる事実、すなわち福音がすべての人々に開放されたことを教えます。

4)聖霊とイエス様の関係を語っています。この書物は、イエス様が聖霊によって生まれたということから始まり、聖霊の力によって活動をし、また、信じる人々に聖霊が注がれるというイエス様の約束で終わっています。

ルカの福音書は、失われた者を訪ね、救うために来られたイエス様の秀麗な姿を描いている、この世で一番美しい書です。

●ルカの福音書の内容：「人の子としてのイエス」

1．人の子に対する準備と紹介（1：1－4：13）
　1)ザカリヤの預言(1:5-25)　2)マリヤにお告げ(1:26-56)
　3)先駆者の誕生(1:57-80)　4)イエスの幼年時代(2 章)
　5)紹介(3:1-4:13)

2．人の子の伝道活動（4:14-9:50）
　1)使命(4:14-30)　2)奇跡を行う(4:31-6:11)
　3)弟子を選ぶ(6:12-19)　4)山上の垂訓(6:20-49)
　5)奇跡と例え話(7:1-9:17)　6)十字架を預言(9:18-50)

3．人の子の教え（9:51-19:27）

4．人の子のエルサレム入場と宮のきよめ（19:28-19:48）

5．人の子に対する排斥（20:1-21:4）

6．人の子の預言（21:5-21:38）
　1)宮の破滅(21:5-6)　2)再臨の前兆(21:7-19)
　3)エルサレム滅亡(21:20-24)　4)終末への準備(21:34-38)

7．人の子の受難と復活、昇天（22－24 章）
　1)エマオの弟子(24:13-35)　2)弟子たちに(24:36-43)
　3)至上命令(24:44-48)　4)イエスの昇天(24:49-53)

●ルカの福音書の構造：

1-2 章	3-18 章	18 章	19-21 章	22-24 章
誕生	伝道活動	エルサレムの途上	エルサレムで	受難と復活

43. ヨハネの福音書(The Gospel According To St. John)

●ヨハネの福音書の書名と著者：

この書物は、使徒ヨハネによって書かれたことで、「ヨハネの福音書」と名づけられました。使徒ヨハネは、ゼベタイとサロメの子で、イエス様に愛された弟子の一人（21：20)、そして使徒の中でもっとも長生きした人です。

この書物は、ヨハネが 70 年以前エペソへ行ったという記録がないことから、おそらく 80－90 年の間、エペソで記録されたと思われます。

●ヨハネの福音書の目的と教えられること：

この書の目的は、20:30､31 で明確に示されています。すなわち、イエス様が神様の御子キリストであることを、私たちに信じさせるために書かれた書物です。

20：30、31 には三つの重要な言葉があります。

①しるし：イエス様の奇跡をしるしとして扱います。この書物には7 つの奇跡の記録（6 章の 2 つを除けばこの書物だけの記録）があります。ヨハネは、奇跡を通してイエス様が神様であることを示します。

②信じる：この書には、信仰という言葉はなく、「信じる」という動詞形の言葉が 98 回も使われています。このことから、この書物は、信仰についての説明よりも、信じる意味を例証をもって教えようとします。

③いのち：いのちはマタイでは天国、マルコ、ルカでは神の御国と描写された言葉で、本質的には同じ意味です。いのちはイエス様を信じる人々に与えられる永遠のいのちです。

④また、この書物は、他の書物とは異なる構造（説教－奇跡－エルサレム訪問の反復といった構造）をもって、イエス様の内面的、また教理的な面を示しています。

ヨハネの福音書　　全 21 章(879 節)

ヨハネの福音書は、イエス様が神様の御子・キリストであることを、私たちに信じさせるため、書き記された書物です。

●ヨハネの福音書の内容：「神の子としてのイエス」

1．神の子イエスに対する叙述（1:1－18）
2．神の子イエスの公的生涯（1:19－12 章）
　1)個人に伝道活動(1:19-4 章)　2)大衆に伝道活動(5-6 章)
　3)衝突事件(7 章- 11:53)　4)公的生涯(11:54-12 章)
3．神の子イエスの教え（13－17 章）
　1)最後の晩餐(13:1-30)　2)最後の教え(13:31-16 章)
　3)イエスの祈り(17 章)
4．神の子イエスの受難（18－19 章）
　1)背信(18:1-11)　2)審問(18:12-19:16)
　3)十字架と葬り(19:17-42)
5．神の子の復活と現れ（20－21 章）
　1)復活(20 章)　2)最後の現れ(21 章)

●ヨハネの福音書の構造：

1:1-18	1:19-12 章	13-17 章	18-19 章	20-21 章
神の子イエス	イエスの公的生涯	イエスの教え	イエスの受難	イエスの復活と現れ

44. 使徒の働き(Acts)

●使徒の働きの書名と著者：

この書物は、使徒たちが行った活動や業という意味で、「使徒の働き」と名づけられました。ここでの使徒は、イエス様の弟子すべてではなく、ペテロとわずかな記録があるヨハネとヤコブ、そして異邦人の使徒となったパウロのことです。

この書物は、パウロの伝道旅行に同伴したルカによって書かれました。ルカの福音書とは文体が同じで、同一人物に送られました（ルカ福音 1:1-4 と使徒の働き 1:1-2)。記録年代と場所もルカの福音書と同じ、60-64 年頃ローマで記録されました。

●使徒の働きの目的と教えられること：

この書物の目的は、ルカ福音書 1：4 の「聞いたことを確かめるため」でありますが、それ以外にも四つの動機（目的）が記されています。

①教会の拡張と福音がエルサレムからローマまで伝えられた経緯などを描写することです（歴史的な動機)。

②当時の人々はクリスチャンは扇動を起こしたり、ローマ政府に不忠誠であると思っていました。このように信徒に反感が高まりつつあった時期に、この記録は教会を守る役割を果たすものでした（弁証的な動機)。

③聖霊の人格と働きに対する教えが強調されています。それでこの書は「聖霊の働き」と言われています（教理的な動機）。

④教会の指導者であるペテロとパウロについて詳しく描写しています（伝記的な動機)。

それ以外に、

⑤教会での最初の出来事やパウロの書簡の背景を提供する役割をします。

⑥初代教会のメッセージや証しの内容の核心は、イエス様の十字架の死と復活であったことが分かります。

使徒の働き　全 28 章（1007 節）

使徒の働きは、エルサレムからローマまで初代教会の出来事と福音が伝えられた経緯が記されている教会の歴史書であります。

●使徒の働きの内容：

1．序文：委ねられた使命（1:1-11）
2．開拓期：エルサレムでの福音（1:12-8:3）
　1)ペテロの活動(1:12-5:42)　2)ステパノの活動(6:1-8:3)
3．過渡期：サマリヤとユダヤでの福音（8:4-11:18）
　1)ピリポの活動(8:4-40)　2)サウロの改心(9:1-9:31)
　3)ペテロの異邦人伝道（9:32-11:18)
4．全盛期：福音の拡張（11:19-21:14）
　1)バルナバ、ペテロ、サウロの活動(11:19-12:25)
　2)第1 次伝道旅行(13-14 章)　3)エルサレム会議(15:1-35)
　4)第2 次旅行(15:36-18:22)　5)第3 次旅行(18:23-21:14)
5．カイザリヤとローマでの伝道（21:15-28:29）
　1)逮捕(21:15-23:10)　2)拘禁(23:11-26:32)
　3)ローマでの拘禁(27:1-28:29)
6．結語／使徒職の完遂（28:30-31）

●使徒の働きの構造：

1-2 章 聖霊の降臨	3-8 章 ユダヤから	9-21 章 異邦人へ	21-28 章 地の果

45 .ローマ人への手紙(The Epistle To The Romans)

●ローマ人への手紙の書名と著者：

この書簡は、使徒パウロがローマの教会宛に送ったことから「ローマ人への手紙」と名づけられました。この書簡は、使徒パウロが第3次伝道旅行が終わる頃（57年冬)、コリントで3カ月間滞在したとき、テルテオが代筆し（16：22)、フィベによってローマへ送られたと思われます。

●ローマ人への手紙の目的：

この書簡を記録した目的についてはいろいろな理解があります。その中で、現実の必要に応じて書かれたという観点から、次のような目的が考えられます。

それは、世界の中心であるローマの教会が直面し易い問題、すなわち、あらゆる思想と宗教が混在している状況での生活から、異教文化に対する理解の調節が必要であったこと、また、福音の真理を全体として体系的に学び、福音の言葉をしっかり保つようにする必要があったことです。

●教えられること：

1)救いの主題を扱うことで、すべての神の啓示を理解する基礎となっています。

2)救いの真理を、ユダヤ人であれ、ギリシャ人であれ、同様に適用しながら教えています。

①すべての人類が罪の下に有罪であると結論づけています。すなわち、すべての人々は罪の下にあって、神様が受け入れられる義人は一人もいないことを教えます。

②神様に受け入れられる義は、信仰による義だけである、という神様の方法についての教理的な説明を与えています。

3)この書簡は、「クリスチャンの信仰の神殿」と言われるほど豊かな教えと実践的な教えが多く書かれてあります。

ローマ人への手紙　全16章(433節)

ローマ人への手紙は、信仰によって義と認められるという「信仰義認」をはじめ、キリスト教の教理の真髄を語っている書簡です。

●ローマ人への手紙の内容：

1．序文：挨拶と主題（1:1-17）

2．義認の教理(1:18-5章)

1)義認の必要性(1:18-3:20)

①異邦人の罪(1:18-32)　②道徳主義者の罪(2:1-16)

③ユダヤ人の罪(2:17-3:8)　④全人類の罪（3:9-20）

2)義と認められる根拠（3:21-26）

3)義と律法との関係(3:27-31)　4)義認の説明(4:1-25)

5)義認の確証(5:1-11)　6)普遍的な性格(5:12-21)

3．聖化の教理（6―8章）

1)聖化の基礎(6:1-14)　2)聖化の原理(6:15-23)

3)聖化の新しい関係(7章)　4)聖化の能力(8:1-17)

5)勝利の希望と賛歌(8:18-39)

4．神の義に関する弁論：イスラエルの歴史観（9―11章）

5．神の義の適用：キリスト者の倫理（12:1-15:13）

1)倫理の基礎(12章)　2)社会の倫理(13章)

3)教会の倫理(14:1-15:13)

6．結語と挨拶（15:14-16章）

●ローマ人への手紙の構造：

1-5章	6-8章	9-11章	12-15章	16章
序論と義認の教理	聖化の教理	救いの歴史	倫理について	結語

46. 第 1 コリント人への手紙(1st Corinthians)

●第 1 コリント人への手紙の書名と著者：

この書簡は、使徒パウロがコリントの教会宛に送ったことから、「コリント人への手紙」と名づけられました。記録年代や場所を知ることは難しいですが、55 年の冬、エペソだと思われます（第 3 次伝道旅行の時、使徒行伝 19 章参考）。

当時のコリント市は、人口 50 万の大都市でした。交通や商業の十字路であったので、多様な国籍と人種、富と快楽の都市でした。多くの人々は、富と快楽に心を奪われて、罪深いことを行うなど、道徳的に堕落した都市でした。また、女神アフロディーテの神殿が市の中心の一番高い所にあったように、偶像を礼拝するため多くの神殿を建てました。

コリントの教会は、パウロがコリント市で 18 カ月間滞在し、伝道活動の結果として建てられました（参考、使徒行伝 18 章）。

●第 1 コリント人への手紙の目的：

この書簡を記録した目的は、コリント教会の諸問題を矯正するためです(1-6 章)。特に、教会の争いについて厳しく責めています。また、7 章以下は、送ってもらった手紙の返事として書かれたことが分かります。全体の内容からこの書簡は、教会が成長する過程で直面する種々の問題を扱い、解決への教えを示しています。

●教えられること：

1)神様の教会は、神様の知恵と力によって建てられるものであって人間の知恵と力によって建てられると、これが神様の教会かと思われるような様々な問題が出てくることを教えます。

2)教会の徳を高めるのは健全な教理であり、教会を動かす動機となるものは神様の愛である、と教えます。

第 1 コリントへの手紙　全 16 章(437 節)

第 1 コリント人への手紙は、教会が成長する過程で直面する種々の問題を扱い、解決への教えを示すために書かれた書簡です。

●第 1 コリント人への手紙の内容：

1．序文：挨拶と感謝（1:1ー9）

2．コリント教会からの報告（1:10ー6 章）

1)争いの問題(1:10-4:21)　2)性的堕落の問題(5 章)

3)訴訟の問題(6:1-11)　4)聖霊の宮について(6:12-20)

3．コリント教会から来た手紙への返事（7:1ー16:9）

1)結婚の問題(7 章)　2)知識の問題(8-10 章)

3)公の礼拝の問題(11 章)　4)霊的賜物の問題(12-14 章)

5)復活の問題(15 章)　6)献金の問題(16:1-16:9）

4．結語（16:10ー24)

※参考：霊的賜物と復活について

1)霊的賜物について（12-14 章）：霊的賜物は、信徒のうちにおられる聖霊に対する表現で、その賜物は、愛によって確証され、また全てを適切に、秩序をもって正しく行うものです。

2)復活について（15 章）：①復活の歴史性を強調（15:1-11）②復活の意味を強調（15:12-57）:信徒はキリストと同様によみがえり(15:42-49)、神様の国を継ぐ者なのです（15：10）。

●第 1 コリント人への手紙の構造：

1:1-9	1ー8 章	9ー16 章
序論	矯正的部分：肉的な事柄	建設的部分：霊的な事柄

47. 第 2 コリント人への手紙(2nd Corinthians)

●第 2 コリント人への手紙の書名と著者：

使徒パウロが第 1 の書簡を送り、さらにテモテがコリントの教会を訪ねましたが、コリント教会の内の問題は解決できませんでした。それで、テトスを送りました。そのテトスから朗報を聞きますが、まだ問題が残っていることが分かります。それでパウロは、コリントの訪問の前、手紙を書き送りました。それが「第 2 コリント人への手紙」です。この書簡は、第 1 の手紙が書かれて、それほど経っていない頃（56 年頃)、マケドニヤで書かれました。

●第 2 コリント人への手紙の目的：

この書を記録した直接的な目的は、教会の大半の人々が悔い改めたということに対して、感謝と彼らに慰めを与えると同時に新たな危険、たとえば、ユダヤ人の偽教師が誤った福音を教えたり、パウロの使徒職を非難することに対する警告のためです。すなわち、慰めと使徒職を教えるために書かれました。

主な内容は、①以前の手紙に従ったことを称賛（7:4、15)、②悔い改めた人々を慰め(2：6-9)、③悔い改めなかった人々に対して厳しく叱責(12:21、13:2)、④使徒に対抗する偽教師へ警告（11:3-4、13)、⑤自分の使徒職を弁護(11-12 章)、⑥エルサレム教会の貧しい信徒への献金を用意すること(8:10)です。

●教えられること：

1)使徒パウロは、書簡の中で自分のありのままの姿をよく語っています（パウロの多くの資料を見ることができます)。同時に、神様の働き人は、自分自身ではなく、主を誇る者だと教えます。

2)教会の懲戒の主な目的は、非難ではなく、むしろ回復です。

3)新約聖書の中で祝祷が書かれている（13：13）のはこの書簡だけです。

第 2 コリント人への手紙　全 13 章（256 節）

第 2 コリント人への手紙は、教会を愛しながら慮っている牧会者のありのままの姿がよく表されている書簡です。

●第 2 コリント人への手紙の内容：

1．挨拶（1:1-2）と個人的な関心（1:1-2:13）
　1)苦難の目的(1:3-11)　2)計画の変更(1:12-2:4)
　3)違反者に忠告(2:5-11)　4)教会に対する悩み(2:12-13)

2．福音伝道に対する弁護（2:14－7 章）
　1)反律法主義者(2:14-3:18)　2)サタンの妨害(4 章)
　3)キリスト者の希望(5:1-10)　4)宣教の本質(5:11-6:10)
　5)和睦の教え(6:11-7 章)

3．救済献金のために（8－9 章）
　1)マケドニヤ教会の模範(8:1-7)　2)献金の動機(8:8-15)
　3)教会代表者の証言(8:16-9:5)　4)与える者の幸せ(9:6-15)

4．使徒職の弁護（10 章－13:10）
　1)使徒職の正当性(10 章)　2)正しい使徒像(11:1-15)
　3)偽教師との相違(11:16-33)　4)使徒への啓示(12:1-18)
　5)悪に対する警告(12:19-13:10)

5．結語（13:11-13）

●第 2 コリント人への手紙の構造：

1－2 章	3－7 章	8－9 章	10－13 章
挨拶と個的な関心	福音伝道に対する弁護	救済献金に対する教え	涙の手紙／使徒職弁護

48. ガラテヤ人への手紙(The Epistle To The Galatians)

●ガラテヤ人への手紙の著者と書名：

この書簡は、使徒パウロがガラテヤの諸教会（信徒の群）を訪問した後、諸教会に重大な危機が襲い、そのために送った手紙なので、「ガラテヤ人への手紙」と名づけられました。

著者は、使徒パウロですが、記録年代については大きく二つの考えがあります。それは、宛先のガラテヤの諸教会の所在地が、「南ガラテヤ」か「北ガラテヤ」かという考えです。「南ガラテヤ説」なら、47-48 年頃、「北ガラテヤ説」なら、56 年頃マケドニヤで書かれたと考えられます。

●ガラテヤ人への手紙の目的：

この書簡の直接的な動機は、1-2 章に記されています。それは、ガラテヤの諸教会がエルサレム会議で決まったことを無視し、割礼が救いのために必要な要素であることを教えていることと、パウロの使徒としての権威を正面から拒んでいることです。それで、パウロは、教理的な弁証とパウロ自身の使徒職を弁護するために書簡を送りました。また、この書簡は「キリスト者の自由に関する宣言文」という別称をも持っています。

●教えられること：

1)この書簡は、「律法か恵みか」という二者択一を要求する文で、それが大胆かつ率直に語られています。

2)アブラハムの契約と新しい契約が、モーセの契約にまさることを教えています。

3)新しい契約の下における、クリスチャンの自由の教理を確立しています。

4)クリスチャンは、神様を喜ばせることを行えるように、互いに助け合うべきです。

ガラテヤ人への手紙　全 6 章（149 節）

ガラテヤ人への手紙は、いつも教会を正しく導く光と、神様との関係を回復する唯一の道が神様の恵みであることを示しています。

●ガラテヤ人への手紙の内容：

1．挨拶（1:1-2）と記録の動機（1:1－10）

2．福音の起源（1:11－2 章）

1)キリストからの啓示(1:11-24)

2)エルサレム会議で確認された福音(2:1-10)

3)パウロの一貫性ある行為(2:11-21）

3．福音の本質（3－4 章）

1)一貫性が欠けている教会（3:1-5）

2)信仰によって義と認められたアブラハム（3:6-9）

3)律法ののろい(3:10-14)　4)律法の目的(3:15-18)

5)律法の役割(3:19-22)　6)信仰の卓越性(3:23-4:11)

7)個人的な訴え(4:12-20)　8)両契約の比較(4:21-31)

4．キリスト者の自由（5 章－6:10）

1)律法主義(5:1-12)　2)自由の使い方(5:13－15)

3)御霊の実(5:16-26)　4)信徒の助け合い(6:1-10)

5．結語（6:11－18）

1)十字架を誇る信仰(6:11-16)　2)結語(6:17-18)

●ガラテヤ人への手紙の構造：

1:1-10	1:11-2 章	3-4 章	5:1-6:10	6:11-18
挨拶と動機	福音の起源	福音の本質	自由に対する教え	結語

49. エペソ人への手紙(The Epistle To The Ephesians)

●エペソ人への手紙の書名と著者：

この書簡は、エペソの教会だけでなく、小アジアの首都エペソ市を始めとする小アジアの諸教会に宛てられた回覧用の手紙だと推測されます。しかし、エペソの教会もその対象の一つなので、古くからこの書簡を「エペソ人への手紙」と名づけられました。著者は使徒パウロです（1:1、3:1）。記録した場所がローマの獄中なので、この書簡は「獄中書簡」と呼ばれています。記録した年代は、61－62 年頃だと思われます。

エペソの教会は、パウロの伝道によって始まりました。パウロは 54 年春、アンティオケへ帰る途中エペソで短期間滞在したことがあります。その後、第 3 次伝道旅行のとき 2 年間以上滞在しながら伝道をし、その結果エペソ教会が生まれました。

●エペソ人への手紙の目的：

この書簡は、初心者向きではなく、ある程度成長した信徒をより高い知識に導き、より忠実な信仰生活へ進ませようとする動機が見られます。また、この世における教会の姿を詳しく教えています。教会についての教えは、コロサイ人への手紙にもあり、両者には類似点がありますが、エペソ書簡は「キリストのからだなる教会」を、コロサイ書簡は「そのからだの頭なるキリスト」を強調しています。

●教えられること：

1)教会は、キリストにある神様の永遠の目的を示すものです。
2)信徒は、キリストのからだなる教会に神様のご性質を満たすため、互いに成長し、一致を保つべきです。
3)信仰における敵の存在を教えます。神様は、信徒を助け、守ることを約束されました。そのために特別の武具を与えられました。

エペソ人への手紙　全 6 章（155 節）

エペソ人への手紙は、信仰の生活をしているキリスト者をより高い知識と、より忠実な生活へ進ませようと教える書簡です。

●エペソ人への手紙の内容：

1．挨拶（1:1-2）
2．霊的な祝福（1:3-23）：
　1)父なる神によって(1:3-6)　2)キリストにあって(1:7-12)
　3)聖霊を通して(1:13-14)　4)パウロの祈り(1:15-23)
3．教会とその目的（2－3 章）：
　1)教会の創造(2:1-10)　2)教会の一致(2:11-22)
　3)教会の目的(3:1-13)　4)教会の豊かな恵み(3:14-21)
4．倫理的な教え（4 章－6:20）：
　1)教会の統一性(4:1-6)　2)賜物の性質と目的(4:7-16)
　3)きよい生活(4:17-5:17)　4)信徒の生活基準(5:18-6:9)
　5)神の武具(6:10-20)
5．結語（6:21-24）

●エペソ人への手紙の構造：

1:1-2	1:3-23	2－3 章	4:1-6:20	6:21-24
挨拶	霊的な祝福	教会とその目的	倫理的な教え	結語

50. ピリピ人への手紙(The Epistle To The Philippians)

●ピリピ人への手紙の書名と著者：

この書簡は、パウロがローマの獄中で書いた手紙（エペソ書簡、コロサイ書簡、ピレモン書簡）の一つです。使徒パウロがピリピ教会へ送ったという言葉（1：1）から「ピリピ人への手紙」と名づけられました。記録年代は 62 年頃だと思われます。

ピリピの教会は、パウロとシラスによってヨーロッパで最初に建てられた教会です（パウロの第 2 次伝道旅行の時）。ですから、パウロにとって印象深く、お互いに親密な関係であった教会でした。ピリピの町は、マケドニヤ州の大きな町で、繁栄したローマの植民地でした。その町にはユダヤ人が少なかったので、比較的に伝道活動がしやすかった町でした。

●ピリピ人への手紙の目的：

この書簡を送ったのは、二つの理由があったからです。一つは、ピリピの教会が獄中にいるパウロに贈り物をしたそのお礼を記すため（4:10、14)と、もう一つは、教会の内部にあったいくつかの問題について解決策を与えるためでした。それは教会内の不一致とユダヤ主義の危険、誤った完全主義者の危険などに対する教えです。そして、自分の身辺の事情を知らせることと、すべての環境において、喜ぶことを教えています。

●教えられること：

1)喜びという言葉を 16 回使い、パウロ自身の霊的生活の忠実さを物語っています。そして、すべての環境において、喜ぶことを教えています。

2)エペソ書簡は、「キリストと教会の神秘的な関係」を、ピリピ書簡は、「神秘的な関係の破壊の原因と維持の秘訣」を教えます。

ピリピ人への手紙　　全 4 章（104 節）

ピリピ人への手紙は、すべての環境において喜ぶことと、キリストとの神秘的な関係をもつ教会を維持する秘訣が書かれています。

●ピリピ人への手紙の内容：

1．パウロの個人的な状況の報告（1:12-26）
　1)挨拶と感謝(1:1-11)　2)広がる福音(1:12-14)
　3)様々な福音伝道者(1:15-18)　3)パウロの願い（1:19-26)

2．ピリピの教会に対する勧め（1:27ー2:18）
　1)福音的な生活(1:27-30)　2)一つの心（2:1-4）
　3)謙遜な姿勢（2:5-11)　4)終始一貫(2:12-18)

3．ローマからの便り（2:19-30）
　1)テモテを送る（2:19-24）　2）エパフロデト(2:25-30)

4．パウロの警告（3 章）
　1)ユダヤ主義者に対する警告(3:1-16)
　2)道徳廃棄論者に対する警告(3:17-21)

5．結語とあいさつ（4 章）
　1)和解のために(4:1-3)　2)学んだことの実行(4:4-9)
　3)贈り物への感謝(4:10-20)　4)挨拶(4:21-22)
　5)祝祷(4:23)

●ピリピ人への手紙の構造：

1:1-11	1 章	2 章	3 章	4 章
挨拶と感謝	個人的状況	教会への勧め	パウロの警告	結語と挨拶

51. コロサイ人への手紙（The Epistle To The Colossians）

●コロサイ人への手紙の書名と著者：

この書簡は、使徒パウロがコロサイの教会宛に送ったという言葉（1:2）から「コロサイ人への手紙」と名づけられました。ピリピ人への手紙より前のものです（61－62 年頃）。

コロサイの教会は、エパフラスが創設した教会で、多分ピレモンの家だと思われます。コロサイ町は、小アジアのフリュギア地方（現在のトルコの一部）の内陸都市で、エペソから東洋へ行く商路にあったので、東西の思想の影響を同時に受けました。ここには多くのユダヤ人が住み、異邦人と共に教会を構成していたと思われます。

●コロサイ人への手紙の目的：

この書簡は、コロサイの教会の信徒たちが霊的な知恵と理解力によって、神様のみこころに関する真の知識に満たされるようにと、祈りをもって送った手紙です。それは、コロサイの教会に異端思想が侵入したからです。この書簡の内容は異端思想に対する反論です。

・「コロサイ的異端思想」は、①イエス・キリストの人格を引き下げてキリストを過小評価、また、イエス様の歴史性を軽視、②禁欲主義的性格、③天使崇拝という特徴を持つ混合した異端思想です。

●教えられること：

1)キリストの人格と性質に関する当時の異端の姿と、それに対する教会の対応が詳しく示されています。

2)教会のかしらとしてキリストの神性と人間性を示します。エペソ書簡が「キリストのからだとしての教会」であれば、この書簡は「教会のかしらなるキリスト」を示しています。

コロサイ人への手紙　全 4 章（95 節）

コロサイ人への手紙は、霊的な知恵と理解力によって、主イエス・キリストに関する真の知識に満たされるよう、祈っている書簡です。

●コロサイ人への手紙の内容：

1．序論：挨拶と感謝の祈り（1:1ー8）

2．キリストの人格と業績（1:9ー29）
　1)とりなしの祈り(1:9-14)　2)キリストの人格(1:15-20)
　3)キリストの業績(1:21-29)

3．異端思想に対する警告（2:1ー23）
　1)パウロの関心(2:1-5)　2)異端に対する警告(2:6-15)
　3)異端の性格(2:16-23)

4．信徒の生活基準（3:1ー4:6）
　1)生活の基礎(3:1-4)　2)生活の原理(3:5-17)
　3)生活の適用(3:18-4:6)：信徒の生活基準など

5．結語（4:7ー18）
　1)代弁者の紹介(4:7-9)　2)挨拶(4:10-17)
　3)結語(4:18)

●コロサイ人への手紙の構造：

1:1-8	1 章	2 章	3:1-4:6	4:7-18
序論	キリストの人格と業績	異端思想その警告	信徒の生活基準	自己紹介と挨拶

52．第 1 テサロニケ人への手紙（The 1st Epistle to the Thessalonians）

●第 1 テサロニケ人への手紙の書名と著者：

書簡は、直接訪問しなくてもそれぞれの状況に応じて教え、必要な励まし、慰め、勧告を与えることができるものです。この書簡は、使徒パウロがテサロニケの教会へ行って、教訓を与えようとしましたが、できなかったので送った手紙です。著者はパウロで、コリントで 18 カ月間滞在した時に書きました。

テサロニケは、自治都市として認められるほどの大きな都市で、商業や貿易で盛えていました。多くの民族や宗教が入り乱れて共存する都市で、古代の神秘主義や皇帝崇拝、自らの神々や哲学を伝える人で溢れた都市でした。50 年頃パウロがシラスとテモテを連れて伝道活動をしたことで、テサロニケの教会が始まりました。

●第 1 テサロニケ人への手紙の目的：

ユダヤ教徒の妨害でテサロニケから離れたパウロは、代わりにテモテをテサロニケの教会へ送り、彼を通して教会の事情を知ることができました。テモテの報告によると、教会には二つの問題がありました。①信者たちが激しい迫害を受けていること、②主の再臨の前に死んだら、主を見ることができなくなるのではないかと心配する人が多かったということです。また、パウロの伝道活動や人格を非難する人も現れたので、それらのために書かれた書簡です。

●教えられること：

1)キリストの再臨を多く扱っていて、再臨の教理の間違った見解を矯正し、確立しています。

2)パウロの働きの純粋さを確認させています。

3)初代教会にとって、終末論は基本教理の一つで、再臨の教理は、きよい生活を励まし、忍耐と慰めを与えるものです。

第 1 テサロニケ人への手紙　全 5 章（89 節）

第 1 テサロニケ人への手紙は、キリストの再臨について多く述べられ、それによって励ましと忍耐と希望とを与えようとしています。

●第 1 テサロニケ人への手紙の内容：

1．挨拶と感謝（1 章）
2．テサロニケでのパウロの伝道活動の性格（2:1ー12）
3．進歩に対する称賛（2:13ー20）
4．忍耐に対する感謝と祈り（3 章）
5．信仰の生活に対する教え（4ー5 章）
　1)道徳的な教え(4:1-12)　2)死ぬことと主の再臨(4:13-18)
　3)主の日の必要性(5:1-11) 4)教会での義務と生活(5:12-24)
　5)結語(5:25-28)

◎参考：「信仰生活に対する教え」(4:1ー5:28)の理解

1)信者が汚れた生活からきよくなるための教えです(4:3、7)。

2)キリストの再臨を望むことが(5:12-24)、全ての慰め(4:13-18)や警戒心(5:1-11)、信者の喜びの源となります。

3)列挙されている義務は、宗教的な性格だけではなく、道徳的な性格もあります。それらを全うすることで、キリストが来られた時、全く聖なる者となります(5:23)。

●第 1 テサロニケ人への手紙の構造：

1 章	2 章	3 章	4ー5 章 (4:13-5:11)
挨拶と感謝	伝道活動の性格	称賛と感謝と祈り	信者の生活(終末の教え)

53. 第 2 テサロニケ人への手紙（The 2nd Epistle to the Thessalonians）

●第 2 テサロニケ人への手紙の書名と著者：

著者の名前は 1:1、3:17 に記されています。使徒パウロはコリントで第 1 テサロニケ人への手紙を書いた後、52 年秋頃この書簡を書いたと思われます。

テサロニケは、マケドニヤ地方の首都、政治交通の中心地です。使徒パウロは、第 2 次伝道旅行の際、ピリピから追われてから、アムピポリス、アポロニヤを通ってここに来ました（使徒の働き 17：1）。3 週間程シラスやテモテと共に滞在しながら伝道活動をしました。多くの異邦人が信じるようになりました。しかし、ユダヤ人の相当な妨害のため、そこからコリントへ移り、この手紙を書いたのです。

●第 2 テサロニケ人への手紙の目的：

この書簡は、使徒パウロが主の日（主の再臨の日）に関する誤った考えを直すために書いたものです。ある人がパウロの教会へ送った手紙を偽造し（2:2)、その手紙に主の日が来たと書き、信者たちを混沌状態に落としました。それで、パウロは、主の日は未だであること(2:3-7）と、主の日の前兆に関する説明をします。また、再臨を望む者がどのような生活をすべきかを教えています(3:10、11)。

●教えられること：

1)主の再臨と関係のある四つの言葉を中心に、教えています。

①迫害と再臨(1:1-7)：主の再臨は信徒の励まし

②悔い改めなかった人と再臨(1:7-12)：再臨は審きのため

③不法を行う人と再臨(2:1-12)：再臨は不法者の破滅の日

④奉仕と再臨(2:13-17)：再臨の遅延は信徒の奉仕の機会

2)主の再臨の信仰を持ちながらも、「落ち着いた生活」(第 1 の 4:11)と「静かに仕事」(第 2 の 3:12)をするように、と教えています。

第 2 テサロニケ人への手紙は、キリストの再臨のことと、その再臨を待ち望む者にふさわしい生活を教えています。

●第 2 テサロニケ人への手紙の内容と構造：

1．感謝と激励（1 章）

1)挨拶と感謝(1:1－4)　2)教会に対する激励(1:5－12)

2．終末論的教訓（2 章）

1)主の再臨の前兆(2:1－12) 2)実際的な勧め(2:13－17)

3．信者の生活に対する勧め（3 章）

1)祈りの要望(3:1－5)　2)クリスチャンの生活(3:6－15)

3)結語(3:16－18)

◎テサロニケの終末論の特徴（死について）の理解：

1)死は、眠っている状態です（第 1 の４：13、５：10)。

2)死は終点ではなく、復活を前提とする意味で用いられています（第 1 の４：13、参考；コリント第一の手紙 15:16)。このことは死後から復活までの中間状態を示すことではありません。聖書は、中間状態については何も教えていません。

●第 2 テサロニケ人への手紙の構造：

1 章	2 章	3 章
感謝と激励	終末論的教訓	信者の生活に関する教え

54．第 1 テモテへの手紙（First Epistle to Timothy）

●第 1 テモテへの手紙の書名と著者：

この書簡は、使徒パウロが若い後継者テモテに送ったことから「テモテへの手紙」と名づけられました。記録年代は、パウロがローマの牢から解放され、2 年余りスペインまで行って伝道したとすれば、この書簡は、マケドニヤで 65 年頃書かれたと思われます。しかし、スペインや他の地域で伝道をしなかったら、62 年頃だと思われます。

テモテは、ギリシャ人を父とし、ユダヤ人を母としたルステラ出身の評判のよい人でした。祖母と母親の信仰の影響を受けて、幼い頃から聖書を教えられて育ちました。彼は、パウロの第1 次伝道旅行のとき救われました。第2 次伝道旅行の時からテモテは、パウロの協力者としてピリピ、テサロニケ、ベレヤの教会を建て、テサロニケ教会で牧会しました。後にはエペソの教会でも牧会するなど、パウロの良き同労者でした。

●第 1 テモテへの手紙の目的：

この書簡は、エペソ教会で牧会しているテモテを激励することと、彼の活動を助けるために書かれたものです。経験豊かなパウロは若い後継者テモテに、教会の諸問題やその解決のために何をすべきかを教えています。つまり、この書簡には牧会の原理とも言えるものが多く書かれてあります。

●教えられること：

1)牧会の原理として、公礼拝の祈祷の性格と目的、長老や執事の資格、霊的成長の必要性、老寡婦に対する財政的な援助、長老の按手、財政に対する態度などが記されています。

2)禁欲主義に対して、「神様によって造られたものはみな良い。捨てるべきものは何一つない。」との創造論の立場に立って明確にそれを退ける道を教えています。

第 1 テモテへの手紙　全 6 章（113 節）

第 1 テモテへの手紙は、悪戦苦闘する若き牧会者を励まし、教会内の制度化を整備するために書かれた書簡です。

●第 1 テモテへの手紙の内容：

1．挨拶（1:1ー2）

2．偽教師に対する警告（1:3ー20）

1)偽教師に警告(1:3-11)　2)パウロ自身の例(1:12-17)

3)正しい良心で勝ち抜くように(1:18-20)

3．礼拝の規定（2 章）

1)祈りの規定(2:1-8)　2)女性の位置(2:9-15)

4．教会の職（3 章）

1)長老の資格(3:1-7)　2)執事の資格(3:8-13)

3)教会の目的(3:14-16)

5．偽教理に対する警告とお勧め（4 章）

1)偽りの教理に対する警告(4:1-5)

2)敬虔な生活と忠実な奉仕の勧め(4:6-16)

6．教会の内部の諸問題（5ー6 章）

1)やもめの問題(5:1-16)　2)長老の問題(5:17-25)

3)奴隷の問題(6:1-2)　4)欲望に対する警告(6:3-10)

5)神の人の実践問題(11-16)　6)金持ちの問題(17-19)

7)無駄話、偽りの知識の問題(6:20-21)

●第 1 テモテへの手紙の構造：

1 章	2 章	3 章	4 章	5-6 章
挨拶と偽教師	礼拝の規定	教会職	偽教理に警告	教会内の諸問題

55．第 2 テモテへの手紙（Second Epistle to Timothy）

●第 2 テモテへの手紙の書名と著者：

使徒パウロは、最初のローマの獄中生活で、四つの書簡を書き送りました（62 年）。その後も 3 年間の伝道活動があったと思われます。そして、再びトロアスで逮捕され(4:13、推測)、ローマの法廷で第 1 次裁判を受けました（4:14-16)。判決は下らなかったのですが、殉教させられることを実感したようです（参考、4:17、6-8）。それでパウロは、死ぬ前にテモテと会いたいという思いからこの書簡を書いたと思われます。

記録年代は、パウロが殉教したと思われる 68 年の少し前で、この書簡はパウロの最後の手紙となりました。神様が今まで造った一番偉大な人物の遺言として評価される書簡です。

●第 2 テモテへの手紙の目的：

この書簡は、テモテにパウロ自身の経験や期待することを示して励まし、また教えようとすることに目的があります。それでパウロは、①福音を伝えることに勇敢であるように(1:3-18)②伝道活動における教訓(2:14-26)と苦しみの教え(3:1-9)と、③パウロ自身を模範として従うように（3:10-13)、④教えられたことに堅く立つように（3:14-17)、⑤福音を宣べ伝えることに忠実であるように(4:1-8)、と命じています。

●教えられること：

1)理想的なキリスト者の像を比喩として上げていることです。例えば、キリスト者の像を教師、兵士、競技する者、農夫、苦しみを受ける者、器、しもべなどで喩えています。

2)聖書の起源と目的が記されていることです（3:15-17)。

3)「キリスト・イエスにある」という表現をもって、信仰の確信を与えています。たとえば、キリスト・イエスにある命の約束、神の計画と恵み、信仰と愛、強くなる恵み、救い、迫害、信仰による救いなどがそうです。

第 2 テモテへの手紙　全 4 章（83 節）

第 2 テモテへの手紙は、パウロが殉教する直前に書かれたもので、神様が造った偉大な人物の遺言として評価される書簡です。

●第 2 テモテへの手紙の内容：

1．挨拶と感謝（1:1ー5）
2．忠誠と忍耐に対する教え（1:6ー2:13）
　1)勇気の必要性(1:6-12)
　2)真理につながっているように(1:13-18)
　3)強くなるように(2:1-13)
3．偽教師と利己主義に対する警告（2:14ー3 章）
　1)偽教師に対する警告(2:14-26)
　2)利己主義に対する警告(3 章)
4．最後の教訓（4:1ー8）
　1)福音を宣べ伝えなさい(4:1-4)
　2)自分の努めを全うしなさい(4:4－8)
5．結語（4:9ー22）
　1)個人的なメッセージ(4:9-18)　2)挨拶(4:19-21)
　3)祝祷(4:22)

●第 2 テモテへの手紙の構造：

1:1-5	1:6-2:13	2:14-3:17	4:1-8	4:9-22
挨拶と感謝	忠誠と忍耐に対す勧め	偽教師、利己主義に対して	最後の教訓	結語と祝祷

●テトスへの手紙の書名と著者：

テモテへの手紙とともにテトスへの手紙は、「牧会書簡」と呼ばれます。それは、使徒パウロが手紙をある一定の教会宛ではなく、個人の牧師宛に送ったことと、教会生活とその実際的問題が扱われていることから、牧会書簡と呼ばれました。この書簡を書いたのはパウロです。記録した場所を知ることは難しいですが、65 年頃マケドニヤで書かれたと思われます。

テトスは純粋なギリシャ人で、アンテオケでパウロの伝道によって救われました（参考 1:4)。彼は霊的に成熟した人で、パウロは彼をエルサレム会議へ連れていき、異邦人には割礼が要らないと、例としてあげたこともあります（ガラテヤ 2:1)。また、彼はコリント教会で、エルサレムの教会のために救済献金を集める責任者でもありました（コリント人への手紙第二 8:16-23)。その後、彼はクレテという島で伝道活動をし（1:5)、後にダルマテヤ（現在のユーゴスラビヤ）で牧会しました。

●テトスへの手紙の目的：

ローマの獄中から釈放されたパウロは、テトスをクレテ島に残し、他の教会を訪問し続けます。それで、クレテ島に残されて牧会をしているテトスに、①教会の組織化を促進させるため②教会の諸問題を解決し、励ますため、③ゼナスとアポロが島を訪問の際、協力するように連絡しておくために書きました。

●教えられること：

教会の成長の制度的発展は、健全な教理によります。そのためにキリスト教の重要な教理を多く扱っています。選び(1:1)、永遠のいのち(1:2、3:7)、キリストの神性(1:3、4、2:13)、霊感(2:11)、救いの普遍的な性質(2:14)、全的堕落（3:3)、神の慈愛と博愛(3:4、5)、聖霊の人格と働き(3:5)など。

テトスへの手紙は、教会の制度的発展の要因であるキリスト教の健全な教理を多く扱っている書簡です。

●テトスへの手紙の内容：

1．教会に対する教え（1 章）
2．信者に対する教え（2:1ー3:11）
　1)老人の生活規範(2:1-3)　2)若い婦人の生活規範(2:4-6)
　3)テトスの生活規範(2:7-8)　4)しもべの生活規範(2:9-10)
　5)神の恵みの性格(2:11-15)　6)社会と偽教師(3:1-11)
3．結語（3:12ー15）

※パウロ書簡のまとめ（D.A.Hayes)：私たちはテサロニケ書簡から、説教者で、黙示論的な先見者であるパウロについて学び、そこで伝道の方式や預言の意味も理解するようになりました。コリント書簡では、牧会者、使徒教会の開拓者、そして、教会と信者の信仰に対して守護者のようなパウロを見ました。ガラテヤ書簡とローマ書簡では、神学教授で、罪からの救い、その救いの教理を体系化したパウロを見ました。また、獄中書簡では、信者とキリストを宇宙的な教会としてまとめた霊的な思想家としてのパウロを見ました。そして、牧会書簡では、多くの戦争の場で勝利をおさめ、天の栄光を希望する、勇敢で自信溢れる老将を見ました。

●テトスへの手紙の構造：

1 章	2：1 ー3:11	3:12-15
教会に対する教え	信徒に対する教え	結語

57．ピレモンへの手紙（The Epistle to Philemon）

●ピレモンへの手紙の書名と著者：

この書簡は、書簡の中で一番短い手紙です。使徒パウロがピレモンに手紙を送ったことから、「ピレモンへの手紙」と名づけられましたが、簡単で、個人的な内容の書簡です。記録年代は、62 年頃、ローマの獄中で書かれたと思われます。

ピレモンについて知ることはできません。ただ、彼は愛情ある指導者的な地位の人だと思われます。オネシモについても、彼がどんな罪を犯して逃亡したか、知ることはできません。しかし、オネシモは、獄中でパウロと出会い、パウロを通してクリスチャンになりました。

●ピレモンへの手紙の目的：

この書簡は、ピレモンと彼から逃亡した彼の奴隷オネシモとを和解させ、オネシモを受け入れるようにピレモンに説得することと、パウロが間もなく獄から釈放され、ピレモンを訪問するという知らせです。

●教えられること：

1)奴隷制度などの社会倫理に対して信徒が取るべき信仰的な態度を、実例をもって教えます。私たちは、社会的な立場に関係なく、みな主にある兄弟として受け入れられるべきです。

2)赦しやとりなしに対する理解を深めることができます。ローマ時代には、奴隷に一つの権利が認められていました。それは、主人の友人に訴えることで、弁護のためにその人のもとへ逃げることができるということです。奴隷の持ち主は、対等の関係である友人の故に、そのとりなしを聞くこともあります。これらのことを念頭においてこの書簡を読むと、罪人である私たちと神、そして、とりなしのキリストとの関係が一層分かると思います。

ピレモンへの手紙　全1章(25節)

ピレモンへの手紙は、主人と奴隷の関係を通して、福音による救いの方法との類似点を見せ、赦しの教えを分かりやすくします。

●ピレモンへの手紙の内容と構造：

1．挨拶（1ー3 節）
2．ピレモンに対する感謝（4ー7 節）
3．オネシモのためのパウロの嘆願（8ー20 節）
　1)嘆願の基礎(8-9)　2)嘆願の対象(10-14)
　3)オネシモを帰す目的(15-16)　4)嘆願の性格(17-20)
4．結語（21ー25 節）
　1)従順に対する確信(21)　2)宿に対する願い(22)
　3)最後の挨拶(23-24)　4)祝祷(25)

※この書簡の福音的な要素の理解（M.C.Tenny）：
この書簡は、赦しに関する全ての要素が説明されています。
1)罪を犯す(11、18 節)　2)哀れむ(10 節)
3)執り成し(10、18、19 節)　4)罪の転嫁(18、19 節)
5)回復に対する希望(15 節)　6)新しい関係を期待する(20、21 節)

●ピレモンへの手紙の構造：

1-3 節	4-7 節	8-20 節	21-25 節
挨拶	ピレモンに感謝	オネシモの為嘆願	結語

58．ヘブル人への手紙(The Epistle to the Hebrews)

●ヘブル人への手紙の書名と著者：

この書簡には、通常の手紙のような冒頭の部分に、著者や宛て先、挨拶の部分がないため、著者について正確に知ることはできません。また、なぜこの書簡が「ヘブル人への手紙」という書名で呼ばれたか、どのように名づけられたかも全く分かりません。ただ書中から、著者は、ユダヤ教の祭司制度や風習をよく知り、また、ギリシャ文学に巧みなユダヤ系の人であろうと思われる程度です。記録年代は、エルサレムが滅亡する 70 年直前ではないかと思われます。

●ヘブル人への手紙の目的：

この書簡は、ユダヤ人信徒の中で、再びユダヤ教へ戻ろうとする人に対して書かれました。そのため、「一つの論文で始まり、説教のように進み、一つの手紙で終わる」構造を持って、キリストの人格と働きがモーセや天使、アロンよりも優れていることを説明し、彼らの信仰を堅くさせようとします。また、背教に対する警告やユダヤ教との完全分離も教えます。

●教えられること：

1)積極的な主張と消極的な主張が見られます。

①積極的主張：イエス・キリストは、神の最終的、かつ完全な現れとして絶対的な優位性を持つ大祭司長だと教えます。

②消極的主張：「恐れる心を持とうではありませんか。」、「成熟を目ざして進もうではありませんか。」のような「…ではありませんか。」という表現で多くのことを勧めます。

2)啓示の意味と性格、啓示が伝わった経路を教えています。

3)信仰の章として、旧約聖書の中で信仰を持って生き抜いた信徒たちの信仰を例に挙げています（11 章）。

ヘブル人への手紙　全 13 章（303 節）

ヘブル人への手紙は、信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないようにと教えている、測り知れない大切なものです。

●ヘブル人への手紙の内容：

1．序論と天使よりも優れたキリスト（1ー2 章）

2．モーセとヨシュアよりも優れたキリスト（3ー4 章）

1)モーセより優れる(3:1-6)　2)第 2 次警告(3:7-19)

3)ヨシュアより優れる(4:1-10)　4)第 3 次警告(4:11-16)

3．大祭司長アロンよりも優れたキリスト(5ー7 章)

1)大祭司長の資格(5:1-10)　2)第 4 次警告(5:11-6:20)

3)旧約の大祭司長より優れる(7:1-28)

4．キリストの祭司職の特殊性（8ー10 章）

1)新しい契約(8:1-13)　2)至聖所に行く道(9:1-10)

3)必要な犠牲(9:11-22)　4)いけにえ(9:23-28)

5)祭司職の特殊性(10:1-25)　6)第 5 次警告(10:26-28)

5．信仰の優越性（11ー13 章）

1)信仰の歴史(11:1-40)　2)子としての訓練(12:1-5)

3)第 6 次警告(12:6-17)　5)第 7 次警告(12:25-29)

4)シナイ山とシオンの山の比較(12:18-24)

6)生活の義務(13:1-17)　7)結語(13:18-25)

●ヘブル人への手紙の構造：

1ー7 章	8-10 章	11ー13 章
御使い、モーセ、ヨシュア、アロンよりも優れたキリスト	主の祭司職の特殊性	信仰の優越性

59．ヤコブの手紙(The Epistle of James)

●ヤコブの手紙の書名と著者：

この書簡は、特定の教会や個人宛の手紙ではなく、もっと広いキリスト者読者に向けて書かれたものという意味で、「公同書簡」と呼ばれています。書名は、著者の名前からとった「ヤコブの手紙」と名づけられました。聖書にはヤコブと呼ばれた人が4 人います。その中でこの書簡の著者は、主イエスの弟ヤコブだと思われます。記録年代は、パウロの書簡よりも早かったと思われます（45ー53 年）。

●ヤコブの手紙の目的：

教会が成長するに伴い、信仰生活における実践的側面が疎かにされることを警戒し、生活の中で実がなかったら、その信仰は間違っているということを教えるために書かれました。

●教えられること：

教理的な教えよりも、むしろ実際的なクリスチャン生活について語り、万事の核心はその「実」によって見られると教えます。多分、律法主義的なユダヤ主義から救われたことが、反動的に無律法主義へと転換してしまったユダヤ人信徒が多かった故だと思います。それで、50 以上の命令形が書かれており、新約聖書の中での旧約だと言われています。

1)行いに関するいくつかの実際的な教え。
①誘惑と罪について（1：14-15）
②舌に対する教え（3：1-12）
③生きていることの本質に関する教え（4：13-17）
④祈りについての教え（5：13-18）

2)良い行いは、救いに至る手段ではなく、むしろ救いの産物であることを教えられます。

ヤコブの手紙　全 5 章（108 節）

ヤコブの手紙は、信仰生活において行いが疎かにされることを警戒し、信仰は良い行いによって証明されると教えます。

●ヤコブの手紙の内容：

1．序論（1：1）
2．信仰のテスト（1:2ー27）
　1)試練の目的(1:2-12)　2)試練の出所(1:13-18)
3．信仰の本質（2:1ー3:12）
　1)神の言葉に従う(1:19-27)　2)公平無私(2:1-13)
　3)信仰と行い(2:14-26)　4)舌の制御(3:1-12)
4．信仰の働き（3:13ー4:12）
　1)天に属する知恵で導かれる(3:13-18)
　2)神に従う霊的な生活をする(4:1-10)
　3)隣人を裁かない生活をする(4:11-12)
5．信仰の適用（4:13ー5:20）
　1)商売について(4:13-17)　2)富について(5:1-6)
　3)主の再臨について(5:7-11)　4)誓いについて(5:12)
　5)祈りについて(5:13-18)　6)迷う人について(5:19-20)

●ヤコブの手紙の構造：

1:1	1 章	2 章-3:12	3:13-4:12	4:13-5 章
序論	信仰のテスト	信仰の本質	信仰の働き	信仰の適用

60．第 1 ペテロの手紙(First Epistle of Peter)

●第 1 ペテロの手紙の書名と書名と著者：

この書簡は、イエスの弟子の一人であるペテロによって書かれたことで、「ペテロの手紙」と名づけられました。記録年代は、ローマの皇帝ネロによる迫害（64 年）の前で、63-64 年頃だと思われます。記録した場所は、5:13 に記されている「バビロン」ですが、それは文字通りではなく、ローマを指す象徴的表現で、ペテロが晩年を過ごしたローマで書かれたと思われます。あて先は、1：1 に書いてありますが、それらは今日のトルコの中央部から北部にかけての地域で、この書簡は、それらの地域の教会で回し読みされたと思われます。

●第 1 ペテロの手紙の目的：

この書簡の主な目的は、キリスト者が試練の中にあっても信仰に堅く立つようにと励ますためです。この試練は、ただ単にキリスト者であるという理由で、悪意から迫害を受けたり、憎まれるというようなものでした。それでペテロは、苦難のキリストを模範として示し、試練に耐えるように教えています。

●教えられること：

1)17 回も苦難という言葉を使い、苦難を強調しています。同時に苦難には必ず栄光をも見出されると教えています。

2)迫害の時、信徒としてもつべき姿勢が示されています。

①私たちのために苦しみを受けたイエス様の足跡に従うこと。

②苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださる神様の恵みに確信を持つこと。

③イエス・キリストの現われの時、あなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望むこと。

3)ペテロの自伝的な性格をもつ聖句が多くあります。

第 1 ペテロの手紙　全 5 章（105 節）

第 1 ペテロの手紙は、キリスト者である故に、迫害を受けたり、非難されたりしている信徒を励ますために書かれました。

●第 1 ペテロの手紙の構造：

1．挨拶（1:1ー2）

2．信者の救い（1:3ー2:10）

1)未来の希望(1:3-12)　2)兄弟愛(1:13-25)

3)神の民としての成長(2:1-10)

3．信者の義務（2:11ー4:11）

1)寄留者の義務(2:11-12)　2)地上での義務(2:13-17)

3)しもべの義務(2:18-25)　4)妻と夫の義務(3:1-7)

5)迫害される者の義務(3:8-22)

6)罪に逆らう者の義務(4:1-6)

7)再臨を待つ者の義務(4:7-11)

4．信徒の試練（4:12ー5:11）

1)苦難に対する態度(4:12－19)　2)長老たち(5:1-4)

3)若者たちと信徒たち(5:5-11)

5．結語（5:12ー14）

●第 1 ペテロの手紙の構造：

1:1－2	1:3-2:10	2:11-4:11	4:12-5:11	5:12-14
挨拶	信徒の救い	信徒の義務	信徒の試練	結語

61．第 2 ペテロの手紙(Second Epistle of Peter)

●第 2 ペテロの手紙の書名と著者：

この書簡の著者は、ペテロです。おそらくローマの町で殉教する前に書かれたと思われます（66 年頃)。第 1 書簡はシルワノの代筆で書かれたものですが、この書簡はペテロ自身が直接書いたと思われます。この書簡は、教会から教会へと回し読みされました。

●第 2 ペテロの手紙の目的：

この書簡の目的は、3：1-2 節に書いてある通りです。第 1 書簡は、教会の外からの迫害や試練に対する教えでしたが、この書簡は、教会のうちにある試練、すなわち、背教と偽教師らに対する教えです。そして、異端思想の影響を受けた信者に警告することです。警告は、「思い起こさせる」と「忘れる」という言葉をもって強調されています。

※異端思想は、自分たちを買い取ってくださったイエスを否定する教えで、贖いのわざを拒みます。そして、肉欲と好色を愛するので、この書簡は、信徒が敬虔な生活をするようにと勧めています(3:11)。

●教えられること：

1)偽教師に対する警告が主な内容なので、彼らに対する審判が強調されています（旧約聖書から審判を引用)。

2)真の知識と偽りの知識を比較しています。真の知識は、主であり、救い主であるイエス・キリストを知ることです。

3)聖書の霊感と聖書解釈の原則を示しています(1:20-21)。

4)参考：使徒パウロと使徒ヨハネと使徒ペテロの比較：使徒パウロが「信仰の使徒」であれば、使徒ヨハネは「愛の使徒」で、使徒ペテロは「希望の使徒」です。使徒ペテロは多くのことを教えていますが、その中で一番強調している主題は希望です。

第 2 ペテロの手紙　　全 3 章(61 節)

第 2 ペテロの手紙は、偽教師による異端の影響が次第に広がりつつあったので、その影響を警告し、敬虔な者になることを勧めます。

●第 2 ペテロの手紙の内容：

1．正しい知識（1:1ー21）
　1)正しい知識と信者の生活(3-11)
　2)正しい知識と神の言葉(12-21)

2．偽教師に対する警告（2:1ー22）
　1)偽教師に対する描写(1-3)　2)偽教師への裁き(4-19)
　3)偽教師の危険性(20-22)

3．主の再臨とその約束（3:1ー18）
　1)第一書簡に対して(1-2)　2)主の再臨の性格(3-13)
　3)再臨を待つ信徒の使命(14-18)

・使徒ペテロの初期の記事はありますが、彼の末期のことについては知ることができません。ただヨハネ福音書 21：18 を通して、彼の死は殉教であったと思われるだけです。伝説によれば、ペテロがネロ皇帝の迫害から逃げる途中、ローマの西南にあるアピアン途上で主と出会い、主が「私は再び十字架を背負うためにローマへ行く」と語られたので、彼は恥ずかしくなり、再びローマへ戻って、そして捕まり、十字架に逆さにつけられ死んだと語られています。

●第 2 ペテロの手紙の構造：

1:1-2	1 章	2 章	3 章
挨拶	正しい知識について	偽教師に対する警告	主の再臨と約束

62．第 1 ヨハネの手紙(First Epistle of John)

●第 1 ヨハネの手紙の書名と著者：

この書簡は、著者であり、ヨハネの福音書を書いた使徒ヨハネの名前から「ヨハネの手紙」と名づけられました。記録年代は、ヨハネの福音書が書かれた後で、ドミティアヌス帝の迫害以前である、90-95 年頃だと思われます。場所は、彼の晩年を過ごしたエペソ監獄だと思われます。書簡の宛先は、エペソを中心とする小アジアにある教会で、回覧書簡として読まれたと推測されます。

●第 1 ヨハネの手紙の目的：

この書簡の目的として四つのことがあげられます。

①喜びが全きものとなるため（1:4）

②異端思想に入らないように（2:1）。イエス様がキリストであることと、肉体をもって来られたイエスを否定した思想。

③道徳的な生活の矯正のために(3:4-10)。

④永遠のいのちに対する確信のため(5:13)です。

異端は、使徒の教えや信仰を守っている信徒を軽蔑し、自分たちだけが真の知識を所有していると主張しました。それでヨハネは、信徒こそ真の知識をもっているという意味で、「私たちが‥‥知っている」という表現を 13 回、これらと関係ある言葉まで合わせれば、40 回以上も信徒こそ真の知識を持っている「知っている人々」であると強調しています。

●教えられること：

1)神様のご性質である光と愛が強調され、信徒もそうあるべきだと教えます。信徒は、光の中を歩み、愛のうちを歩みます。

2)キリストのうちにとどまっているなら、信徒は罪の中に生きることはないと教えます。

3)イエス様は、信徒の罪のために弁護し、なだめの供え物です。

第 1 ヨハネの手紙　全 5 章（105 節）

第 1 ヨハネの手紙は、キリスト者にあるべき信仰のふさわしい特性、即ち喜び、きよい生活、愛の生活を牧会的配慮から教えます。

●第 1 ヨハネの手紙の内容：

1．序論（1:1ー4）

2．神との交わりの条件（1:5ー2:14）

1)光の中を歩む(1:5-7)　2)罪の告白(1:8-2:2)

3)神の命令を守る(2:3-6)　4)互いに愛し合う(2:7-14)

3．交わりに対する勧め（2:15ー27）

4．交わりの実践（2:28ー5:3）

1)きよい生活(2:28-3:12)　2)真実な愛の実行(3:13-24)

3)霊を分別する(4:1-6)　4)主の愛で愛し合う(4:7-5:3)

5．交わりの結果（5:4ー21）

1)世に対する勝利(5:4、5)　2)救いの確信(5:6-13)

3)祈りの姿勢(5:14-17)　4)聖化の根拠と実践(5:18-21)

※主題の研究：「愛」の理解

1)罪人に対する神の愛(4:9、10)　2)養子となる(3:1)

3)愛すべき根拠(3:11-23)　4)愛する証拠(3:14)

5)愛による区別(3:10)　6)愛の結果(2:15、4:18)

7)神は愛なり(4:16)

●第 1 ヨハネの手紙の構造：

1:1-4	1:5-2:14	2:15-27	2:28-5:3	5:4－21
序論	交わりの条件	交わりの勧め	交わりの実践	交わりの結果

63．第 2 ヨハネの手紙(Second Epistle of John)

●第 2 ヨハネの手紙の書名と著者：

この書簡の著者は、使徒ヨハネです。記録年代は、7 節にある偽教師の教えが、第一書簡に出る異端と同じ特徴なので、第 1 書簡を書いた直後の 90-95 年頃で、彼が晩年を過ごしたエペソの監獄で書かれたと思われます。

この書簡のあて先は、選ばれた婦人です。その婦人については、一個人とする説と、擬人化した教会とする説の二通りの理解があります。個人であれ、教会であれ、その対象を明確に知ることはできません。アジアのどこかの教会であると推定する程度です。

●第 2 ヨハネの手紙の目的：

この書簡は、偽教師のことを警告するために（7-11 節）書かれました。また、使徒ヨハネは、感化力のある当時の代表的な信徒であった婦人とその子供たちの、愛と真理に対する忠実さを誉めたいということと、彼らを訪ねようとする自分の願いを伝えるために書きました。

偽教師たちは、信徒が旅人を歓迎する習慣を悪用して信徒のところを巡回し、誘惑しました。そのことを心配した使徒ヨハネは、彼らのことを警告し、彼らのために「宿や食物を与えないように」と教えます。しかし、そのことによって真実の兄弟への愛が冷えてはならないことも教えています。偽教師の教えは、第 1 書簡と同様の異端思想から出たものです。すなわち、イエスが人間として来られたことを否定する異端思想です。肉体は悪で、霊的なものだけが善であるという思想で、イエスは幻にすぎないと主張する思想です。

●教えられること：

・真の教理のうちを歩むことの大切さが教えられます。

第 2 ヨハネの手紙　全 1 章（13 節）

第 2 ヨハネの手紙は、神学的な教えより、寧ろ、1 世紀終わり頃のアジアにおける教会の姿を伝え、それを教訓として教えています。

●第 2 ヨハネの手紙の内容：

1．挨拶（1ー3 節）
2．メッセージ（4ー11 節）
　1)奨励／愛のうちを歩むこと(4-6)
　2)警告／異端の正体とその批判(7-11 節)
3．結語（12ー13 節）：訪問の計画と挨拶

※主題の研究：「真理」の理解

この書簡は、教えの本質としての真理(4 節)と、イエスご自身である真理（2 節)という意味をもって、次のようなメッセージを提供しています。

1)真理の中での愛(1 節)　2)宿る真理によって(2 節)
3)真理の中での歩み(3 節)　4)真理の中での行い(4-6 節)
5)真理のための同労者(7-8 節) 6)真理で貫く(9-12 節)

●第 2 ヨハネの手紙の構造：

1-3 節	4-11 節	12-13 節
挨拶	メッセージ：兄弟愛と異端への警告	結語

64．第 3 ヨハネの手紙(Third Epistle of John)

●第 3 ヨハネの手紙の書名と著者：

この書簡は使徒ヨハネによって書かれました。著者の名は書いてありませんが、第 1、第 2 書簡と類似点が多くあり、使徒ヨハネだけの表現が多いことから使徒ヨハネだと考えます。記録年代も第 1、第 2 書簡と同じく、90-95 年頃で（但し、第 2 書簡が書かれた後)、彼が晩年を過ごしたエペソで書いたと思われます。

この書簡の宛先は、ヨハネの友人ガイオで、他の新約聖書に出て来る人か（使徒の働き 19:29､20:4､ローマ人への手紙 16:23 参考)、使徒ヨハネによって洗礼を受けた人で、アジア地域の教会の指導者、あるいは教会員であると思われます。

●第 3 ヨハネの手紙の目的：

この書簡には、第 1 と第 2 書簡とは違って異端思想に対する批判や警告がありません。ただ、ガイオに対する使徒ヨハネの愛と祈りを示し、教会の中で問題を起こしているデオテレペスの行為を見習わないように勧めています。彼は、使徒をののしり、欲望のままに振る舞う人で、彼に従わないように注意し、デメテリオのような人を見習うようにと勧めます。「悪を見習わないで、善を見習いなさい。善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことのない者です。」（11 節）

●教えられること：

1)教理についての言及はありませんが、高慢で、独裁的で、支配的な態度をもって使徒の権威まで否定しようとする、教会の指導者が登場した教会事情をもって教訓を与えています。すなわち、教会の中で問題を起こしている人をどう扱うべきかを記しています。

2)キリストの真の教師をどう受け入れるべきか教えられます。

第 3 ヨハネの手紙　　全 1 章(15 節)

第 3 ヨハネの手紙は、第 2 書簡が代表的な婦人信徒に宛てられたことに対し、男子の典型的な代表的信徒を紹介し、教訓を与えます。

●第 3 ヨハネの手紙の内容：

1．挨拶（1 節）
2．ガイオに対する祈りと称賛（2ー8 節）：信仰と寛容
3．批判と推薦（9ー12 節）
　1)デオテレペスに対する批判（9-11 節）
　2)デメテリオに対する推薦(12 節)
4．結語（13ー15 節）：訪問の計画と挨拶

※使徒ヨハネのメッセージ、「愛」に対する理解：

使徒ヨハネは、イエスが語った愛の教えを具体化して教えました。ヨハネの書簡は、パウロの書簡のような論理的な発展はありませんが、同じ主題が繰り返される方法で書き記しています。その中心的なテーマの一つが愛です。愛は、

1)愛すべき理由(第一の 4:7-8)　2)愛の生活(第一の 2:10､3:14)
3)真の愛(第一の 2:15)　4)兄弟間の愛(第一の 3:17-18)
5)神を愛する（第一の 5:2-3）という項目で区別できます。

●第 3 ヨハネの手紙の構造：

1 節	2-8 節	9-12 節	13 - 14 節
挨拶	祈祷と称賛	批判と推薦	結語

65．ユダの手紙(The Epistle of Jude)

●ユダの手紙の書名と著者：

この書簡の著者は、イエス・キリストのしもべであり、ヤコブの兄弟であるユダです。ユダは 70ー80 年頃殉教したと言われますので、この書簡は 70 年以前に書かれたと思われます。記録場所は不明ですが、ユダはヤコブと共にエルサレム教会の指導者的な人物であったことから、エルサレムで書かれと思われます。

宛先は、ある特定の人や地域ではなく、広い地域の、異邦人も含めた信徒に宛てて書いたものです。

●ユダの手紙の目的：

この書簡を書いた動機と目的は、3-4 節にあります。それは「‥ひそかに忍び込んで来た人々」のためでした。彼らの教理と行いを例と例証によって暴露し、彼らと信仰のために戦うように勧めるためです。彼らは、イエス様を否定し、その贖いを無視する人で、道徳的にも不敬虔な者でした。ユダは、彼らはカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのようにそむいて滅ぼされる異端者であること、また、彼らの最後は暗闇の下に閉じ込められると教えます。

●教えられること：

1)背教の歴史を見せています。御使いたち、カイン、バラム、コラなどの旧約聖書に出る背教の歴史を教えています。
2)背教のただ中にあって、信徒は信仰のために戦うべきだと教えます。
3)三つの永遠的な性質を持つものについて語っています。それは、命(21 節)、束縛(6 節)、火(7 節)のことです。
4)モーセの死体に対する弁論とエノクの預言があります。

ユダの手紙　　全 1 章（25 節）

ユダの手紙は、短い書でありますが、案外迫力に富んでいるもので、信仰のために戦うことと強く生きることを迫る生々しい勧告です。

●ユダの手紙の内容：

1．記録した目的（1ー4 節）
2．偽教師に関する説明（5ー16 節）
　1)過去の例(5－7)　　2)偽教師の正体(8-13)
　3)未来の審判(14-16)
3．信者の義務（17ー23 節）
　1)信仰の上に自分自身を築き上げること(20)
　2)聖霊によって祈ること(20 節)
　3)神の愛のうちに自分自身を保つこと(21)
　4)キリストのあわれみを待ち望むこと(21)
　5)疑いを抱く人をあわれむこと(22)
　6)危険からつかみ出して救うこと(23)
　7)汚れたものを忌み嫌うこと(23)
4．賛栄（24ー25 節）

●ユダの手紙の構造：

1ー4 節	5 -16 節	17-23 節	24-25 節
記録目的	偽教師の正体	信徒の義務	信者賛栄

66．ヨハネの黙示録(The Book of the Revelation)

●ヨハネの黙示録の書名と著者：

この書簡は、イエス・キリストの黙示(1:1)に基づいて書かれたものです。黙示とは、包み隠されたものを現すという意味で、この書簡には、幻や象徴で表現されたところが多く、特殊な表現法で書かれたことで、難解な書として有名です。しかし全体の意義と内容は、だれにでも分かるやさしい書簡です。著者は使徒ヨハネで、95-96 年頃パトモスという島（エペソから南西約 90 キロのエーゲ海上にある島）で書かれたと思われます。

●ヨハネの黙示録の目的：

この書簡の目的は、冒頭に書いてあるとおりです。「すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったもの」がそれです。すぐに起こるはずのこととその目的とは、

①当時の試練や迫害を受けているアジアの七つの教会の信者たちにすぐに起こることを知らせ、慰めてあげることです。

②未来の出来事を中心として歴史に対する神様の計画を教え、その中でどのように生きるべきかを示すことです。

●教えられること：

1)聖書の他の書でも未来のことを扱っていますが、この書簡のように徹底的に扱っている書はありません。

2)多くの幻と象徴、数字が書いてあり、解釈において異見が多いこともこの書の一つの特徴です。

3)イエス様が終わりの時にどのように勝利なさるかについて明確に示しています。同時に、神の御国は最終的に、すべての悪に対して完全に勝利することを明確にし、宣言しています。

4)「苦難の時期のための預言書」として、読む者に励ましと確信とを与える最高の書物です。

ヨハネの黙示録　全 22 章（405 節）

ヨハネの黙示録は、教会迫害の中にある信徒たちを励まし、慰めるために将来における世界の終末について語られたものです。

●ヨハネの黙示録の内容：

1．表題とあいさつ（1:1ー8)
2．過去の啓示（1:9ー20）
3．現在の啓示／アジアの七つの教会へ（2:1ー3:22）
4．未来の啓示（4:1ー22:5）
　1)天の御座(4:1-11)
　2)封印で封じられた七つの巻き物(5:1-14)
　3)七つの封印の災害(6:1-8:1)
　4)七つのラッパの災害(8:2-14:20)
　5)七つの鉢の災害(15:1-16:21)
　6)最後にある七つ(20:1-22:5)
5．結語（22:6ー21）

●ヨハネの黙示録の構造：

1 章	2-3 章	4 章ー22:5	22:6-22
表題と過去の啓示	アジアの教会	未来の啓示 七つの封印・ラッパ、鉢の災難と主の再臨、新天新地など	結語